

埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書 第235集

久喜市

道合中 / 光明寺

都市計画道路西停車場線建設事業関係埋蔵文化財発掘調査報告

2000

財団法人 埼玉県埋蔵文化財調査事業団

序

埼玉県では豊かな彩の国の国づくりを目指し、県民が地域社会の中で、ゆとりと安らぎのある生活ができる基盤づくりを進めています。

人口の増加が続くなか、県民の生活を支えるための道路網の整備も、その一環として進められています。

都市計画道路西停車場線の建設も、県民の快適な生活や地域間の連携を深めるための施策の一つとして計画されたものです。

都市計画道路西停車場線用地内には、道合中遺跡と光明寺遺跡の所在が確認され、その取扱いについては、関係機関が慎重に協議を重ねてまいりましたが、やむをえず現状保存ではなく、記録保存の措置を講じることになりました。そのための発掘調査は、埼玉県教育局生涯学習部文化財保護課の調整により、当事業団が埼玉県の委託を受け、実施しました。

遺跡の所在する久喜市には、原始から中・近世にかけての遺跡が、数多く分布している地域です。道合中遺跡と光明寺遺跡が立地する台地上には、旧石器時代から近世にかけての遺跡が集中しています。特に中世から近世にかけての遺跡では、県指定史跡の足利政氏館跡をはじめ、米津溝の陣屋跡と考えられる、御陣山

遺跡があります。

発掘調査の結果、道合中遺跡では縄文時代住居跡や土壌の他、中・近世の建物跡や土壌、堀跡などが発見され、足利政氏館跡との関連を考える上で貴重な資料を得ることができました。光明寺遺跡では、近世の区画溝や土壌などが発見され、当時の生活を知ることのできる豊富な遺物が出上りました。

本書はこれらの成果をまとめたものであります。本書が、埋蔵文化財の保護に関する教育・普及の資料として、また学術研究の基礎資料として、広く御活用いただければ幸いと存じます。

刊行にあたり、発掘調査に関する諸調整に御尽力をいただいた埼玉県教育局生涯学習部文化財保護課をはじめ、埼玉県住宅都市部都市整備課、埼玉県杉戸土木事務所、久喜市教育委員会並びに地元関係者各位に深く感謝申し上げます。

平成12年2月

財団法人 埼玉県埋蔵文化財調査事業団
理事長 荒井 桂

例言

1. 本書は、埼玉県久喜市に所在する道合中・光明寺遺跡の発掘調査報告書である。
2. 遺跡の略号と代表地番及び発掘調査届けに対する指示通知は、以下のとおりである。

道合中遺跡（DAN）
久喜市本町6丁目15番地
平成10年9月11日付け教文第2-220号

光明寺遺跡（KMYJ）
久喜市本町1丁目
平成10年7月14日付け教文第2-69号
3. 発掘調査は、都市計画道路西停車場線建設に伴う事前調査であり、埼玉県教育局生涯学習部文化財保護課が調整し、埼玉県の委託を受け、財団法人埼玉県埋蔵文化財調査事業団が実施した。
4. 本事業は、第1章の組織により実施した。本事業のうち、道合中遺跡の発掘調査は、橋本勉、若島勝秀が担当し、平成10年1月1日から3月31日まで、光明寺遺跡の発掘調査は、宮井英一、田中広明が担当し、平成10年8月1日から9月30日まで実施した。整理報告書作成事業は君島が担当し、平成11年8月1日から平成12年2月29日まで実施した。
5. 遺跡の基準点測量については、道合中遺跡を株式会社バスコに、光明寺遺跡をアジア航測株式会社へ委託した。
6. 道合中遺跡の航空写真測量については、株式会社バスコに委託した。
7. 発掘調査における写真撮影は、橋本、君島、宮井、田中が行い、遺物の写真撮影は大岸道則の協力を得た。
8. 出土品の整理及び図版の作成は、君島が行った。
9. 石器の石質鑑定は町田瑞男の協力を得た。
10. 本書の執筆はI-1を埼玉県教育局生涯学習部文化財保護課が、他を君島が行った。
11. 本書の編集は、君島があたった。
12. 本書にかかる資料は平成12年度以降、埼玉県立埋蔵文化財センターが保管する。
13. 本書の作成にあたり、久喜市教育委員会、駒西町教育委員会、浅野晴樹、島村範久、中村和夫の諸氏から御教示、ご協力を賜った。記して謝意を表します。

凡例

1. 本書におけるX、Yによる座標数値は、国土地院
平面直角座標Ⅱ系に基づく座標値を示している。
各遺構図における方位指示は、全て座標北を示し
ている。
2. グリッドの区画は、各遺跡の全体図に示した。道
合中遺跡では10mを1単位、光明寺遺跡では5m
を1単位とした。グリッド名は、北西隅の坑名称
を用いた。
3. 挿入図の縮尺はスケールと縮尺率をその都度示した
が、原則としては以下のとおりである。
[遺構] 住居跡・掘立柱建物跡・土塼・井戸跡・
ピット 1/60
[縄文遺物] 縄文土器実測図 1/5
縄文土器拓印図 1/3
スリパ・敲石・磨石・石皿 1/3
石鎌・石錐 1/2
[中・近世遺物] 陶磁器・土器実測図 1/3
播鉢・鍋・鉢・焙烙(完形) 1/4
瓦・板碑・石皿・五輪塔 1/4
鉄製品・軽石 1/3 古銭 1/2
4. 本書における遺構の略号は原則として以下のとお
りである。
S J (住居跡) SB (掘立柱建物跡) S Q
(欄列) SK (土塼) SD (溝) SE (井
戸跡) P (ピット)
5. 遺構断面図における水平数値は、海拔高度を示し
ており、単位はmである。
6. 遺構図および遺物実測図中のスクリーントーンは
以下のものを示す。
 - ・住居内の炉跡・焼土
 - ・縄文土器展開図の縄文施文範囲
 - ・石器のタール状付着物
 - ・陶磁器の施釉(無色釉を除く)
 - ・磁器の焼継痕
7. 遺構図・遺物分布図中に示した点と接合線は遺物
の出土位置と接合関係を示し、番号は遺物実測図
のそれと一致する。
8. 遺物観察表の凡例は以下のとおりである。
 - ・法量の()内の数値は推定値であり、単位はcm
である。
 - ・胎土は主に肉眼で観察された含有物を以下の記号
に示した。
白：白色粒子 赤：赤色粒子 黒：黒色粒子
酸：酸化鉄粒子 砂：小石・砂粒 雲：雲母
針：白色針状物 片：片岩 石：石英
 - ・焼成はA(良好) B(普通) C(不良)の3ラン
クに分類した。
 - ・色調・胎土色は「新版標準土色帳」(農林省水産
技術会議事務局監修1967)に照らし、最も近似し
た色相を記した。
 - ・残存率は、実測図に現した部位を100%として算
定したもので、5%刻みで表し、5%未満は省略
した。
9. 第Ⅱ章に掲載した遺跡分布図は、建設省国土地理
院発行の1/50,000地形図「鴻巣」[大宮]を使用し
た。

目次

序
例言
凡例
目次

I 発掘調査の概要	1	(2) 井戸跡	65
1. 調査に至る経過	1	(3) 土壌	71
2. 発掘調査・報告書作成の経過	2	(4) 溝	82
3. 発掘調査・整理・報告書刊行の組織	3	(5) ビット	91
II 遺跡の立地と環境	4	(6) グリッド出土遺物	91
III 道合中遺跡	8	IV 光明寺遺跡	93
1. 遺跡の概要	8	1. 遺跡の概要	93
2. 縄文時代	12	2. 縄文時代	96
(1) 住居跡	12	3. 中・近世	98
(2) 土壌	39	(1) 検出遺構	98
(3) ビット	51	(2) 出土遺物	111
(4) グリッド出土遺物	53	V 結語	120
3. 中・近世	59	引用・参考文献	124
(1) 掘立柱建物跡	59		

挿 図 目 次

第1図	埼玉の地形	4	第36図	第12号住居跡出土遺物	37
第2図	道合中・光明寺遺跡と周辺遺跡	5	第37図	第13号住居跡	38
第3図	遺跡位置図	7	第38図	第13号住居跡出土遺物	38
第4図	道合中遺跡全体図	8	第39図	土壌(縄文時代)(1)	40
第5図	A区(1)	9	第40図	土壌(縄文時代)(2)	41
第6図	A区(2)	10	第41図	土壌(縄文時代)(3)	42
第7図	B区	11	第42図	土壌(縄文時代)(4)	43
第8図	第1・2号住居跡	13	第43図	土壌(縄文時代)(5)	44
第9図	第3号住居跡	13	第44図	土壌(縄文時代)(6)	45
第10図	第4号住居跡	14	第45図	土壌(縄文時代)出土遺物(1)	49
第11図	第4号住居跡出土遺物	14	第46図	土壌(縄文時代)出土遺物(2)	50
第12図	第5号住居跡	15	第47図	土壌(縄文時代)出土遺物(3)	51
第13図	第5号住居跡出土遺物	15	第48図	ピット(縄文時代)	52
第14図	第6号住居跡(1)	16	第49図	ピット(縄文時代)出土遺物	52
第15図	第6号住居跡(2)	17	第50図	グリッド出土遺物(縄文時代)(1)	55
第16図	第6号住居跡遺物分布図	17	第51図	グリッド出土遺物(縄文時代)(2)	56
第17図	第6号住居跡出土遺物(1)	19	第52図	グリッド出土遺物(縄文時代)(3)	57
第18図	第6号住居跡出土遺物(2)	20	第53図	グリッド出土遺物(縄文時代)(4)	58
第19図	第6号住居跡出土遺物(3)	21	第54図	第1・6・7号掘立柱建物跡・第1号柵列(1)	60
第20図	第6号住居跡出土遺物(4)	22			60
第21図	第7号住居跡	25	第55図	第1・6・7号掘立柱建物跡・第1号柵列(2)	61
第22図	第7号住居跡跡・出土遺物	25			61
第23図	第7号住居跡出土遺物(1)	26	第56図	第2号掘立柱建物跡・出土遺物	62
第24図	第7号住居跡出土遺物(2)	27	第57図	第3号掘立柱建物跡	63
第25図	第7号住居跡出土遺物(3)	28	第58図	第4号掘立柱建物跡	63
第26図	第8号住居跡	30	第59図	第5号掘立柱建物跡	64
第27図	第8号住居跡出土遺物	30	第60図	第8号掘立柱建物跡	64
第28図	第9号住居跡	32	第61図	井戸跡	66
第29図	第9号住居跡出土遺物	32	第62図	井戸跡出土遺物(1)	67
第30図	第10号住居跡	33	第63図	井戸跡出土遺物(2)	68
第31図	第10号住居跡出土遺物	33	第64図	井戸跡出土遺物(3)	69
第32図	第11号住居跡	34	第65図	井戸跡出土遺物(4)	70
第33図	第11号住居跡出土遺物	34	第66図	土壌(中・近世)(1)	75
第34図	第12号住居跡(1)	36	第67図	土壌(中・近世)(2)	76
第35図	第12号住居跡(2)	37	第68図	土壌(中・近世)(3)	77

第66図	土城(中・近世)(4)	78
第70図	土城(中・近世)(5)	79
第71図	土城(中・近世)(6)	80
第72図	土城(中・近世)出土遺物	81
第73図	第1・2号溝・ピット	83
第74図	第3～6号溝・ピット	84
第75図	第7～10号溝・ピット	85
第76図	第11～13号溝	86
第77図	第14～17号溝	88
第78図	ピット(中・近世)出土遺物	91
第79図	グリッド出土遺物(中・近世)	92
第80図	光明寺遺跡全体図	94
第81図	土城(縄文時代)	96
第82図	土城(縄文時代)出土遺物	97
第83図	A区井戸跡・土城(1)	100

第84図	A区井戸跡・土城(2)	101
第85図	A区溝・ピット	102
第86図	B区遺構	104
第87図	C区遺構	105
第88図	D区遺構	106
第89図	E区遺構	108
第90図	F・G区遺構	108
第91図	I～L区遺構	109
第92図	中・近世出土遺物	112
第93図	近世出土遺物(1)	114
第94図	近世出土遺物(2)	115
第95図	近世出土遺物(3)	116
第96図	近世出土遺物(4)	117
第97図	道合中遺跡出土土器変遷図	121
第98図	関連遺跡出土土器変遷図	122

図 版 目 次

図版1	道合中遺跡遠景・道合中遺跡調査区・第4～7号住居跡・第6号住居跡跡
図版2	第8～12号住居跡・第17号溝・A区中・近世遺構
図版3	第6・7号住居跡出土遺物
図版4	第7・12号住居跡・第114号土城・第213～215号ピット出土遺物
図版5	第6号住居跡出土遺物
図版6	第6号住居跡出土遺物
図版7	第6・7号住居跡出土遺物
図版8	第7・8号住居跡出土遺物
図版9	第9・10号住居跡出土遺物
図版10	第13号住居跡出土遺物・小型石器
図版11	第6・7号住居跡出土遺物(石器)
図版12	第1号掘立柱建物跡・第1・2・5号井戸跡出土遺物

図版13	第5～7号井戸跡出土遺物
図版14	第7号井戸跡・第4～6・16・47号土城・第180号ピット出土遺物
図版15	第169号ピット・グリッド出土遺物・古銭
図版16	第1・5号井戸跡出土遺物・鉄製品
図版17	板碑・軽石
図版18	光明寺遺跡A～E区・第56号土城
図版19	光明寺遺跡F・G・I区・第2・67号土城・I区出土遺物
図版20	第23号溝・第89・90号土城出土遺物
図版21	A区・第90号土城・第2・23号溝出土遺物
図版22	E区・第83・85・89号土城・第23号溝出土遺物・泥面子・ミニチュア玩具
図版23	第9・20・22・28号土城出土遺物
図版24	磁器
図版25	瓦・古銭

I 発掘調査の概要

1. 発掘調査に至る経過

埼玉県では快適な県民生活と活力ある社会経済活動を支える円滑な道路交通網の形成を目指しているところである。その中で、久喜駅西口周辺の交通混雑解消と快適な生活環境の創造を実現するため都市計画道路西停車場線が計画された。

埼玉県教育局生涯学習部文化財保護課では、このような施策の推進と文化財の保護について、従前から関係部局との事前協議を重ね、調整を図ってきたところである。

都市計画道路西停車場線にかかる埋蔵文化財の所在および取り扱いについては、平成9年4月4日付け都整第19号で、埼玉県住宅都市部都市整備課長から埼玉県教育局生涯学習部文化財保護課長あて照会があった。文化財保護課では確認調査を実施し、その結果をもとに、平成9年6月17日付け教文第405号、同年11月5日付け教文第1050号及び平成10年3月23日付け教文第1615号で、道合中遺跡及び光明寺遺跡の取扱いについて次のように回答した。

1 埋蔵文化財の所在

名称(No.)	種別	時代	所在地
道合中遺跡 (No.79-014)	集落跡	縄文・奈良	久喜市本町 6丁目他
光明寺遺跡 (No.79-020)	集落跡	縄文・奈良 中世・近世	久喜市本町 1丁目他

2 取扱い

上記の埋蔵文化財埋蔵地は、現状保存することが望ましいが、事業計画上やむを得ず現状を変更する場合は、事前に文化財保護法第57条の3の規定に基づく文化庁長官当への発掘通知を提出し、記録保存のための発掘調査を実施すること。

発掘調査については、実施機関である財団法人埼玉県埋蔵文化財調査事業団と都市整備課と文化財保護課の三者により調査方法、期間、経費などを中心に協議が行われた。その結果、道合中遺跡については平成10年1月1日から平成10年3月31日までの期間で、また光明寺遺跡については平成10年8月1日から平成10年9月30日までの期間で、発掘調査を実施することになった。

文化財保護法第57条の3の規定による埋蔵文化財発掘通知が埼玉県知事から提出され、第57条1項の規定による発掘調査届が財団法人埼玉県埋蔵文化財調査事業団理事長から提出された。

発掘調査に係る通知は以下のとおりである。

道合中遺跡

平成10年9月11日付け教文第2-220号

光明寺遺跡

平成10年7月14日付け教文第2-69号

(文化財保護課)

2. 発掘調査・報告書作成の経過

(1) 発掘調査

道中遺跡

調査は平成10年1月から3月までの3ヶ月間実施した。調査面積は2400㎡である。市道を挟んで調査区域が二つに分割されることから、南側をA区、北側をB区とし、A区から調査を開始した。

事務所ユニットの設置、調査区域の囲柵から開始し、1月10日からは重機を用いて表土除去し、直ちに遺構の確認作業に入った。調査区南端には厚い黒色土が堆積し、当初は中世の堀跡かと思われたが、精査の過程で谷に向かう斜面であることがわかった。他の部分はほぼ平坦で、地表下20~40cmでローム層面が現れ、遺構確認できる状況になった。

遺構確認の結果、A区南半部を中心に、長方形の土壌とピットが夥しく重複した状態が検出された。表土や覆土上面からは、かわかけの破片が出土したことから、中・近世の土壌群の存在が想定された。A区北部では円形の住居跡と楕円形の比較的浅い土城が多く検出され、遺構確認面から縄文中期の土器が採集されたことから、縄文時代中期の遺構群を想定し、調査を進めた。A区の西側市道に沿った帯状部分では、地山が削平されており、遺構を確認できなかった。

遺構確認後、直ちに基準点の測量を行い、10m1単位のグリッドを設定した。3月初旬には、A区の遺構精査をほぼ完了し、B区の遺構精査を開始した。B区では縄文時代中期の住居跡や土壌とともに、長方形の土壌や幅広い堀跡が検出された。

3月中旬には、全ての遺構精査を完了し、遺構の平面図作成を行った。また、各遺構の写真撮影を行った。

3月下旬には、航空写真測量を実施し、遺物、図面などの記録用の引き上げ、事務所ユニットの撤去を行い、全ての作業を終了した。

光明寺遺跡

調査は平成10年8月1日から9月30日までの2ヶ月

間実施した。調査面積は1200㎡である。

本来の調査区域には縦軸に市道が長く貫き、さらに市道と生活道が数本横断するため、調査区は12ヶ所に細分され、各調査区は狭い面積となった。このため、調査区を北からA~L区とし、5m1単位でグリッドを設定した。

事務所ユニットの設置、調査区域の囲柵から開始し、各調査区の重機による表土除去作業を行った。表土の除去は、現地表から約70cm下のソフトローム層まで掘り下げて、遺構確認を行った。近接して甘楽院や光明寺などの名刹があることから、当初中・近世の遺構の存在が予想された。遺構確認の結果、土塚、溝、井戸などが検出された。遺構覆土から出土した遺物は、江戸時代を中心とする中・近世の遺物である。

9月下旬には、各遺構の精査を完了し、遺構の平面図作成を行い、器材の引き上げ、事務所ユニットの撤去し、全ての作業を終了した。

(2) 報告書作成

平成11年8月1日から同年12月末日までの期間実施した。8月から出土遺物の接合・復元作業を行い、並行して遺構図面の第2次図版の作成を行った。10月から遺構図のトレースを開始し、11月下旬には遺構図版の作成を終了した。

一方、接合・復元を完了した遺物については9月から実測・拓本を開始した。9月下旬から遺物実測図のトレースを開始し、11月下旬には遺物図版の作成を終了した。

写真については11月初旬に遺物の撮影を行い、遺構と遺物の写真図版を作成し、11月下旬に完了した。

10月から原稿の執筆、データ処理、地形図、分布図、表などの各種図版の作成を行い、12月初旬には割付作業を開始し、同月下旬に完了した。12月末に入校し、校正作業を経て2月末に報告書を刊行した。

3. 発掘調査・整理・報告書刊行の組織

主体者 財団法人埼玉県埋蔵文化財調査事業団

(1) 発掘調査

平成9年度

理 事 長	荒 井 桂
副 理 事 長	富 田 真 也
専 務 理 事	塩 野 博
常務理事兼管理部長	稲 葉 文 夫
理事兼調査部長	梅 沢 太 久 夫

管理部

庶 務 課 長	依 田 透
主 査	西 沢 信 行
主 任	長 滝 美 智 子
主 任	腰 塚 雄 二
専門調査員兼経理課長	関 野 栄 一
主 任	江 田 和 美
主 任	福 田 昭 美
主 任	菊 池 久

調査部

調 査 部 副 部 長	今 泉 泰 之
調 査 第 一 課 長	井 上 尚 明
主 査	橋 本 勉
主 任 調 査 員	君 島 勝 秀

平成10年度

理 事 長	荒 井 桂
副 理 事 長	飯 塚 誠 郎
常務理事兼管理部長	鈴 木 進

管理部

庶 務 課 長	金 子 隆
主 査	田 中 裕 二
主 任	長 滝 美 智 子
主 任	腰 塚 雄 二
専門調査員兼経理課長	関 野 栄 一
主 任	江 田 和 美
主 任	福 田 昭 美
主 任	菊 池 久

調査部

調 査 部 長	谷 井 彪
調 査 部 副 部 長	水 村 孝 行
調 査 第 二 課 長	浅 野 晴 樹
総 括 調 査 員	宮 井 英 一
主 任 調 査 員	田 中 広 明

(2) 整理・報告書刊行

平成11年度

理 事 長	荒 井 桂
副 理 事 長	飯 塚 誠 郎
常務理事兼管理部長	広 木 卓

管理部

副部長兼経理課長	関 野 栄 一
主 任	福 田 昭 美
主 任	腰 塚 雄 二
主 任	菊 池 久
庶 務 課 長	金 子 隆
主 査	田 中 裕 二
主 任	江 田 和 美
主 任	長 滝 美 智 子

資料部

資 料 部 長	高 橋 一 夫
専門調査員兼副部長	石 岡 憲 雄
主 任 調 査 員	君 島 勝 秀

II 遺跡の立地と環境

道台中遺跡・光明寺遺跡はJ R東北本線久喜駅から北西約1 kmに位置する。

埼玉県の北東部には、県境を流れる利根川と大宮台地に挟まれて広大な加須低地が分布する。現在の加須市を中心とするこの地域は、洪積時には大宮台地と群馬県南部の館林台地とを繋ぐローム台地だったが、その後の関東造盆地運動によって低地化した地域である。古墳時代に降に活発化した地殻変動による沈降運動の結果、この地域のローム台地は低地へ埋没するとともに、元荒川・古利根川の流入を促し、以後流路の変遷・氾濫を繰り返してきた。

こうした長期間にわたる低地化と地形の変化によって、それ以前まで地続きだった群馬県南部の館林台地と大宮台地とが切り離され、現在の加須市域を中心とする広大な地域に加須低地が形成された。

低地内には低地との比高の小さい狭小なローム台地がわずかに点在する一方で、旧河川の流路跡や自然堤

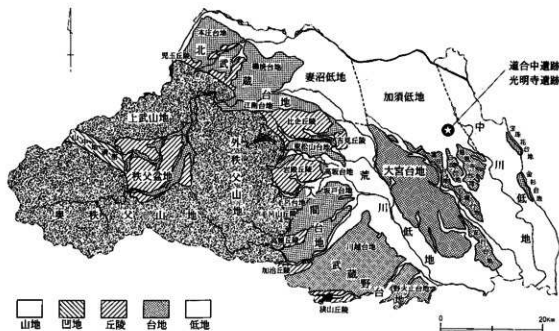
防、後背低地が数多く形成された。結果、微高地と低地とが入り組んだ複雑な地形を発達させている。

道台中遺跡と光明寺遺跡は、加須低地内に残る北西から南東方向に伸びる細長いローム台地上に立地している。

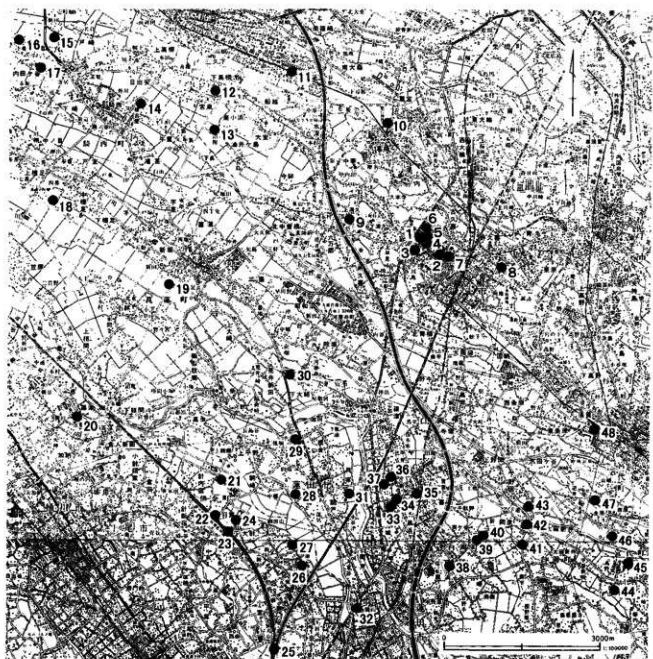
両遺跡の所在する久喜市は、地形的には加須低地の南東部に当たり、大宮台地の北辺に接して位置する。地理的に見ると、北は栗橋市中心部と蓮田市中心部とのほぼ中間に位置する。栗橋から利根川を挟んで北側は栃木県、東側は茨城県に境を接している。こうした地理的特徴は、縄文時代におけるこの地域の様相を考える上でひとつの留意点となる。

縄文時代、現在の加須低地一帯は、いまだ館林台地と大宮台地とを繋ぐローム台地だったと考えられている。さらに縄文時代前期をピークとする縄文海進によって、当時の海城は中川低地を深く進入し、現在の栗橋付近にまで達し、奥東京湾を形成していた。こうし

第1図 埼玉の地形



第2図 道合中・光明寺遺跡と周辺遺跡



- 1 道合中遺跡 2 光明寺遺跡 3 道合遺跡 4 甘常院西遺跡 5 足利政氏館跡 6 足利遺跡 7 御陣山遺跡 8 高輪寺遺跡 9 清久氏館跡 10 堀之内遺跡 11 花崎城跡 12 高柳氏館跡 13 油井城跡 14 私市城跡 15 崎城跡 16 道智氏館跡 17 多賀谷氏館跡 18 種垂城跡 19 萬籬城跡 20 後谷遺跡 21 戸崎前遺跡 22 原遺跡 23 北遺跡 24 大針貝塚 25 伊奈氏屋敷跡 26 氷川神社裏遺跡 27 小貝戸貝塚 28 上関戸貝塚 29 井沼遺跡 30 皿沼遺跡 31 綾瀬貝塚 32 関山貝塚 33 タタラ山遺跡 34 山遺跡 35 南鬼窪氏館跡 36 人耕地遺跡 37 茶屋遺跡 38 雅楽谷遺跡 39 前田遺跡 40 鶴巻遺跡 41 本田下遺跡 42 下道遺跡 43 清左衛門遺跡 44 坊荒句北・坊荒句遺跡 45 竹之下遺跡 46 前原遺跡 47 山崎山南遺跡 48 身代神社遺跡

た地形環境は、陸路からは館林台地を経て群馬方面、海路によって栃木、茨城方面、南部は大宮台地を経て千葉などの東京湾沿岸方面への交通を可能にする。久喜市周辺部は縄文時代、こうした多方面からの情報を受けやすい位置にあったことは想像に難くない。

道合中遺跡・光明寺遺跡が立地するローム台地上には、県指定史跡である足利政氏館跡(5)をはじめ、道合遺跡(3)、足利遺跡(6)、御陣山遺跡(7)など11ヶ所の遺跡が集中して分布する。このうち、縄文時代の遺跡では、道合遺跡、甘棠院西遺跡(4)、足利遺跡、光明寺南遺跡などがあげられる。道合遺跡では中期終末の土壇1基と安行Ⅰ・Ⅱ式を中心とする土器が出土している。甘棠院西遺跡では中期終末の住居跡2軒(山本他1983)、足利遺跡では加曾利E式から称名寺式期の住居跡5軒が検出された他、早期から後期までの遺物が出土している(鈴木他1980)。光明寺南遺跡は今回報告する光明寺遺跡の範囲内に位置するもので、堀之内Ⅱ式期の住居跡2軒と土壇1基が検出されている(中村1988)。狭い台地上に縄文時代のほぼ全般を通して遺跡が立地しており、各時期の立地の変遷や各遺跡の関係などが注目される。

さらに周辺の遺跡を見てみると、同じ続きの台地上に高輪寺遺跡(8)、鷲宮町城に堀之内遺跡(10)がある。高輪寺遺跡では関山式期の住居跡1軒(山本他1979)が、堀之内遺跡では黒浜式期と堀之内式期の住居跡が各1軒検出されている(横川1972)。

大宮台地の緑辺部には、当時の環境を反映して、縄文時代の貝塚が数多く分布している。現在の蓮田市、白岡町、春日部市の一部が乗る大宮台地北東部の蓮田支台、白岡支台、慈恩寺支台は、道合中遺跡・光明寺遺跡から約10km圏内に位置する。これらの地域には、貝塚をはじめ、縄文時代の遺跡が集中して分布している。前期関山式・黒浜式土器の標式遺跡である関山貝塚(32)、後・晩期の遺物が豊富に出土した雅楽谷遺跡(38)、花積下層式土器の標式遺跡である花積貝塚など、学史上著名な遺跡や大宮台地を代表する遺跡も多く存在し、大宮台地における縄文遺跡の宝庫ともい

える。蓮田支台北部に位置する上関戸貝塚(28)、綾瀬貝塚(31)などの存在は、縄文海進が狭い小支谷まで進入したことを物語っている。

伊奈町北部でも、上越新幹線開通や近年の土地区画整理などに伴って、縄文時代の遺跡の調査例が増えてきている(21~24)。

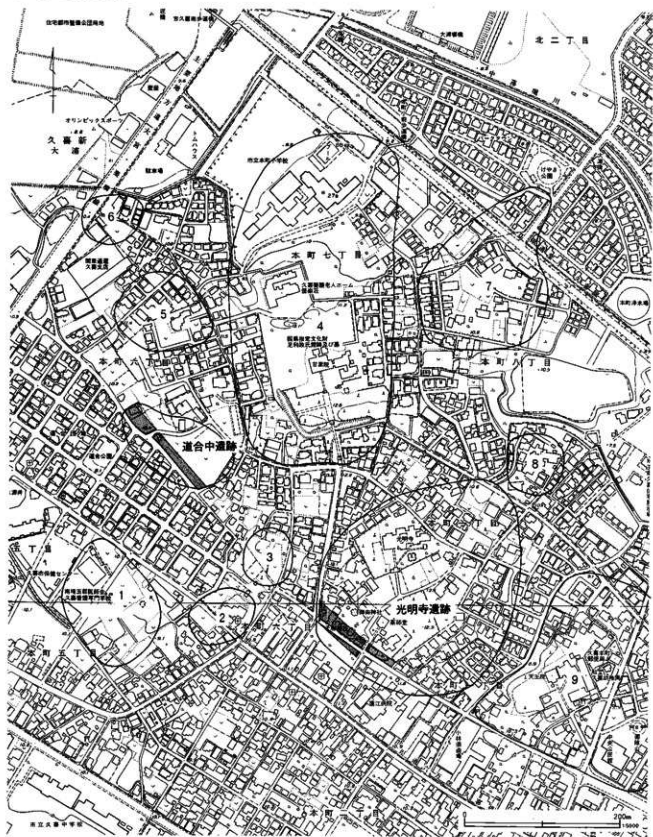
今回報告する道合中遺跡では、加曾利E式期の住居跡が多数検出され、加曾利E式後半期の資料が出土している。この点で同時期の関連遺跡を近隣で見ると、白岡支台では山遺跡(34)、鶴巻遺跡(40)、慈恩寺支台では下道遺跡(42)、坊荒句北・坊荒句遺跡(44)、竹之下遺跡(45)、蓮田支台では皿沼遺跡(30)、伊奈町北部の戸崎前遺跡(21)、原遺跡(22)、北遺跡(23)などがあげられる。いずれも加曾利EⅡ式期またはEⅢ式期の集落と位置付けられる。

今回の調査では、道合中遺跡・光明寺遺跡から中・近世の遺構と遺物が検出された。近接する足利政氏館跡(5)をはじめとする中・近世の遺跡との関連が注目される。甘棠院の境内は第二代古河公方足利政氏の館跡であり、堀跡、土塁などが現在も残っている。

甘棠院西遺跡(4)では、中世の井戸と堀が検出された。堀は上幅1.5m、深さ0.8mの薬研堀で、足利政氏館跡に関連するものと見られている。また、甘棠院とその周辺では、鎌倉時代からの板石塔婆が多数存在することから、この地域帯には、足利政氏が館を構える以前から、豪族の館跡があった可能性が指摘されている(山本他1983)。御陣山遺跡(7)では近世の堀や井戸が検出された。江戸時代の譜代人名米津氏の久喜藩陣屋跡と考えられている(山本他1987)。

駒西町、菖蒲町などの久喜周辺部一帯は、15世紀から16世紀にかけて、古河公方と関東管領上杉氏の山内家、扇谷家の武力抗争の舞台となった地であり、台地上や周囲を低地に囲まれた微高地上の要所には、この時代に多くの城館跡が築かれた。西方には菖蒲城跡(19)、私市城跡(14)をはじめ、中世から近世にかけて多くの城館跡が知られている。

第3図 遺跡位置図



1 道合遺跡 2 道合南遺跡 3 道合東遺跡 4 足利政氏館跡・甘樂院西遺跡・足利遺跡 5 荒木山遺跡 6 馬場西遺跡 7 馬場遺跡 8 馬場南遺跡 9 御陣山遺跡

Ⅲ 道合中遺跡

1. 遺跡の概要

道合中遺跡は、加須低地内に北西—南東方向に細長く伸びるローム台地に立地する。このローム台地の標高は最高位約13mを測り、久喜市周辺部の中で最も標高の高い地点になる。地殻変動による低地化と河川の氾濫の中で、台地として残った地域と考えられ、旧石器時代から中・近世にかけて、現在11ヶ所の遺跡が集中している。

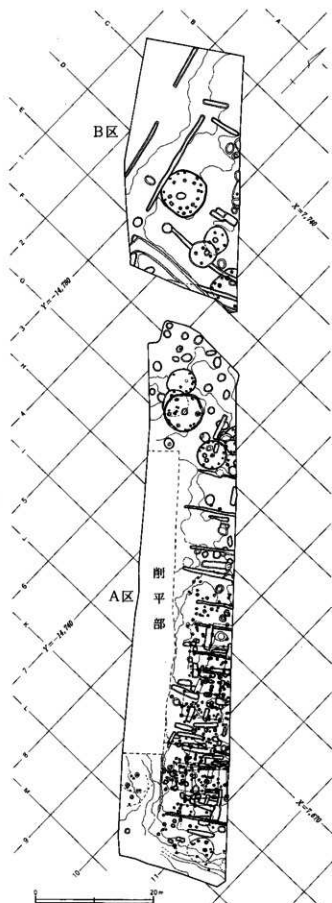
道合中遺跡は北西方向から小支谷が入り込む台地の縁辺部に位置する（第3図）。この谷地は現在「道合閉地」として住宅が密集し、台地部分は旧来の畑地に宅地化が進行している。遺跡の南西側には谷へと向かう緩やかな傾斜地が控える。遺跡の標高は10mを測り、入り込む谷地の最低地点と、遺跡が乗る台地面との現状での比高は、約2mになる。台地面は、遺跡部分でほぼ平坦になるものの、北東側にいくに従って徐々に高くなり、甘菜院境内で最高位の12.8mを測る。甘菜院には第二代古河公方足利政氏館跡が所在し、現在も堀跡、土塁跡などを地表面から観察することができる。境内を囲む堀から道合中遺跡までは最短で150mしか離れていない。

北西方向から入り込む谷地の縁辺部には、道合中遺跡をはじめ、道合遺跡、道合南遺跡、道合東遺跡などが周囲を取り囲むように位置している。これらの遺跡のうち、道合中遺跡は発掘調査が行われ、縄文時代中期終末期の上層が1基検出された他、後期安行Ⅰ・Ⅱ式土器を主体として、早期から晩期までの土器が出土している（中村1989）。道合南遺跡では縄文時代後期の土器片が採集されている（久喜市1989）。

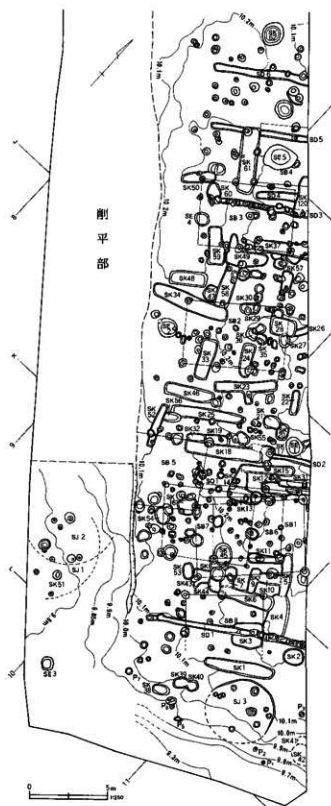
道合中遺跡の南東側の道合東遺跡との間には、谷地が入り込み、両遺跡を画している。この谷地形は、今回の調査によっても、調査区南端部で地山が急斜面となり、黒色土が厚く堆積することが確認された。

今回の調査区は、都市計画道路の建設に伴う調査のため、既設の市道に沿って北西—南東方向に細長く設

第4図 道合中遺跡全体図



第5図 A区(1)



定された(第4図)。調査区域は幅15~18m、全長約140mになる。途中市道によってA区とB区に分断される。調査面積は2400㎡である。地表面から地山の口

一面までは、耕作土が堆積し、調査区北東壁側で40~50cm、南西壁側では約20cmに達する。調査区内の地形は、A区南端で谷に向かう急斜面が始まるが、他はほぼ平坦な状態だった。A区の南西側はすでに地山が削平された状態で、遺構は確認できなかった。

今回の調査で検出された遺構は、縄文時代と中・近世とに分けられる。縄文時代の遺構は、住居跡13軒、土塼63基、ピット5基が検出された。中・近世の遺構は、掘立柱建物跡8棟、柵列1条、井戸跡7基、土塼58基、溝17条、ピット212基が検出された。

住居跡は後期初頭の1軒を除いてほとんどのものが、出土遺物から加曾利E式期のもものと判断される。住居跡の位置は13軒のうち、10軒がA区北部からB区南半部にかけて分布している。他の3軒はS J 1~3であり、A区南端の斜面縁辺部に位置する。これら3軒はいずれも出土遺物がなく、詳細な時期は不明だが、住居の形態と周辺から出土した遺物から、おそらく加曾利E式期のもと考えられる。

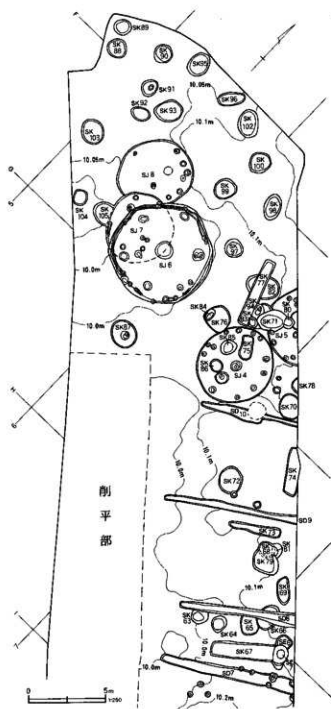
S J 6・7・8は3軒が重複する住居跡である。S J 6は平面形が六角形に近く、6本の主柱穴をもつ住居で、床面中央には炉体土器を伴う。覆土中から床面にかけては、完形に近い状態で多くの加曾利E式土器が出土した。S J 7はS J 6・8を切って構築され、S J 6の覆土中位に貼床し、炉体土器を伴っていた。覆土中から加曾利E式土器が多量に出土した。

S J 4・5・8・10~13は、平面形が円形または楕円形で、S J 4・8・10~12からは地床伊が検出された。覆土中からの出土遺物は少なく、埴壇や炉体土器などの完形品は出土しなかった。

S J 9は、平面形が隅丸方形と推定され、覆土中から加曾利E式土器に混じって後期初頭の土器が出土したことから、後期初頭と判断した。

縄文時代の上層は、A区のほぼ全域とB区南半部にかけて検出されたが、住居跡が分布する区域に最も集中する。土塼の形態は、平面が楕円形で底面が浅い皿状になるものが最も多い。S K 62は緩やかに窄まりながら深くなる。その他、S K 71・103・114はやや深く

第6図 A区(2)



なるもの、SK 83・85・94・106はバケツ状に円形に掘り込まれるものである。出土遺物はほとんどのものが加曾利E式土器で、土城の構築時期もほぼこの時期と考えられる。この他、SK 99から黒浜式土器と思われる繊維土器が出土した。SJ 13を切って構築されるSK 114の覆土中からは、加曾利EⅢ式土器の大型破

片が3個体出土した。

覆土の状況と出土遺物から確実に縄文時代のピットとして把握されたものは5基である。このうち、P 213は、SJ 10を切って構築され、覆土中からは後期安行式の粗製深鉢が大型破片で出土した。

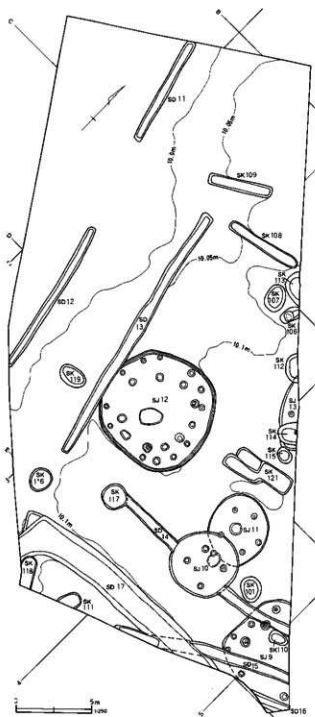
縄文時代の出土遺物では、最も多いのがSJ 6・7からの出土遺物である。時期別でも加曾利E式土器が最も多く、遺構外から黒浜式土器が一定量、早期熊糸文系土器、後・晩期土器が数点出土した。A区南端の斜面堆積層からは加曾利E式土器が多量に出土した。

中・近世のピット群はA区南半部に分布する。これらのうち、ピットの規則的な配置状況から8棟の掘立柱建物跡と柵列1条を確認した。SB 1～3は2間×3間、SB 6・7は2間×2間になる。掘立柱建物跡の多くが漸行を北東-南西方向に並べており、それぞれが関連する同時期的な建物だったと考えられる一方で、SB 1・5～7は同じ位置に重複していることから、建て替えなどの変遷があったことが窺える。

他のピット群の多くは、掘立柱建物跡のピットと規模や深さなどがほとんど共通しており、掘立柱建物跡の位置する区域に特に集中することから、やはり何らかの建物に関連する遺構だった可能性がある。単独ピットの覆土中からは、完形のかわらけや焙烙、内耳鍋の破片など中・近世の遺物が破片も含めて多く出土しており、規模や深さ、覆土の共通性などから考えて、掘立柱建物跡と柵列、ピット群は、中・近世の遺構として一括して考えてよいものと思われる。

井戸跡は7基検出された。SE 3を除く6基の井戸跡は、A区中央から南部にかけて、ピット群の分布する区域に位置することから、掘立柱建物跡やピット群との関連が予想される。井戸跡はいずれも楕円形で、底面までほぼ垂直に掘り込まれたもので、深さが約2m前後になる。覆土中からはかわらけ、灰釉陶器、焙烙、播鉢、板碑、石臼、五輪塔の水輪など、中・近世の遺物が一定量出土しており、今回、中・近世の遺構出土遺物の中で、最も多い出土を見た。SE 6・7は2基重複し、SE 6の底面近くからは、大窩I期のもの

第7図 B区



のと思われる灰釉皿と緑釉皿、SE7からはかわらけが数点出七した。

中・近世の土壌は58基検出された。調査区全城から検出されたが、最も集中するのはA区南半部で、ピット群や掘立柱建物跡の分布域に重なる。土壌の形態は、

ほとんどのものが長方形で底面が平円で箱型を呈する。覆土はしまりの弱い暗褐色上で、ロームブロックが多く、焼上粒子と炭化物を含むことが共通する。

長方形を呈する土壌の長辺の方位は、おおまかに見て北東—南西方向に軸をとるものと、南北からやや振れる北西—南東方向にとるもの二種類に分けることができる。この二種類のなかでも微妙な方位の違いから、さらに各二種類に分かれそうである。

土壌は重複するものがある一方で、同じ方位をとるものが間隔を置いて位置するもの存在する。重複する土壌群は同一方位のものが、長辺を重ねようになっているり、異なる方位をとるもの同士でも、短辺の部分が、相手の長辺に少し重なる程度の重複状態をしめしている。こうした重複の状態は、土壌を構築する際に、前もって構築された土壌の存在を意識していたことを窺わせるものである。これらの土壌群の分布状況は、ある時代の一定の時間幅で、連続的に構築された結果と考えることができる。土壌の覆土中からは、志野皿、天目茶碗、かわらけ、焙烙の破片の他、北末銭など、中・近世の遺物が出土している。

溝は17条検出された。これらのうち、SD1～10は、間隔を置いて北東—南西方向に並行して伸びており、一見して掘立柱建物跡の桁行と同方位をとるようにも見える。10条の溝は、共通して南西側で途切れ、北東側は調査区外へと続いている。溝幅、深さなどが共通しており、性格を同じくする遺構と思われる。掘立柱建物跡や土壌に重複しており、SD1・2では土壌を切って構築されることが確認された。SD1・3では溝内に小ピットを伴う。覆土の状況から、他の遺構と同じく中・近世の遺構の範疇として考えておくと、掘立柱建物跡や土壌との関係は不明である。

SD17は中・近世の堀跡である可能性が高い。遺構の規模は、溝幅2m、深さ70cmを測り、断面形が逆台形になる。現在の市道に沿って東西方向に伸び、西側で直角に近い状態で折れ曲がる。遺構の時期を判断できる遺物は出土しなかったが、遺構の形状から見て、足利政氏館跡の堀跡との関連が注目される。

2. 縄文時代

(1) 住居跡

第1・2号住居跡 (第8図)

K-9グリッドに位置する。東調査区南東部の削平区域から検出されたため、確認面ですでに床面がなく、炉跡と数基のピットで存在を確認した。炉跡が2基あることから2軒の住居跡をした。炉跡の周囲に7基のピットが検出された。

ピットの深さは $P_1=16\text{cm}$ 、 $P_2=15\text{cm}$ 、 $P_3=47\text{cm}$ 、 $P_4=48\text{cm}$ 、 $P_5=33\text{cm}$ 、 $P_6=15\text{cm}$ 、 $P_7=14\text{cm}$ 、 $P_8=14\text{cm}$ を測る。出土遺物もなく、遺構の詳細な時期は不明である。

第3号住居跡 (第9図)

K-11グリッドに位置する。調査区南東部の傾斜面に接する平地面で確認され、南側のプランを確認できなかったが、平面形態は円形になるものと思われる。

遺構の規模は、直径4.3m、深さ20cmを測る。

床面はほぼ平坦である。炉跡は位置的に P_1 と思われるが、覆土からの焼土の検出が不明確で、確認はない。

ピットの深さは $P_1=17\text{cm}$ 、 $P_2=46\text{cm}$ 、 $P_3=42\text{cm}$ 、 $P_4=37\text{cm}$ 、 $P_5=20\text{cm}$ 、 $P_6=46\text{cm}$ 、 $P_7=18\text{cm}$ 、 $P_8=16\text{cm}$ 、 $P_9=43\text{cm}$ を測る。主柱穴はピットの深さから、 P_2 または P_3 、 P_6 、 P_6 の3本柱になると思われる。

覆土中からの遺物の出土はないが、遺構上面の出土遺物から、縄文中期加曾利E式期の住居跡であると考えられる。

第4号住居跡 (第10図)

F・G-6グリッドに位置する。SK75・76・85・86が重複するが、新旧関係は不明である。南北方向に長径をとる楕円形プランの住居跡で、確認からろうじて掘り込みを残す。

遺構の規模は、長径5.0m、短径4.7m、深さ6cmを測る。床面はほぼ平坦で、やや軟質である。炉跡はほぼ中央部に位置し、覆土に焼土と炭化物を少量含む。検出されたピットの大半が、炉跡を中心にして壁際にめぐるように位置することから、壁柱穴による上屋構造だったものと推定される。

ピットの深さは $P_1=56\text{cm}$ 、 $P_2=64\text{cm}$ 、 $P_3=45\text{cm}$ 、 $P_4=63\text{cm}$ 、 $P_5=32\text{cm}$ 、 $P_6=51\text{cm}$ 、 $P_7=64\text{cm}$ 、 $P_8=40\text{cm}$ 、 $P_9=47\text{cm}$ 、 $P_{10}=37\text{cm}$ 、 $P_{11}=35\text{cm}$ 、 $P_{12}=38\text{cm}$ 、 $P_{13}=77\text{cm}$ を測る。床面上とピット内から縄文中期加曾利E式期の土器小片が少量ではあるが出土した。

出土遺物 (第11図)

6点とも加曾利E式の胴部破片である。1は2本沈線によって縄文部と無文部が区画される。2は地文縄文の胴部に、両際を丁寧になぞられた隆帯が懸垂する。3～5は磨消手法による無文帯が垂下する。6は細目文が施文される。いずれも胎土には片岩、砂粒を含み、黄褐色～褐色を呈する。

第5号住居跡 (第12図)

F-6グリッドに位置する。SK71・80に切られており、この遺構はSK71より古い。SK94とは壁際が重複するが、新旧関係は不明である。遺構の半分以上が調査区外に及ぶため、全容は不明だが、円形または楕円形の住居跡になるものと思われる。確認面からの掘り込みは浅いが、調査区境の壁面では表土から深さ23cmの掘り込みを観察できる。床面はほぼ平坦である。炉跡は P_1 と P_2 の間に位置する浅い皿状の窪みから焼土が少量検出され、炉跡になるものと思われる。検出されたピットは壁際を巡るものが多く、第4号住居跡同様に壁柱穴になるものと思われる。

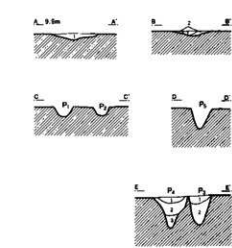
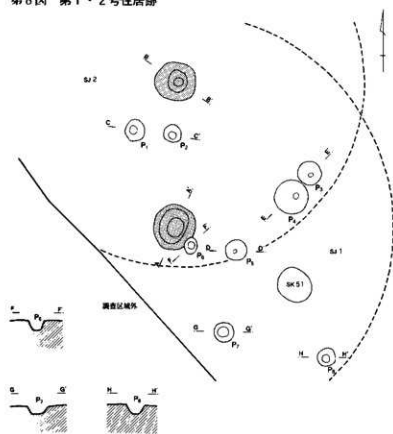
ピットの深さは $P_1=24\text{cm}$ 、 $P_2=38\text{cm}$ 、 $P_3=12\text{cm}$ 、 $P_4=19\text{cm}$ 、 $P_5=19\text{cm}$ 、 $P_6=38\text{cm}$ 、 $P_7=22\text{cm}$ 、 $P_8=46\text{cm}$ を測る。

床面上とピット内から縄文中期加曾利E式期をはじめとする土器破片が少量出土した。

出土遺物 (第13図)

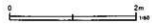
9点は中期後半から中期末葉にかけての土器破片である。1～5は加曾利E式のキャリバー形土器である。1は口縁部で、2本隆帯のよるモチーフになる。2～5は磨消懸垂文の胴部破片である。6は細かい細目文が施文される。7は内罅する口縁から胴部にかけて、口縁部に竹管状工具による2条の沈線内に同一工具で

第8図 第1・2号住居跡

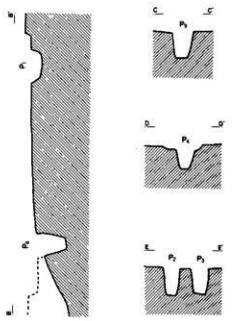
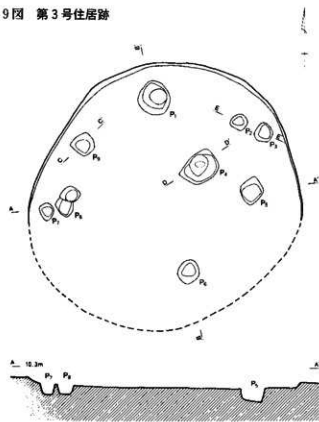


- 第1号住居跡の跡
 1 赤褐色土 焼上ブロック・焼土粒子・ロームブロック多量、炭化物少量。
 第2号住居跡の跡
 1 赤褐色土 炭化物、焼上ブロック・焼土粒子多量。
 2 暗褐色土 焼土粒子・炭化物少量。

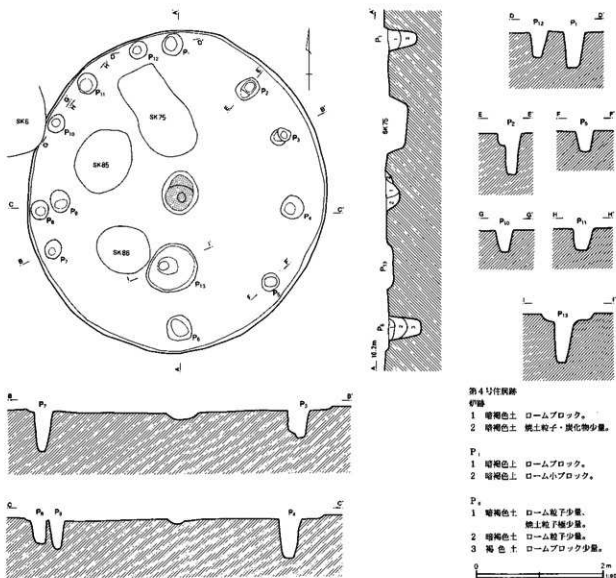
- P₁・P₂
 1 暗褐色土 rome粒子・炭化物・焼土粒子、鉄分多量。
 2 暗褐色土 鉄分・rome粒子少量。
 3 暗褐色土 romeブロック多量。



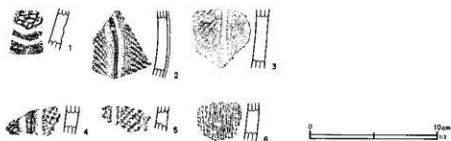
第9図 第3号住居跡



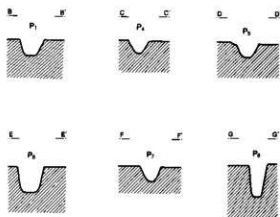
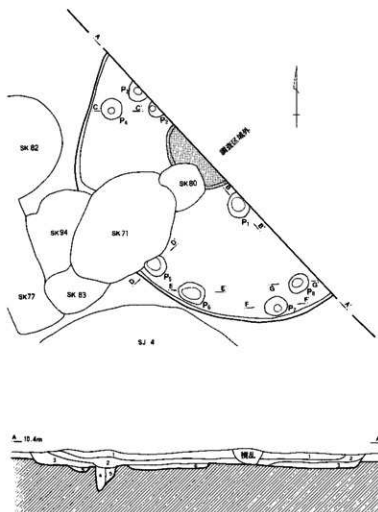
第10図 第4号住居跡



第11図 第4号住居跡出土遺物



第12図 第5号住居跡

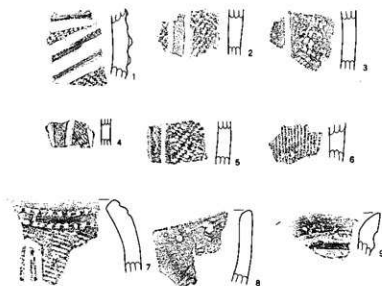


第5号住居跡

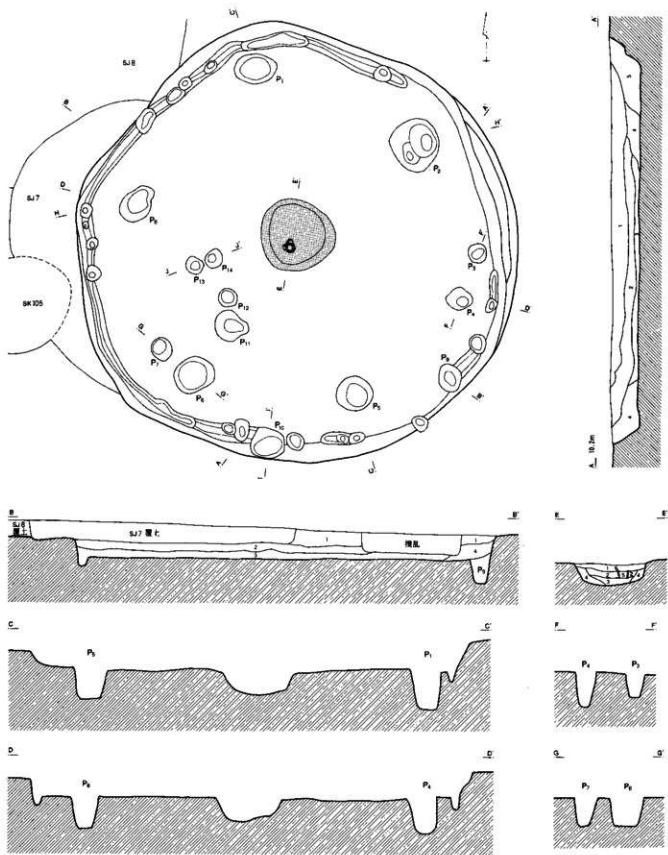
- 1 黒褐色土 ローム粒子・炭化物・ロームブロック少量。
- 2 黒褐色土 ロームブロック、ローム小ブロック・ローム粒子少量。
- 3 暗褐色土 ロームブロック
- 4 黄褐色土 ロームブロック多量、鉄少量。
- 5 黄褐色土 鉄分中多い。
- 6 黄褐色土 ロームブロック多量、炭粒子少量、砂粒覆土。



第13図 第5号住居跡出土遺物



第14図 第6号住居跡(1)



第6号住居跡

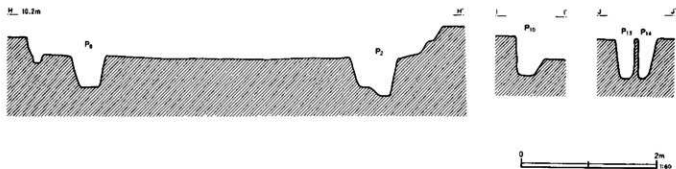
- 1 黒褐色土 ローム粒子・焼土粒子多量、炭化物少量。
- 2 暗褐色土 ローム粒子・ロームブロック・炭化物多量。
- 3 赤褐色土 焼土粒子多量、ローム粒子・炭化物少量。
- 4 褐色土 ローム粒子多量。
- 5 褐色土 ロームブロック多量。

灰燼層

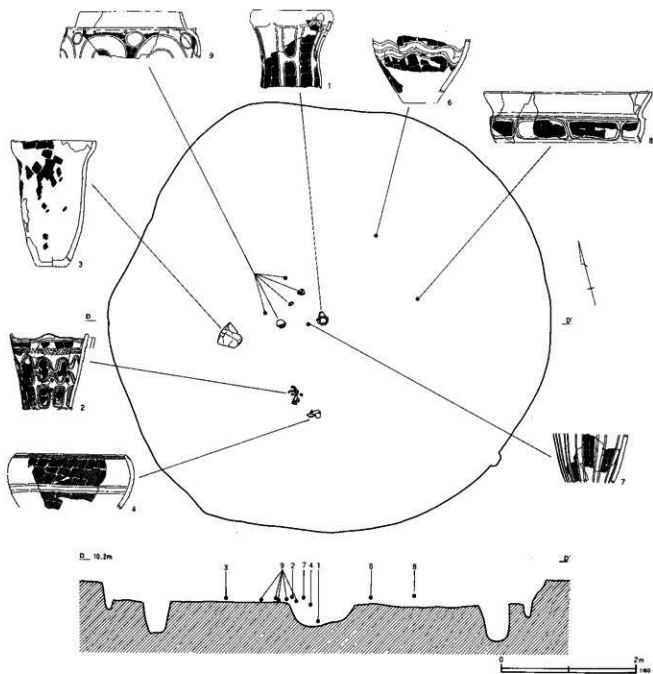
- 1 黒褐色土 焼土粒子・炭化物・ロームブロック多量。
- 2 赤褐色土 焼土ブロック土体、焼土粒子・被熱固化ロームブロック多量。
- 3 褐色土 ローム粒子多量。
- 4 暗褐色土 焼土粒子少量、粘性・しまりあり。
- 5 明褐色土 焼土粒子少量、しまりなし。

0 2m 1:400

第15图 第6号住居跡 (2)



第16图 第6号住居跡遺物分布图



円形刺突が連続する。以下は縄文地文に3本沈線による懸垂文になり、3本のうち、両側の2本は上端が結ばれてU字状になる。8は無文の波状口縁。9は緩やかな波状口縁の波頂部で幅広の沈線が施文される。いずれも胎土には砂粒を含み、焼成は良好である。色調は1・7が黒褐色、他は明褐色を呈する。

第6号住居跡(第14~16図)

F-5・6グリッドに位置する。S J 7に西側の覆土上面を切られており、この遺構はS J 7より古い。S J 8とは壁面を一部接するが、新旧関係は不明である。主柱穴と思われる6基のピットに対応して壁面が直線的めぐっており、六角形プランの住居跡と考えられる。

遺構の規模は、最大径6.6m、深さ44cmを測る。床面は堅く踏みしめられていて、南側のP₃周辺でやや高くなるが、他の部分はほぼ平坦になる。炉跡は中央に位置し、直径1.1m、深さ約30cmを測るしっかりした掘り方を持ち、炉体土器を伴う(第17図1)。

ピットの深さはP₁=61cm、P₂=55cm、P₃=33cm、P₄=53cm、P₅=48cm、P₆=43cm、P₇=43cm、P₈=48cm、P₉=72cm、P₁₀=24cm、P₁₁=98cm、P₁₂=76cm、P₁₃=59cm、P₁₄=59cmを測る。

主柱穴はP₁・P₂・P₄~P₆・P₈の6基と考えられ、炉跡を中心にして点対照の位置関係をとる。P₇とP₈、P₉とP₁₀とはP₁-P₂ラインを軸にそれぞれ左右対照の関係になることから、補助的な柱穴と考えられる。壁溝は部分的に小ピットを伴いながらめぐり、東側と南側の一部で途切れる。

出土遺物は、炉体土器をはじめ、床面上から個体復元可能な土器が出土した他、覆土中から土器と石器が多量に出土した。出土土器のほとんどは、加曾利E式土器で占められる。

出土遺物(第17~20図)

1は炉体土器である。キャリバー形深鉢土器で、同一個体となる破片から、口縁部文様帯を持つことがわかる。口縁部文様は沈線と隆起帯とで渦巻文と杵状区画文を配し、胴部とは横線状に区画されず、隆起体が

弧状に連結する。胴部にはH字状の磨消懸垂文を4単位配する。地文は細かいLR単節縄文を縦方向に施文する。全体として仕上がりが丁寧であり、比較的薄手の作りである。胎土には細かい白色砂粒を多く含み、焼成良好。色調は暗赤褐色を呈する。

2は床面に正立した状態で出土した。連文土器の範疇に入る土器である。胴下部からほぼまっすぐに外に開く器形をなし、4単位の波状口縁になる。口縁直下には1条の沈線がめぐり、幅狭の無文帯を区画する。以下、口縁部に竹管状工具による2列の円形刺突文、2本1組の沈線による波状文を上下2段に展開する。胴下部には同様の沈線により楕円杵状文を配し、さらに下部にもう1段配するのが見える。地文はRL縄文を口縁部沈線と刺突列との間に横方向に、波状文以下には胴部には縦または斜め方向に施文する。刺突列と上段の波状沈線との間と、楕円杵状文の外側の一部は無文になる。施文順序としては、あらかじめ縄文を施文した後に、刺突文や沈線モチーフを描いている。色調は茶褐色を呈する。

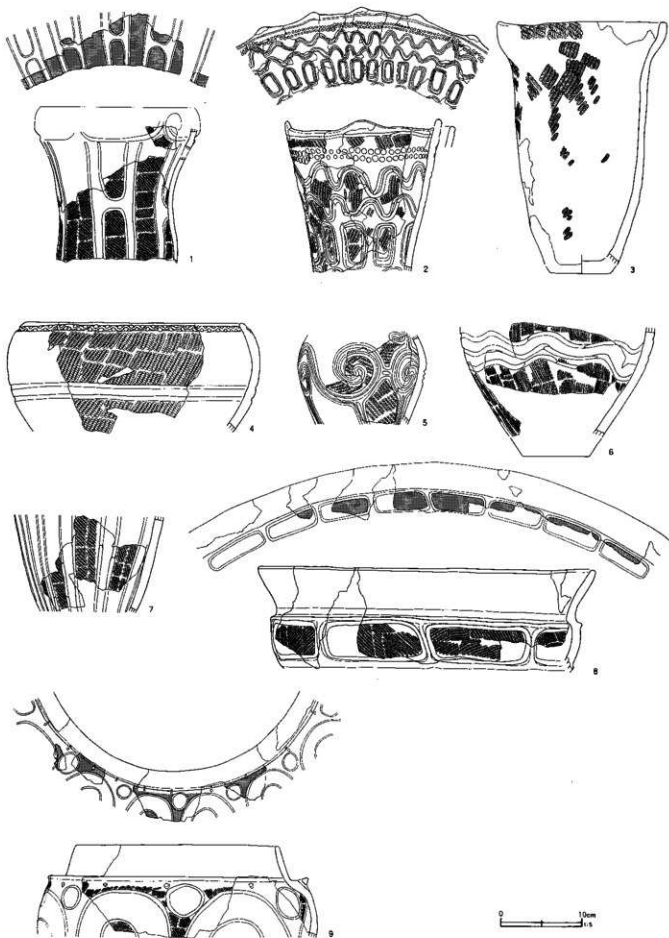
3~9は床面に近い覆土下層から出土した土器である。3は全面に無節縄文を施文するキャリバー形土器である。口縁部には横方向、胴部には縦方向に施文する。胴部は縄文施文後に一定の間隔で縦に磨り消されており、磨消懸垂文を意識したものと思われる。色調は褐色を呈する。

4は口縁部に斜状隆線が蛇行し、棒状工具による交互刺突文が施される。胴部上位には縄文地に幅広沈線で区画された磨消無文帯が横走する。胎土には砂粒、石英を含み、色調は黄褐色を呈する。

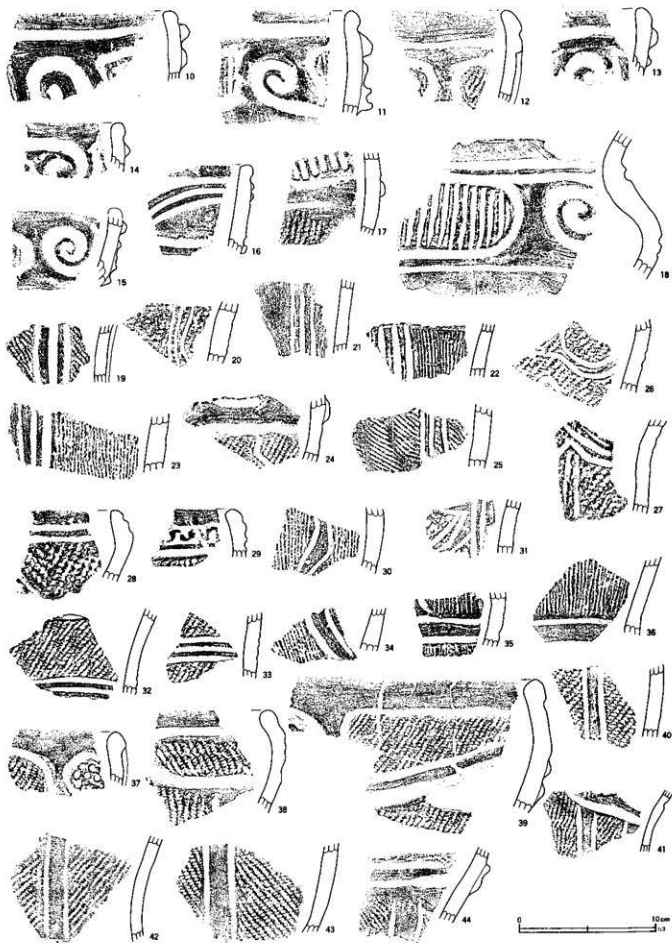
5は大木式土器で、縄文地に3本1組の沈線で葎草と懸垂文の組み合わせる。地文にはLRL復節縄文を縦方向に施文する。胎土には白色砂粒、片岩を含み、色調は黄褐色を呈する。

6は撚糸文を地文として、平行沈線で無文の波状モチーフを描くものである。沈線は3本から途中途切れて2本になる。施文順序はあらかじめ沈線を引いてから撚糸文を施文し、さらに沈線間を粗く磨り消してい

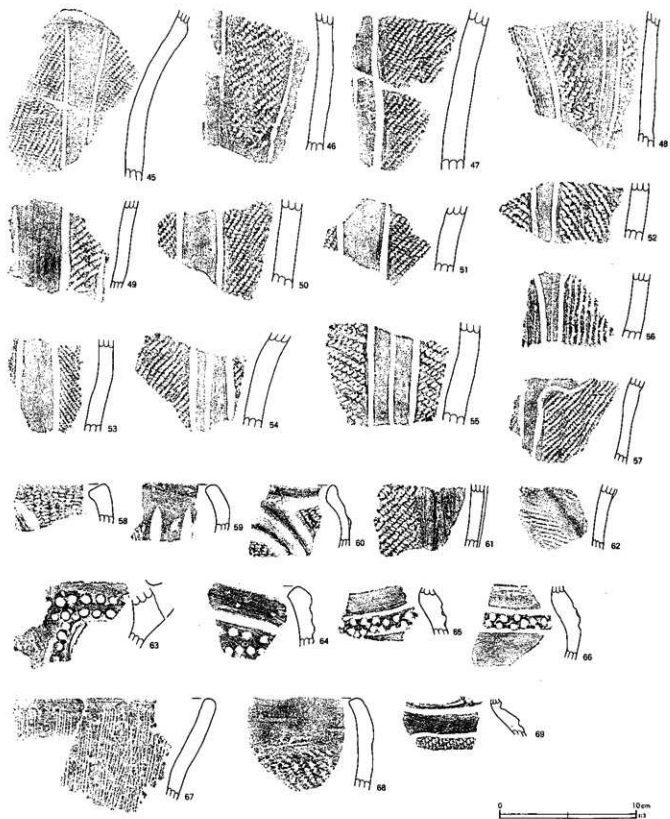
第17图 第6号住居跡出土遺物(1)



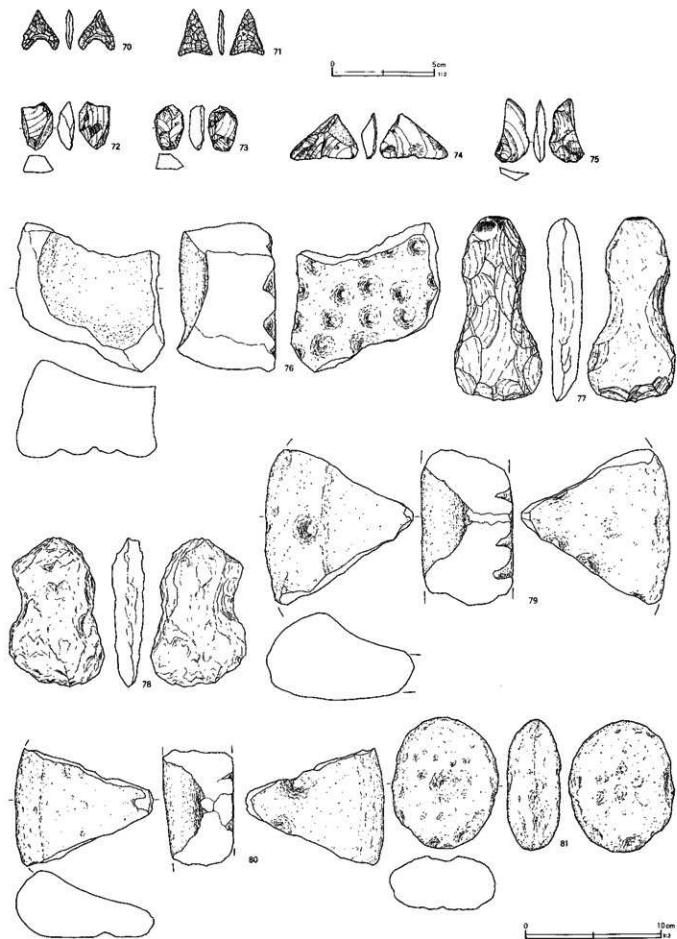
第18图 第6号住居跡出土遺物(2)



第19图 第6号住居跡出土遺物(3)



第20图 第6号住居跡出土遺物(4)



る。胎土に砂粒を含み、色調は橙色である。

7はキャリパー形土器の胴部である。単節LR縄文を地文にして、磨消懸垂文を多単位に配する。胎土には胎土には白色砂粒を含み、色調は黄褐色を呈する。

8は加曾利E式期の浅鉢形土器である。外に大きく開く無文口縁部で、胴部には縄文地の区画文を配する。胎土には白色砂粒を含み、色調は明赤褐色を呈する。

9は有孔罎付土器である。無文口縁部が内傾し、胴部には縄文を地文として、沈線による無文区画帯が曲線モチーフを描く。モチーフ間の余白部分には円文を配する。穿孔部は罎上部から下部へと穿たれ、内面には貫通しない。曲線モチーフの無文帯と円文の内部には赤彩痕が一部わずかに残る。胎土には白色砂粒、片岩を含み、色調は明黄褐色を呈する。

10～25は加曾利EⅡ式期の前葉から中葉段階に位置付けられる土器であると思われる。

10～15はキャリパー形土器の口縁部で、渦巻文と区画文とを配する。器形は外傾するか直立するものが多い。16は無文地に2本隆帯がモチーフを描くものである。17は口縁下部が隆帯で区画され、区画内は縦沈線を施文する。胴部は縄文地である。18は浅鉢形土器で、胴部に渦巻文と楕円区画文を配する。

19～25はキャリパー形土器の胴部である。19は2本隆帯、24は蛇行沈線、他は3本沈線の懸垂文で沈線間の意識的な磨消は見られない。地文は21・22が条線、23が燃糸文、他は縄文である。

26～36は連弧文土器である。28・29は口縁部で28は2本沈線が平行する。29は蛇行する貼付隆線と交互刺突を組み合わせる。以下沈線で区画し、縄文地となる。26・27・31は沈線で弧状モチーフを描くもので、27・31は懸垂文に絡む。30・32～36は沈線間を磨り消すもので、30・34・36は地文燃糸文、32・33は縄文地に胴部区画横帯を3本沈線で施文する。35は地文条線である。

37～69は加曾利EⅡ式期の後葉から中期終末段階の土器である。

37～39はキャリパー形土器の口縁部で、区画文を配

するものである。器形は3点ともに内彎する。37は区画内に縄文刺突文を充填する。38は幅広の沈線で区画し、胴部には磨消懸垂文が見える。39は左側に渦巻文を伴う。

40～57はキャリパー形土器の胴部で磨消懸垂文を持つものである。41は口縁の区画文を構成する沈線の直下に胴部文様がくる。44は隆起帯と平行する幅広凹線が胴部と口縁部の文様を区画する。49～51・53は幅広の無文帯が垂下する。54・55は3本沈線の懸垂文である。57は懸垂文からモチーフが分岐する。地文は56が燃糸文、他はすべて縄文である。

58～60は口縁部文様帯をもたないキャリパー形で中期終末段階の土器である。内彎する口縁部で、58は口唇が平坦になり、縄文地に2本の幅広沈線がモチーフを描く。59は口縁に区画されない無文帯を置き、以下条線地に磨消懸垂文となる。60は幅広の凹線と2本隆帯によって縄文地の区画文を配する。隆帯は胴部に大柄の渦巻モチーフを展開すると思われる。

61・62は断面三角形の微隆帯を施文する土器で、61は縄文地と無文帯を区画する。

63～66は列点文を施文する土器である。胎土や焼成の状況から中期後半で他の土器と同様の時期のものと考えられる。4点とも列点文は大粒で、棒状工具による円形刺突が連続する。63は口縁部近くで、2列の列点が整然と施文され、把手状のものが付く。64は波状口縁で、沈線区画以下に列点が付く。65・66は同一個体で平行沈線間にやや雑然と施文する。第17図2の口縁部の列点文に似ており、同時期の同じ施文技法によるものと思われる。

67は集合条線地文のみの土器で、胴部がやや括れた深鉢になる。68・69は浅鉢で68は区画されない口縁部無文帯以下、縄文地のみとなる。69は胴部に楕円区画をもち、区画内には燃りの細い複節LR縄文を施文する。

70・71は石織である。70は長さ19cm、幅1.8cm、厚さ0.3cm、重さ0.94gを測る。石質はチャートである。71は長さ2.25cm、幅2.2cm、厚さ0.3cm、重さ0.73gを測る。

石質は黒曜石である。

72～75はスクレイパーである。72は上部側縁に刃こぼれが見られる。長さ3.5cm、幅2.2cm、厚さ1.2cm、重さ9.92gを測る。石質はチャートである。73は正面右側縁に刃部をもつ。長さ3.3cm、幅2.0cm、厚さ1.1cm、重さ9.30g。石質はチャートである。74は長さ3.2cm、幅4.9cm、厚さ1.1cm、重さ9.0g。石質は黒曜石である。75は正面左側から下部にかけての側縁が刃部になる。長さ4.65cm、幅2.15cm、厚さ0.8cm、重さ6.72g。石質は黒曜石である。

77・78は打製石斧である。77は裏面の磨耗が激しい。基部上端に敲打痕と研磨が一部見られる。長さ13.4cm、幅6.4cm、厚さ2.1cm、重さ280gを測る。石質はフォルンフェルスである。78は長さ11.0cm、幅7.0cm、厚さ2.4cm、重さ209gを測る。石質は絹雲母片岩である。

76・79・80は石皿である。3点とも表面に窪み部を伴う。76は現存で長さ10.9cm、幅10.8cm、厚さ7.2cm、重さ890gを測る。石質は凝灰岩である。79は現存で長さ11.5cm、幅10.9cm、厚さ6.1cm、重さ760gを測る。石質は角閃石安山岩である。80は長さ8.6cm、幅10.1cm、厚さ5.1cm、重さ380gを測る。石質は安山岩である。

81は磨石である。長さ9.7cm、幅7.8cm、厚さ4.0cm、重さ330gを測る。石質は安山岩である。

第7号住居跡(第21・22図)

F-5グリッドに位置する。S J 6・8を切って構築されることから、この住居跡はS J 6・8より新しいことがわかる。また、西側の一部をS K 105に切られる。東半分の壁面を明確にできなかったが、残った壁面のラインからほぼ円形プランの住居跡であると推定できる。

遺構の規模は、直径約4.4m、深さ27cmを測る。床面はS J 6の覆土上面を掘り込んで貼床を作っている。貼床は踏みしめられた状態は認められず、貼床の上も黒褐色土で、貼床下のS J 6覆土との区別が困難であった。埋甕炉は中央からやや北西寄りに位置し、口縁部の大半と胴下部から底部を欠く大型の炉体土器(第23図1)が埋置される。浅鉢形土器(第24図2)をは

じめ、数破片(第24図7・17・21・25・26)が石器(第25図47・48)とともに炉体土器の周縁部を補強していた。壁近くに浅いピットが3基検出された。ピットの深さはP₁=20cm、P₂=14cm、P₃=50cmを測る。

出土遺物は、炉体土器をはじめ、覆土中から多量の土器と石器を出土した。出土土器はすべて加曾利E式土器である。

出土遺物(第23～25図)

1は炉体土器である。胴部が炉体として埋められ、口縁部の大半と頸部、胴最下部から底部に至る部分を欠損する。遺存する胴部の最上部が切面に露出し、この部分の一部口縁部が補強するようにめぐっていた。

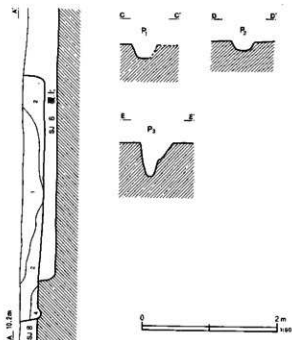
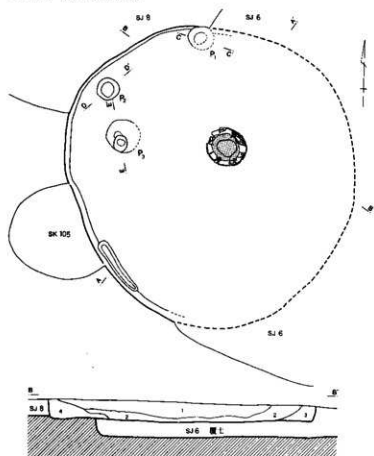
大型のキャリパー形深鉢で、口縁部が内彎し、頸部から胴部にかけて徐々に窄まりながら胴下部でさらに径を小さくして底部に至る。口縁部文様帯は隆帯となぞり沈線による区画文を配し、沈線のみで区画する部分も見える。区画文の下部を太い凹線がなぞりながら、胴部文様帯との境を区画している。胴部には磨消懸垂文と幅狭の縄文地とが交互に繰り返される。地文の縄文は単節R Lの同一原体で、口縁部には横方向、胴部には縦方向に施文する。

2は炉体土器とともに出土した。浅鉢形土器である。口縁部には太い凹線で区画された無文帯を有し、以下胴部は縄文地となる。縄文は単節L Rを横方向に施文、胴部中位では縄文施文後に帯状に磨り消す部分が見られる。

3～6は連弧文土器である。3は縄文地に3本1組の沈線を描くもので、胴部上半には波状モチーフが描かれる。6は口縁部の平行沈線上を交互刺突する。

7～21は加曾利E II式後葉からE III式にかけてのキャリパー形土器である。7～10は口縁部である。7・9は渦巻文と縄文地の区画文を配し、9の胴部は磨消懸垂文となる。口縁部と胴部の文様帯の明確な区画をしない。8・10は沈線による楕円区画を配し、太い凹線が区画文の間をクランク状に流れる。11～13はキャリパー形の頸部で、11は口縁部との境に沈線を引き、以下磨消懸垂文となる。12・13は口縁部との境に列点

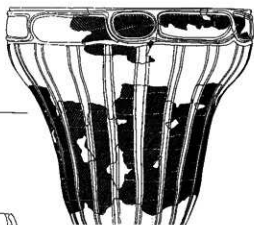
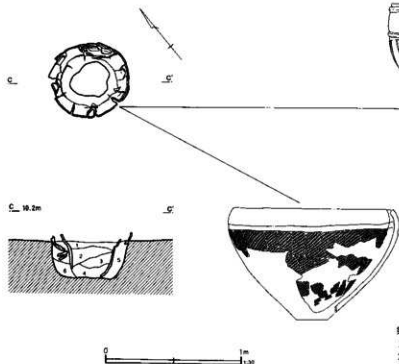
第21図 第7号住居跡



第7号住居跡

- 1 暗褐色土 大型ロームブロック・鉄分・大粒炭化物多量、
- 2 黒褐色土 焼土粒子多量、ロームブロック・鉄分・ローム粒子・細炭化物少量。
- 3 暗褐色土 ロームブロック・炭化物・鉄分多量、焼土粒子少量。
- 4 黄褐色土 ロームブロック主体、鉄分多量、炭化物少量。

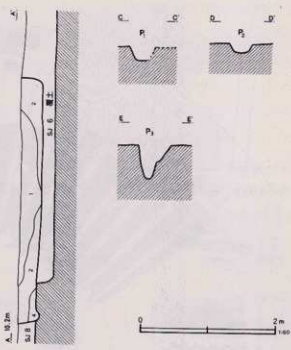
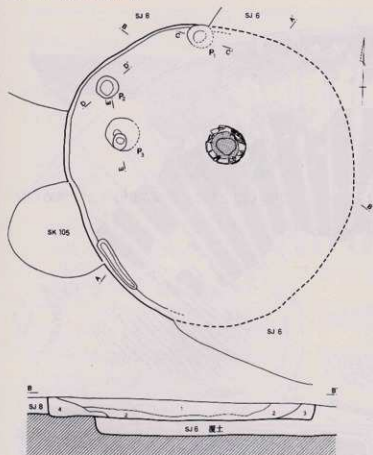
第22図 第7号住居跡炉跡・出土遺物



第7号住居跡炉跡

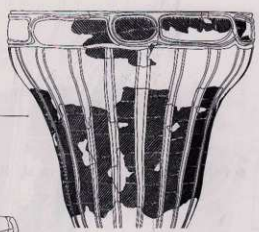
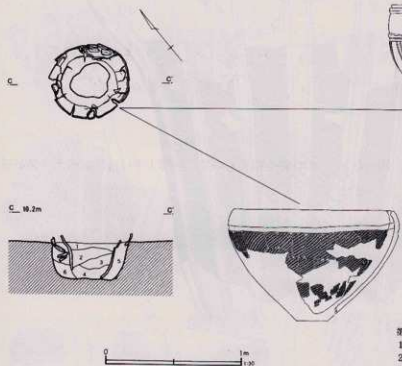
- 1 黒褐色土 焼土粒子・炭化物多量、ローム粒子少量。
- 2 暗褐色土 焼土粒子・炭化物少量。
- 3 黄褐色土 ロームブロック・焼土粒子・炭化物少量。
- 4 暗褐色土 ロームブロック・ローム粒子多量、焼土粒子少量。
- 5 暗褐色土 焼土粒子多量、焼土ブロック少量。
- 6 黄褐色土 ロームブロック・焼土粒子多量。

第21図 第7号住居跡



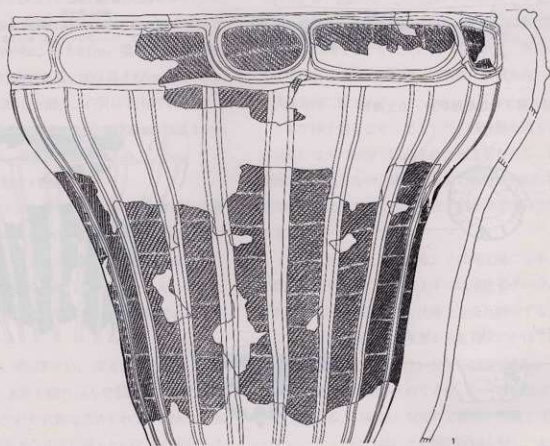
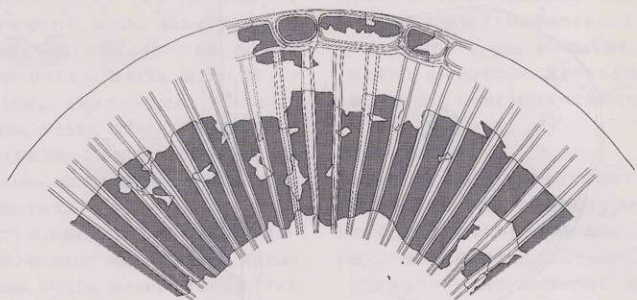
- 第7号住居跡
- 1 暗褐色土 大型ロームブロック・鉄分・大粒炭化物多量、
 - 2 黒褐色土 焼土粒子多量、ロームブロック・鉄分・ローム粒子・細炭化物少量。
 - 3 暗褐色土 ロームブロック・炭化物・鉄分多量、焼土粒子少量。
 - 4 黄褐色土 ロームブロック主体、鉄分多量、炭化物少量。

第22図 第7号住居跡炉跡・出土遺物

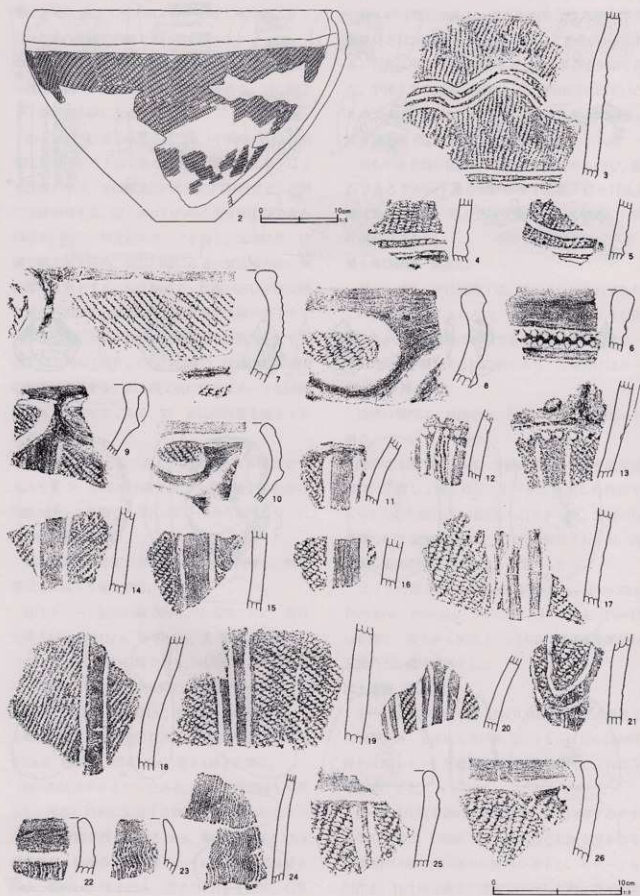


- 第7号住居跡炉跡
- 1 黒褐色土 焼土粒子・炭化物多量、ローム粒子少量。
 - 2 暗褐色土 焼土粒子・炭化物少量。
 - 3 黄褐色土 ロームブロック・焼土粒子・炭化物少量。
 - 4 暗褐色土 ロームブロック・ローム粒子多量、焼土粒子少量。
 - 5 暗褐色土 焼土粒子多量、焼土ブロック少量。
 - 6 黄褐色土 ロームブロック・焼土粒子多量。

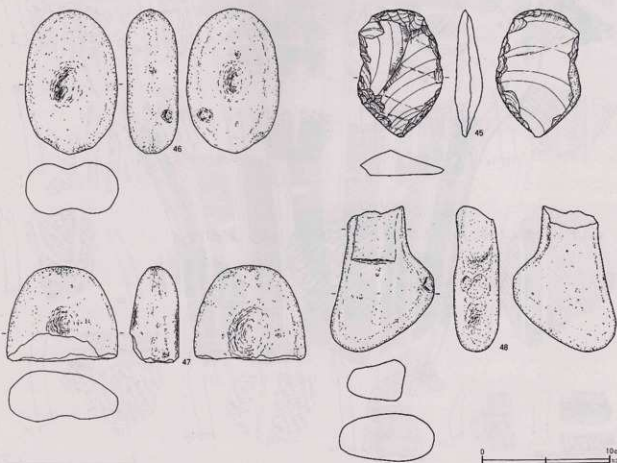
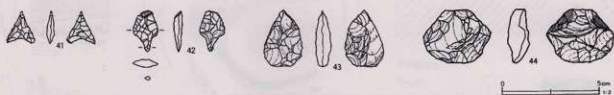
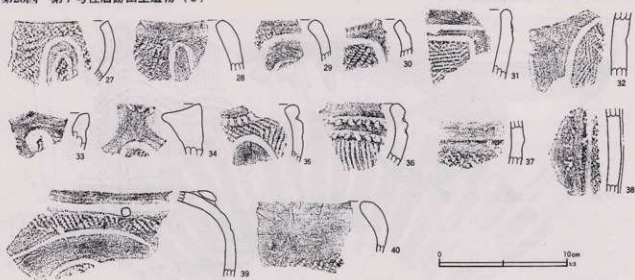
第23图 第7号住居跡出土遺物(1)



第24图 第7号住居跡出土遺物(2)



第25图 第7号住居跡出土遺物(3)



文を施文する。14~20は縄文地に磨消懸垂文になる胴部である。19は3本沈線、17・20は4本沈線になる。21は2本の沈線で曲線モチーフを描く。

22~24は地文が集合条線の土器である。22は口縁部に沈線区画で、23は無区画で無文帯を作る。24は胴部で、波状の条線になる。

25~38は口縁部文縁帯を持たない中期終末から後期初頭にかけての土器である。25は口縁部無文帯下に2本沈線が垂下。26は縄文地の左側に門形刺突文、右側に沈線が見える。27~29はいわゆる吉井城山類である。口縁が内湾し、無文帯モチーフを描く。30は降帯と沈線で縄文地を区画、波状口縁になる。31は横方向の無文帯から垂下する。32は胴部で、沈線が逆U字状に縄文地を区画する。33は波頂部から葎手沈線が垂下する。34は波状突起部で、直下に沈線による区画文を配する。35・36は口縁に刺突文を持つもので、沈線内に涙滴状の刺突が連続する。35は縄文地に無文モチーフを区画、36は地文が燃糸文である。37・38は微降帯を施文する胴部である。

39は有孔罎付土器である。罎部はあまり突出せず、丸みをもつ。胴部には縄文地に沈線で無文帯を作り、曲線モチーフを描く。穿孔は罎上部から胴部に穿たれ、内面には貫通しない。

40は浅鉢の口縁部である。口唇が強く内湾し、無文帯以下は縄文を施文する。

41はチャート製の石鉢である。先端部を欠く。現存で長さ1.5cm、幅1.5cm、厚さ0.4cm、重さ0.52gを測る。

42はチャート製の石錐である。基部に残るタール状の付着物は、柄に装着する際の接着剤と思われる。長さ2.1cm、幅1.3cm、厚さ0.4cm、重さ0.94gを測る。

43は石鏃または刺突具である。黒曜石製である。長さ2.9cm、幅2.0cm、厚さ0.8cm、重さ3.88gを測る。

44・45はスクレイパーである。44は下部側縁を刃部とし、基部には柄に装着する時の接着に使われたタール状の付着物が残る。長さ2.8cm、幅3.5cm、厚さ1.1cm、重さ10.41gを測る。石質はチャートである。45は長さ9.9cm、幅6.6cm、厚さ2.0cm、重さ134.14gを測る。石質

はフォルンフェルスである。

46・47は磨石である。表裏面中央に窪み部を伴う。46は長さ11.2cm、幅8.2cm、厚さ3.1cm、重さ530gを測る。石質は角閃石安山岩である。47は半分を欠いており、炉体土器の縁部の補強材として再使用されていたものである。現存で長さ7.3cm、幅8.7cm、厚さ3.3cm、重さ315gを測る。石質は凝灰岩である。

48も炉体土器の補強材に使用されていたもので、敲石であろうか。上部を欠くようである。長さ11.3cm、幅は最大で8.0cm、厚さ3.5cm、重さ420gを測る。石質は安山岩である。

第8号住居跡(第26図)

F-5グリッドに位置する。S J 7に切られており、この遺構はS J 7より古い。また、壁際をS J 6が重複するが、新旧関係は不明である。平面形態は北東一南西方向を主軸とする楕円形であり、主軸方位はN-37°-Eを測る。

遺構の規模は、長径4.8m、短径、4.1m、深さ22cmを測る。

床面はほぼ平坦である。炉跡は中央からやや北東壁寄りに位置し、焼土粒子をわずかに検出した程度で、しっかりした掘り込みは認められなかった。北側から東側にかけての壁際には、壁柱穴が検出されたが、西側から南側の壁際では検出されなかった。

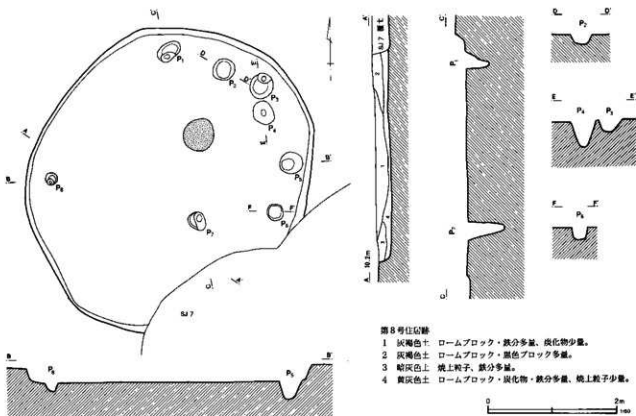
ピットの深さは $P_1=36\text{cm}$ 、 $P_2=15\text{cm}$ 、 $P_3=20\text{cm}$ 、 $P_4=40\text{cm}$ 、 $P_5=29\text{cm}$ 、 $P_6=18\text{cm}$ 、 $P_7=58\text{cm}$ 、 $P_8=13\text{cm}$ を測る。覆土から床面上にかけて、縄文中期加曽利E式の土器破片が出土した。

出土遺物(第27図)

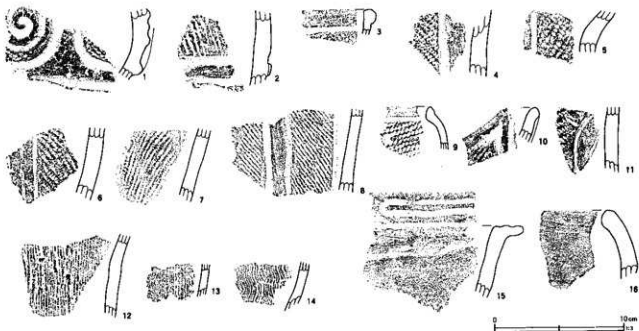
1~3はキャリバー形土器の口縁部で、1は渦巻文と楕円区画、2は地文が燃糸文になる。3は小径の深鉢となる。4~8は磨消懸垂文の胴部破片で、6は3本沈線になる。

9~11は中期末葉の土器である。9は内湾するやや薄手の七器で、口唇直下に沈線がめぐり無文部を作る。10は波状口縁の波頂部から降帯が垂下し、モチーフを形作る。11は地文縄文に沈線で区画した無文帯が曲線

第26図 第8号住居跡



第27図 第8号住居跡出土遺物



モチーフを描く。

12-14は櫛目文土器で、14は縦波状に施文される。

15・16は鉢形土器の口縁部である。

いずれも胎土には砂粒を多く含み、焼成は良好である。色調は、9・11・13・15・16が黒褐色、他は黄褐色～褐色を呈する。

第9号住居跡(第28回)

D-4・5グリッドに位置する。中・近世の遺構であるSD14・15・16に切られる。SK110と重複するが、新旧関係は不明である。西調査区の隅部で検出されたため、多くの部分が調査区外に及ぶが、西側の壁が直線的になることから、隅丸方形プランの住居跡になると思われる。

遺構の規模は、南北方向で推定約6mになるものと思われ、深さは30cmを測る。床面はほぼ平坦で、灰跡は検出されなかった。主柱穴はP₁・P₅・P₈と考えられ、壁際にも浅いピットが数基めぐる。

ピットの深さはP₁=25cm、P₂=28cm、P₃=20cm、P₄=20cm、P₅=34cm、P₆=20cm、P₇=32cm、P₈=40cmを測る。

出土遺物は中期後葉から後期初頭にかけての土器片が少量出土した。

出土遺物(第29回)

1は1本沈線による渦巻文である。2は連弧文土器の胴部破片である。3は曾利式土器の胴部片である。

4-9は加曾利E式のキャリバー形土器である。いずれも磨消懸垂文の胴部片で、8は3本沈線になる。

10は櫛目文土器。

11-16は中期末から後期初頭にかけての土器である。11は沈線で縄文帯を区画して、曲線モチーフを描くもので、大柄の渦巻文またはJ字文になるものと思われる。12は無文の波状口縁部である。13は口唇直下の山形に肥厚する口縁部である。14は2本の平行沈線が口縁部無文帯を区画する。15・16は細い2本沈線が胴部を垂下する。

17は加曾利B式土器の胴部片である。棒状工具で沈線を縦方向に粗く施文する。

胎土にはいずれも砂粒を含み、焼成は良好である。色調は、1・5が橙、8が暗褐色、7・11が黄褐色、他は黒褐色を呈する。

第10号住居跡(第30回)

D-4グリッドに位置する。中・近世の遺構であるSD14に切られる。SJ11を切って構築されており、この住居跡はSJ11より新しい。また、覆土上部で縄文後期の単独ピットであるP_{2m}に切られる。

平面形態はほぼ円形の住居跡であり、直径4.6m、深さ28cmを測る。床面はほぼ平坦である。灰跡は中央からやや北寄りに位置し、深さ約20cmのしっかりした掘り込みをなす。ピットは4本検出され、いずれも主柱穴になると思われる。

ピットの深さはP₁=24cm、P₂=13cm、P₃=14cm、P₄=14cmを測る。出土遺物は、覆土中から中期加曾利E式土器が出土した。

出土遺物(第31回)

1-7・11は加曾利E式のキャリバー形土器である。1・2は口縁部で楕円区画文を配する。3-7・11は胴部破片で磨消懸垂文を配する。

8は連弧文土器の口縁部で、2本の沈線間には円形刺突文が連続する。

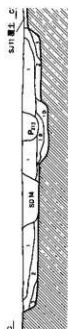
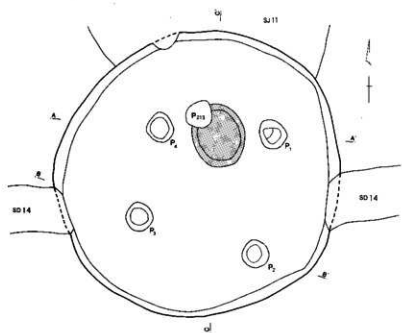
9は波状口縁で、波頂部には沈線で円形または渦巻状のモチーフを配する。また、沈線内には円形刺突が加えられる。地文は縦方向の擦糸文である。

10は曾利式土器の胴部破片で、相互押捺文を加えた隆帯が垂下する。

12は浅鉢形土器である。1本沈線で口縁部無文帯を区画し、胴部には櫛目状工具による条線を施文する。内面はよく研磨され、薄手の作りである。

いずれも胎土には砂粒を含み、焼成は良好である。12は細かい網雲母片岩を含み、焼成は堅緻である。色調は、7・8・12が黒褐色、他は黄褐色を呈する。

第30図 第10号住居跡



第10号住居跡

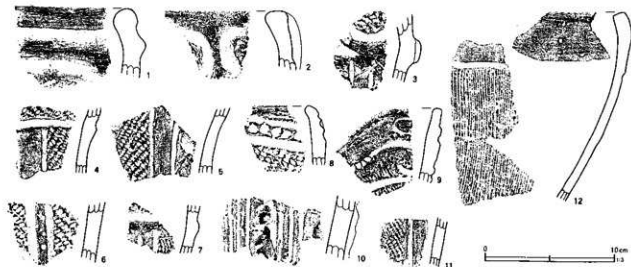
- 1 褐色土 ロームブロック・ローム小ブロック少量。
- 2 暗褐色土 ロームブロック少量。
- 3 褐色土 ロームブロック少量。

砂跡

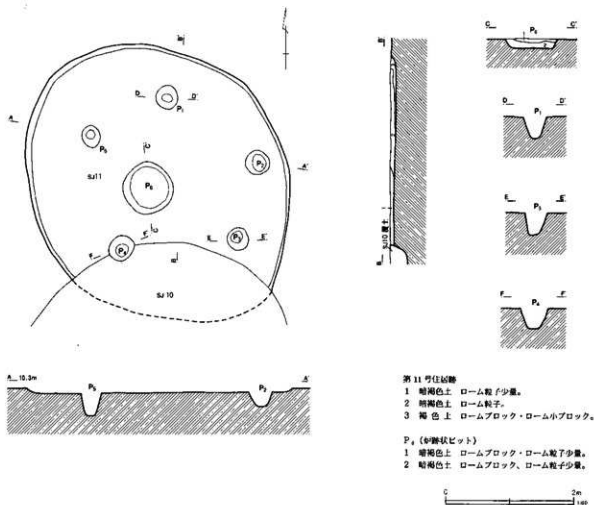
- 1a 暗褐色土 焼上粒、ローム小ブロック少量、
焼上小ブロック少量。
- 1b 暗褐色土 ロームブロック、ローム小ブロック
・焼上ブロック・炭化粒、炭化物少量。



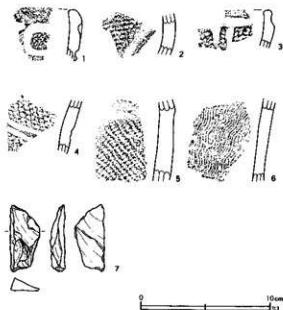
第31図 第10号住居跡出土遺物



第32図 第11号住居跡



第33図 第11号住居跡出土遺物



第11号住居跡 (第32図)

D-4グリッドに位置する。南側の一部をS J10に切られており、この遺構はS J10より古い。北西-南東方向に主軸をとる楕円形プランの住居跡であり、主軸方位はN-43°-Wを測る。

遺構の規模は、長径4.8m、短径4.0m、深さ8cmを測る。P₆は覆土から明確な焼土が確認されなかったが、位置的に見て伊勢川に対応するものと思われる。主柱穴と考えられるビットは5基検出され、P₆を中心にして壁際からやや間隔を置いてめぐる。

ビットの深さはP₁=34cm、P₂=23cm、P₃=35cm、P₄=32cm、P₅=34cm、P₆=15cmを測る。

覆土中から中期加賀利E式の土器破片とスクレイパーが出土した。

出土遺物 (第33回)

1は小型のキャリパー形土器の口縁部である。沈線による楕円区画を配する。2は胴部破片で、縄文地文に隆帯が曲線的に垂下する。3は口縁部に沿って1本沈線が横走し、以下縄文地文に2本沈線の懸垂文である。沈線間は磨り消されぬ。4は連弧文土器で、縄文地文に2本尾沈線が弧状に施文される。5は縄文地文に隆帯を配する。6は縦波状に条線が施文される。

7はチャート製のスクレイパーである。上部に刃部を持つ。長さ5.2cm、幅2.3cm、厚さ1.0cm、重さ13.87gである。

第12号住居跡 (第34・35回)

C・D-3グリッドに位置する。中・近世の遺構であるSD13に西部隅部の一部を切られる。平面形態は不整形であるが、部分的に壁が直線的にめぐっており、隅丸多角形とも捉えられる。

遺構の規模は、最大径が7.8m、深さ13cmを測る。床面はほぼ平坦。中央からやや南寄りに位置するP₂₀が伊跡になるものと思われる。ピットは22基検出されたが、P₂₀を中心にして円周状に2種類めぐっていることから、建て替えが行われたものと考えられる。

ピットの深さはP₁=22cm、P₂=23cm、P₃=24cm、P₄=42cm、P₅=34cm、P₆=41cm、P₇=30cm、P₈=24cm、P₉=21cm、P₁₀=18cm、P₁₁=16cm、P₁₂=26cm、P₁₃=20cm、P₁₄=31cm、P₁₅=19cm、P₁₆=32cm、P₁₇=28cm、P₁₈=24cm、P₁₉=36cm、P₂₀=22cm、P₂₁=32cm、P₂₂=29cm、P₂₃=9cmを測る。

出土遺物では、壁溝内とピット内から縄文前期黒浜式土器が出土したが、他のピット内および覆土中から中期加曾利E式の土器破片出土していることから、後者の時期が遺構の時期になるものと考えられる。

出土遺物 (第36回)

1は前期黒浜式土器である。壁溝内とピット内から出土した破片が接合したもので、口縁から胴下部までが復元できた。口縁部は緩やかな波状口縁をなし、大きく開く器形になる。胴部中で括れて胴下部でやや膨らみを持つ。地文には同一原体による付加状文を前

面に施文する。胎土には繊維と白色砂粒を含み、焼成は良好、遺存状態は良い。内面には繊維痕が見られるが、良く調整されて滑らかである。外面の色調は黄褐色～褐色、部分的にまだら状に黒褐色を呈する。内面は黄褐色である。

2～11は中期加曾利E式の土器破片である。2・3は口縁部で、2は渦巻文になる。4～6・9～11は磨消懸垂文を配する胴部破片で、8は地文に複雑縄文を施文する。7・8は条線文を地文とする。

いずれも胎土には細かい砂粒を含み、焼成は良好である。色調は4・5が黒褐色、他は明褐色を呈する。

第13号住居跡 (第37回)

C-3・4グリッドに位置する。西調査区の北側調査区境に一部検出され、遺構の大半は区域外に及び。SK112・114に切られ、この遺構はSK112・114より古い。SK115とはわずかに壁を接する。

遺構の規模は、調査区境の壁面で推定5.0m、深さ24cmを測る。床面はほぼ平坦。炉跡は検出されなかった。ピットは2基検出された。ピットの深さはP₁=15cm、P₂=推定35cmを測る。

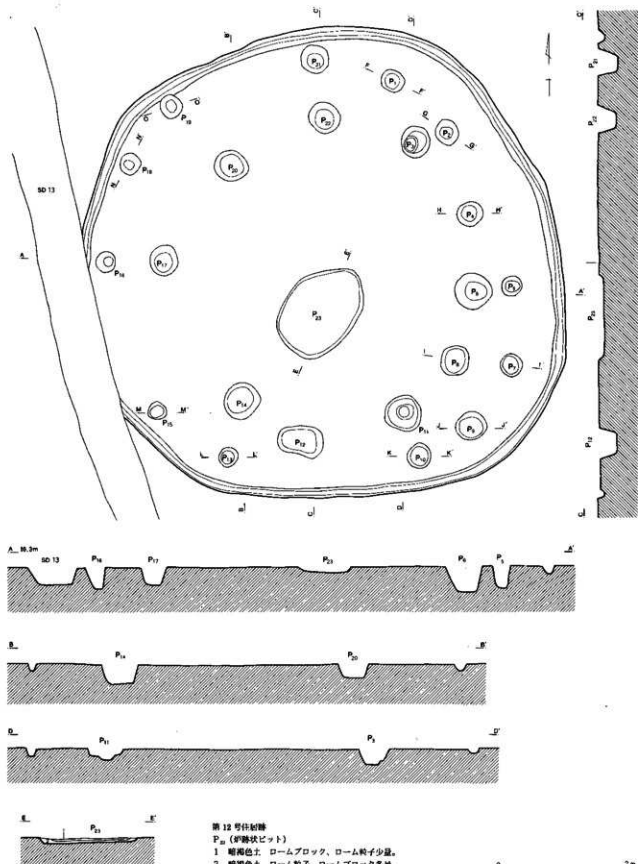
床面から覆土中にかけて加曾利E式土器が出土した。

出土遺物 (第38回)

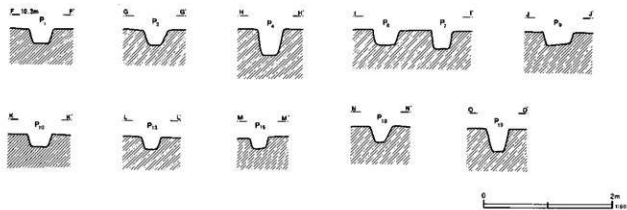
1は住居床面から出土したものである。口縁部文様帯の下部は幅広い沈線とその間に扶まれた低い隆帯とが胴部を西する。胴部には地文に縦回転の単純縄文を施文し、幅広い磨消懸垂文を配する。垂下する沈線は口縁部の沈線とは異質の細い棒状工具によるものである。右側の胴部沈線は上端がU字状になる。加曾利EⅢ式の大形土器である。

2は口縁部破片、3～5は磨消懸垂文の胴部破片で、4は地文が複雑縄文になる。6は地文に細かい燃糸文を施文し、沈線が横走する。上部の沈線内には円形刺突が加えられている。7は口縁の波状突起部で、突起下は大きく剥落するが、下部には地文条線、3本沈線が垂下する。8・9は無文の口縁部で、8は浅鉢である。

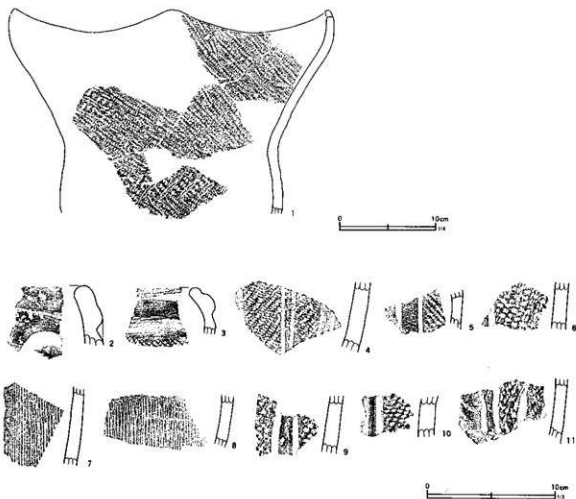
第34図 第12号住居跡 (1)



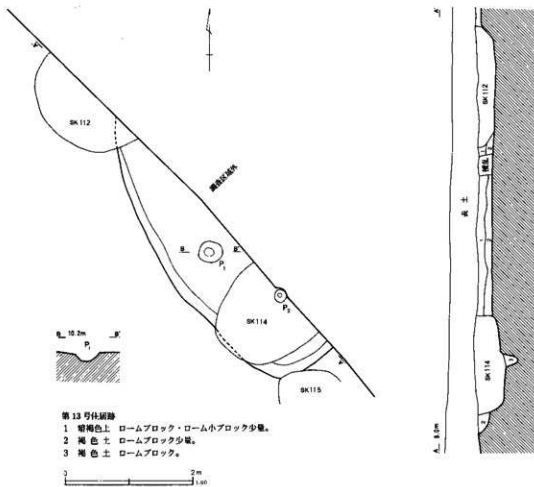
第35图 第12号住居跡(2)



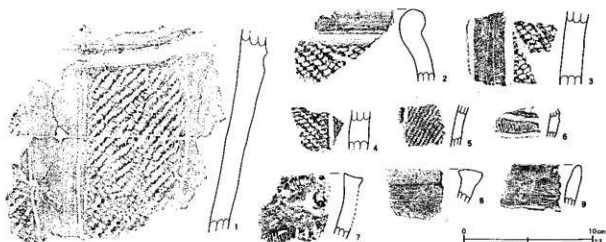
第36图 第12号住居跡出土遺物



第37図 第13号住居跡



第38図 第13号住居跡出土遺物



(2) 土墳

第2号土墳 (第39図)

K-11グリッドに位置する。平面形は楕円形。長径1.3m、短径1.1m、深さ12cmである。主軸方位はN-48°-Eを測る。

第20号土墳 (第39・45図)

J-10グリッド。SK21と重複する。平面形は楕円形。長径1.1m、短径0.8m、深さ9cm。主軸方位はN-31°-W。第45図1が出土した。安行式土器。

第21号土墳 (第39・45図)

J-10グリッドに位置する。SK20と重複する。平面形は楕円形。現存長径1.1m、短径0.9m、深さ7cm。主軸方位はN-84°-E。第45図2・3が出土した。2は加曾利E式の胴部、3は地文条線文。

第35号土墳 (第39・45図)

I-9グリッドに位置する。SK36と重複する。平面形は楕円形。現存長径0.8m、短径0.7m、深さ10cm。主軸方位はN-77°-E。第45図4が覆土中から出土。胎上に繊維を含む上げ底気味の底部である。外面に斜縄文が施文される。前期黒浜式土器である。

第36号土墳 (第39図)

I-9グリッドに位置する。SK35と重複する。平面形は楕円形であり、規模は、長径0.9m、短径0.7m、深さ16cmである。主軸方位はN-88°-E。

第38号土墳 (第39図)

K-10グリッドに位置する。平面形は楕円形であり、規模は、長径1.1m、短径0.6m、深さ30cmである。主軸方位はN-57°-E。

第39号土墳 (第39・45図)

K-10グリッドに位置する。SK40と重複する。平面形は楕円形であり、長径1.0m、短径0.7m、深さ16cmである。主軸方位はN-25°-E。第45図6～8が覆土中から出土した。6・7は加曾利E式の胴部、8は後期の粗製土器で粗い斜条線を施文する。

第40号土墳 (第39図)

K-10グリッドに位置する。SK39と重複する。平面形は楕円形。長径0.7m、短径0.6m、深さ10cm。主軸

方位はN-12°-W。

第41号土墳 (第39・45図)

K-11グリッドに位置する。遺物の分布と調査区域壁の七層観察から、SK42とともに土墳と認定した。直径約6mの範囲に遺物が散在する。出土土器は第45図5で、加曾利E式の胴部。

第42号土墳 (第39・45図)

K-11グリッド。SK41同様、直径約1.3mの範囲に遺物は分布する。出土遺物は第45図9～17である。9・12は連弧文土器である。9は口縁部で3本の沈線が横走、12は胴部中位。10・11・13～16は縄文地文に沈線が懸垂する加曾利E式の胴部。10は2本沈線で直線と蛇行を交互に配し、11・16は3本沈線になる。13・16は曲線を描く。17は無文の底部。

第51号土墳 (第39図)

K-9グリッドに位置する。平面形は楕円形であり、規模は、長径0.6m、短径0.5m、深さ27cmである。主軸方位はN-57°-Wを測る。

第53号土墳 (第39・45図)

K-10グリッドに位置する。平面形は楕円形、規模は、長径1.1m、短径0.7m、深さ8cm。主軸方位はN-45°-W。第45図18～20が出土した。18は胎上に繊維を含み、外面には貝殻背に痕文を施文する。前期初原の土器である。19は加曾利E式の胴部。20は連弧文土器で、地文は燃糸文である。

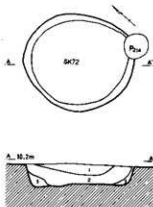
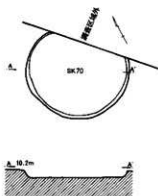
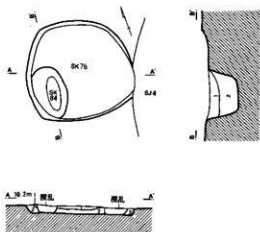
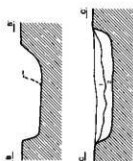
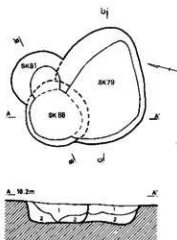
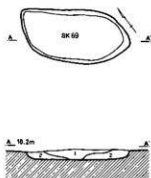
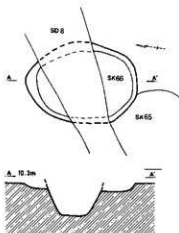
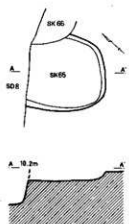
第54号土墳 (第39・45図)

K-10グリッド。中・近世のピットに切られる。平面形は不整楕円形、長径1.2m、短径1.0m、深さ38cm。主軸方位はN-65°-W。第45図21～23が出土した。3点とも加曾利E式土器で、21・22は磨消懸垂文の胴部、23は無文帯がU字状モチーフになる。

第55号土墳 (第39・45図)

J-10グリッドに位置する。中・近世のピットに切られる。平面形は不整楕円形、規模は、長径0.9m、短径0.7m、深さ9cm。主軸方位はN-84°-E。第45図24・25が覆土中から出土した。24は加曾利E式の胴部片、25は後期安行式土器の波状口縁部である。

第40図 土坑（縄文時代）(2)



第68号土坑

- 1 黒褐色土 ローム小ブロック、ローム粒子・炭化物少量。
- 2 褐色土 ロームブロック多量。

第69号土坑

- 1 暗褐色土 ローム粒子、ロームブロック少量。
- 2 暗褐色土 ロームブロック、炭化物少量。

第72号土坑

- 1 暗褐色土 ロームブロック・ローム粒子・炭化物少量。
- 2 暗褐色土 ロームブロック、炭化物少量。
- 3 褐色土 ロームブロック多量。

第76号土坑

- 1 暗褐色土 ローム小ブロック・ローム粒子少量。
- 2 暗褐色土 ロームブロック。

第79号土坑

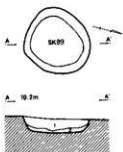
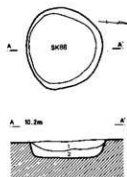
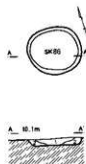
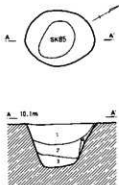
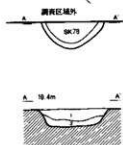
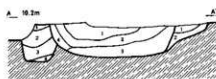
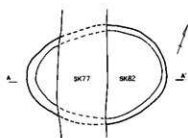
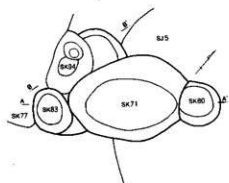
- 1 暗褐色土 ロームブロック・ローム小ブロック少量。
- 2 暗褐色土 ロームブロック、ローム小ブロック少量。

第84号土坑

- 1 暗褐色土 ローム小ブロック少量。
- 2 暗褐色土 ロームブロック



第41図 土壌（縄文時代）(3)



- 第71号土層
- 1 暗褐色土 ローム粒子多量。
 - 2 暗褐色土 ローム粒子・ロームブロック・ローム少ブロック少量。
 - 3 暗褐色土 ロームブロック、ローム粒子少量。
 - 4 暗褐色土 ローム粒子少量。

- 第78号土層
- 1 灰褐色土 ロームブロック少量。
 - 2 褐色土 ロームブロック多量。

- 第80号土層
- 1 暗褐色土 ローム粒子少量。
 - 2 暗褐色土 ローム粒子・ロームブロック少量。

- 第82号土層
- 1 暗褐色土 ローム小ブロック・ロームブロック少量。
 - 2 褐色土 ロームブロック多量。

- 第83号土層
- 1 暗褐色土 ロームブロック少量。
 - 2 暗褐色土 ロームブロック、ローム粒子少量。
 - 3 暗褐色土 ロームブロック、ローム小ブロック少量。
 - 4 暗褐色土 ロームブロック多量。

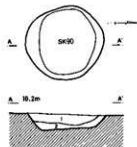
- 第85号土層
- 1 暗褐色土 ローム粒子、ロームブロック・炭化物少量。
 - 2 暗褐色土 ロームブロック・ローム粒子少量。
 - 3 暗褐色土 ロームブロック多量。
 - 4 褐色土 ロームブロック多量。

- 第86号土層
- 1 暗褐色土 ロームブロック少量。
 - 2 暗褐色土 ローム少ブロック・ローム粒子少量。

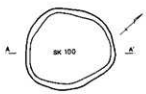
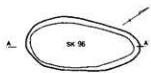
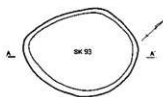
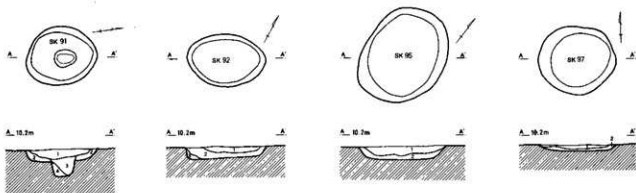
- 第88号土層
- 1 暗褐色土 鉄分多量、炭土粒子少量。
 - 2 暗褐色土 ロームブロック多量。

- 第89号土層
- 1 暗褐色土 鉄分多量、ロームブロック少量。
 - 2 黄褐色土 ロームブロック多量、鉄分少量。

- 第90号土層
- 1 暗褐色土 ロームブロック・鉄分多量。
 - 2 黄褐色土 ロームブロック半深、暗褐色土・鉄分少量。



第42図 土壌（縄文時代）(4)



第91号土壌

- 1 灰褐色土 鉄分多量、黒色ブロック少量。
- 2 黄褐色土 黒色ブロック・鉄分少量。
- 3 黄灰褐色土 鉄分・ロームブロック少量。
- 4 黄灰色土 粘土ブロック主体。

第95号土壌

- 1 灰褐色土 焼土粒子・ロームブロック多量、炭化物少量。
- 2 暗褐色土 ロームブロック少量。
- 3 暗黄褐色土 ロームブロック少量。

第92号土壌

- 1 暗褐色土 鉄分多量、ロームブロック少量。
- 2 灰褐色土 ロームブロック多量。
- 3 黄褐色土 ロームブロック上体。

第99号土壌

- 1 灰褐色土 ロームブロック・鉄分多量。
- 2 黄褐色土 ロームブロック主体、鉄分多量。

第93号土壌

- 1 暗褐色土 鉄分多量、ロームブロック少量。
- 2 黄褐色土 ロームブロック上体。

第100号土壌

- 1 灰褐色土 焼土粒子・ローム粒子・鉄分多量。
- 2 暗褐色土 ロームブロック・鉄分多量。

第95号土壌

- 1 暗褐色土 ロームブロック・鉄分多量。
- 2 黄褐色土 ロームブロック上体、鉄分少量。

第101号土壌

- 1 褐色土 ロームブロック・ローム小ブロック少量。
- 2 褐色土 ロームブロック。

第96号土壌

- 1 灰褐色土 焼土粒子多量、ロームブロック少量。
- 2 黄褐色土 ローム上主体、鉄分少量。

第102号土壌

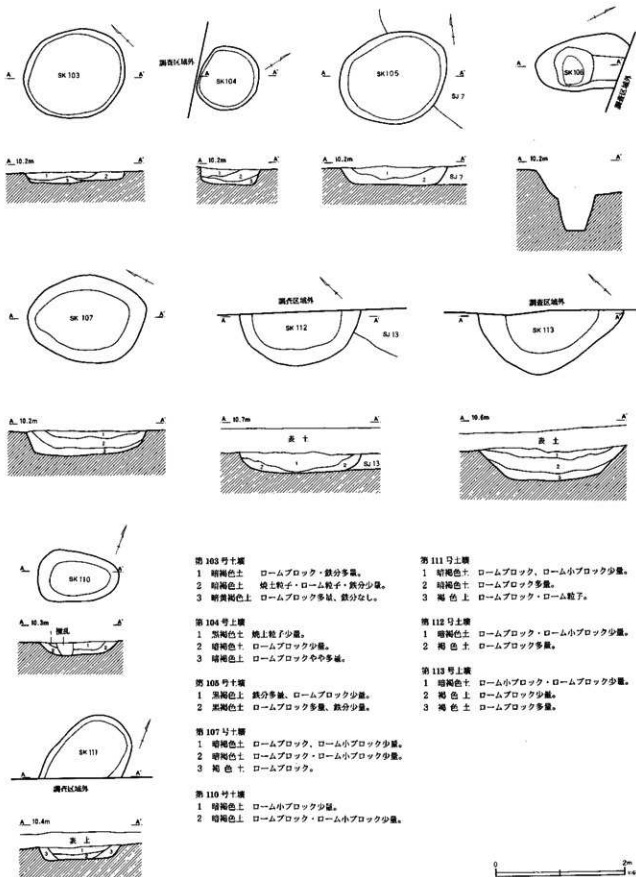
- 1 暗黄褐色土 ロームブロック・鉄分少量。
- 2 黄褐色土 ロームブロック上体。

第97号土壌

- 1 灰褐色土 ローム粒子多量。
- 2 黄褐色土 ロームブロック多量。



第43図 土壇 (縄文時代) (5)



第 103 号土壇

- 1 暗褐色土 ロームブロック・鉄分多量。
- 2 暗褐色土 焼土粒子・ローム粒子・鉄分少量。
- 3 暗黄褐色土 ロームブロック多量、鉄分なし。

第 104 号土壇

- 1 紫褐色土 焼土粒子少量。
- 2 暗褐色土 ロームブロック少量。
- 3 暗褐色土 ロームブロックやや多量。

第 105 号土壇

- 1 紫褐色土 鉄分多量、ロームブロック少量。
- 2 紫褐色土 ロームブロック多量、鉄分少量。

第 107 号土壇

- 1 暗褐色土 ロームブロック、ローム小ブロック少量。
- 2 暗褐色土 ロームブロック・ローム小ブロック少量。
- 3 褐色土 ロームブロック。

第 110 号土壇

- 1 暗褐色土 ローム小ブロック少量。
- 2 暗褐色土 ロームブロック・ローム小ブロック少量。

第 111 号土壇

- 1 暗褐色土 ロームブロック、ローム小ブロック少量。
- 2 暗褐色土 ロームブロック多量。
- 3 褐色土 ロームブロック・ローム粒子。

第 112 号土壇

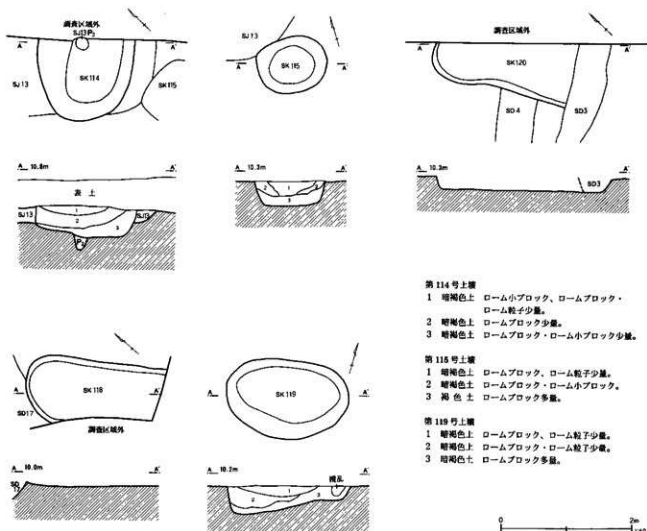
- 1 暗褐色土 ロームブロック・ローム小ブロック少量。
- 2 褐色土 ロームブロック多量。

第 113 号土壇

- 1 暗褐色土 ローム小ブロック・ロームブロック少量。
- 2 褐色土 ロームブロック少量。
- 3 褐色土 ロームブロック多量。



第44図 土壙 (縄文時代) (6)



第114号土壙

- 1 暗褐色土 ローム小ブロック、ロームブロック・ローム粒子少量。
- 2 暗褐色土 ロームブロック少量。
- 3 暗褐色土 ロームブロック・ローム小ブロック少量。

第115号土壙

- 1 暗褐色土 ロームブロック、ローム粒子少量。
- 2 暗褐色土 ロームブロック・ローム小ブロック。
- 3 褐色土 ロームブロック多量。

第119号土壙

- 1 暗褐色土 ロームブロック、ローム粒子少量。
- 2 暗褐色土 ロームブロック・ローム粒子少量。
- 3 暗褐色土 ロームブロック多量。

第62号土壙 (第39・45図)

H-8グリッドに位置する。平面形は楕円形、長径1.5m、短径1.3m、深さ133cm。主軸方位はN-11°-W。第45図26-32が出土した。26は連弧文土器の口縁部で、3本の沈線が横走し、以下条線を地文とする。27も条線地文で沈線が蛇行垂下する。28は沈線間に凹形刺突が連続する。29・31は加曾利E式の胴部である。30は沈線で曲線を描く。32は打製石斧で、上端を欠損する。長さ8.7cm、幅4.3cm、厚さ2.4cm、重さ89.20gを測る。石質はフォルンフェルス。

第63号土壙 (第39・45図)

H-7グリッドに位置する。中・近世の遺構であるSD8に切られる。平面形は楕円形、長径1.1m、現存

短径0.8m、深さ31cm。主軸方位はN-55°-E。第45図34・35が出土した。34は胴部で、縄文地文に2本沈線で渦巻きを描く。35は加曾利E式の胴部。

第64号土壙 (第39図)

H-7グリッド。平面形は楕円形。長径1.0m、短径0.9m、深さ15cm。主軸方位はN-17°-E。

第65号土壙 (第40図)

H-7グリッドに位置する。SD8に切られ、SK66と重複する。幅1.2m、深さ13cmを測る。

第66号土壙 (第40・45図)

G-8グリッドに位置する。SD8に切られ、SK65と重複する。平面形は楕円形。規模は、長径1.7m、短径約1.2m、深さ12cm。主軸方位はN-9°-W。第

45図33が覆土中から出土。微隆帯が曲線的にめぐり、縄文帯と無文帯を区画する。縄文中期末葉。

第68号土壌 (第40図)

G-7グリッドに位置する。SK79に切られ、SK81と重複する。深さ32cmを測る。

第69号土壌 (第40図)

G-7・8グリッドに位置する。平面形は不定形。長さ1.7m、幅0.8m、深さ16cmを測る。主軸方位はN-52°-W。

第70号土壌 (第40図)

F-7グリッドに位置する。平面形は楕円形。規模は、長径1.6m、現存短径1.3m、深さ12cm。主軸方位はN-61°-W。

第71号土壌 (第41図)

F-6グリッドに位置する。S J 5・SK80・83を切って構築され、SK94と重複する。平面形は楕円形。規模は、長径1.9m、短径1.3m、深さ55cm。主軸方位はN-48°-E。

第72号土壌 (第40・46図)

G-7グリッド。楕円形。長径1.7m、短径1.5m、深さ36cm。主軸方位はN-42°-W。第46図36-38が出土した。36-37は加曾利E式で、36は波状口縁、37は胴部。38は無文の底部で、縄文後期。

第76号土壌 (第40・46図)

F-6グリッドに位置する。SK84と重複し、S J 4に接する。不整形。直径1.7m、深さ13cmを測る。第46図41-45が出土。いずれも加曾利E式の胴部。42は3本沈線の懸垂文から曲線モチーフが分岐する。

第78号土壌 (第41図)

F-7グリッドに位置する。平面形は推定円形。最大径約1m、深さ28cmを測る。

第79号土壌 (第40図)

G-7グリッドに位置する。SK68を切って構築される。平面形は不定形。深さ28cmを測る。

第80号土壌 (第41図)

F-6グリッド。SK71に切られ、S J 5を切って構築される。円形。直径0.7m、深さ42cmを測る。

第81号土壌 (第40図)

G-7グリッドに位置する。SK68・79と重複する。深さ33cmを測る。

第82号土壌 (第41・46図)

F-6グリッド。中・近世のSK77に切られる。平面形は楕円形。長径2.2m、短径1.5m、深さ13cm。主軸方位はN-69°-E。第46図39・40が出土した。39は連弧文土器。40は縄文地文の中期土器。

第83号土壌 (第41・46図)

F-6グリッドに位置する。SK71・77に切られる。平面形は楕円形。規模は、長径0.8m、短径0.6m、深さ58cm。主軸方位はN-84°-W。第46図46-48が覆土中から出土した。46は縄文早期の燃糸文系土器、47・48は加曾利E式の胴部である。

第84号土壌 (第40・46図)

F-6グリッドに位置する。SK76と重複する。平面形は楕円形。規模は、長径0.8m、現存短径0.5m、深さ52cm。主軸方位はN-11°-W。第46図52・53が覆土中から出土した。加曾利E式土器。

第85号土壌 (第41・46図)

F-6グリッドに位置する。平面形は楕円形。規模は、長径1.1m、短径0.9m、深さ67cm。主軸方位はN-29°-E。第46図54・55が覆土中から出土した。54は加曾利E式の胴部、55は連弧文土器である。

第86号土壌 (第41図)

F-6グリッドに位置する。平面形は楕円形である。規模は、長径0.9m、短径0.7m、深さ12cmである。主軸方位はN-75°-Wを測る。

第88号土壌 (第41図)

E-4南グリッドに位置する。平面形は円形である。規模は、直径1.2m、深さ29cmである。

第89号土壌 (第41図)

E-4南グリッドに位置する。平面形は不整形。規模は、直径1.1m、深さ22cmである。

第90号土壌 (第41・46図)

E-5南グリッドに位置する。平面形は円形である。規模は、直径1.2m、深さ27cmである。第46図49が覆土

45図33が覆土中から出土。微隆帯が曲線的にめぐり、縄文帯と無文帯を区画する。縄文中期木葉。

第68号土墳 (第40図)

G-7グリッドに位置する。SK79に切られ、SK81と重複する。深さ32cmを測る。

第69号土墳 (第40図)

G-7・8グリッドに位置する。平面形は不定形。長さ1.7m、幅0.8m、深さ16cmを測る。主軸方位はN-52°-W。

第70号土墳 (第40図)

F-7グリッドに位置する。平面形は楕円形。規模は、長径1.6m、現存短径1.3m、深さ12cm。主軸方位はN-61°-W。

第71号土墳 (第41図)

F-6グリッドに位置する。SJ5・SK80・83を切って構築され、SK94と重複する。平面形は楕円形。規模は、長径1.9m、短径1.3m、深さ55cm。主軸方位はN-48°-E。

第72号土墳 (第40・46図)

G-7グリッド。楕円形。長径1.7m、短径1.5m、深さ36cm。主軸方位はN-42°-W。第46図36~38が出土した。36・37は加曾利E式で、36は波状口縁、37は胴部。38は無文の低部で、縄文後期。

第76号土墳 (第40・46図)

F-6グリッドに位置する。SK84と重複し、SJ4に接する。不整形。直径1.7m、深さ13cmを測る。第46図41~45が出土。いずれも加曾利E式の胴部。42は3本沈線の懸垂文から出線モチーフが分岐する。

第78号土墳 (第41図)

F-7グリッドに位置する。平面形は推定円形。最大径約1m、深さ28cmを測る。

第79号土墳 (第40図)

G-7グリッドに位置する。SK68を切って構築される。平面形は不定形。深さ28cmを測る。

第80号土墳 (第41図)

F-6グリッド。SK71に切られ、SJ5を切って構築される。円形。直径0.7m、深さ42cmを測る。

第81号土墳 (第40図)

G-7グリッドに位置する。SK68・79と重複する。深さ33cmを測る。

第82号土墳 (第41・46図)

F-6グリッド。中・近世のSK77に切られる。平面形は楕円形。長径2.2m、短径1.5m、深さ13cm。主軸方位はN-69°-E。第46図39・40が出土した。39は連弧文土器。40は縄文地文の中期土器。

第83号土墳 (第41・46図)

F-6グリッドに位置する。SK71・77に切られる。平面形は楕円形。規模は、長径0.8m、短径0.6m、深さ58cm。主軸方位はN-84°-W。第46図46~48が覆土中から出土した。46は縄文早期の燃糸文系土器、47・48は加曾利E式の胴部である。

第84号土墳 (第40・46図)

F-6グリッドに位置する。SK76と重複する。平面形は楕円形。規模は、長径0.8m、現存短径0.5m、深さ52cm。主軸方位はN-11°-W。第46図52・53が覆土中から出土した。加曾利E式土器。

第85号土墳 (第41・46図)

F-6グリッドに位置する。平面形は楕円形。規模は、長径1.1m、短径0.9m、深さ67cm。主軸方位はN-29°-E。第46図54・55が覆土中から出土した。54は加曾利E式の胴部、55は連弧文土器である。

第86号土墳 (第41図)

F-6グリッドに位置する。平面形は楕円形である。規模は、長径0.9m、短径0.7m、深さ12cmである。主軸方位はN-75°-Wを測る。

第88号土墳 (第41図)

E-4南グリッドに位置する。平面形は円形である。規模は、直径1.2m、深さ29cmである。

第89号土墳 (第41図)

E-4南グリッドに位置する。平面形は不整形。規模は、直径1.1m、深さ22cmである。

第90号土墳 (第41・46図)

E-5南グリッドに位置する。平面形は円形である。規模は、直径1.2m、深さ27cmである。第46図49が覆土

中から出土した。縄文中期末葉の波状口縁。

第91号土壌 (第42図)

F-5グリッドに位置する。平面形は楕円形で、中心に小ピットを伴う。規模は、長径1.1m、短径0.9m、深さ45cm。主軸方位はN-8°-E。

第92号土壌 (第42図)

F-5グリッドに位置する。平面形は楕円形である。規模は、長径1.3m、短径0.8m、深さ19cmである。主軸方位はN-61°-Eを測る。

第93号土壌 (第42図)

F-5グリッドに位置する。平面形は楕円形である。規模は、長径1.8m、短径1.4m、深さ19cmである。主軸方位はN-39°-Eを測る。

第94号土壌 (第41図)

F-6グリッドに位置する。SK71・77・83と重複する。平面形は楕円形。規模は、長径1.0m、短径0.6m、深さ73cm。主軸方位はN-26°-W。

第95号土壌 (第42・46図)

E-5南グリッドに位置する。平面形は楕円形。規模は、長径1.6m、短径1.2m、深さ21cm。主軸方位はN-6°-W。第46図50・51が覆土中から出土した。50は2本の微隆帯が垂下する。縄文中期末葉。

第96号土壌 (第42図)

E-5南グリッドに位置する。平面形は楕円形である。規模は、長径1.8m、短径0.8m、深さ13cmである。主軸方位はN-35°-Eを測る。

第97号土壌 (第42図)

F-6グリッドに位置する。平面形は楕円形である。規模は、長径1.2m、短径1.1m、深さ9cmである。主軸方位はN-90°-Wを測る。

第98号土壌 (第42・46図)

F-6グリッドに位置する。平面形は楕円形。規模は、長径1.7m、短径1.1m、深さ33cm。主軸方位はN-21°-W。第46図56-59が覆土中から出土した。56・58は胎土に繊維を含み、縄文が施文される。縄文前期。57・59は縄文中期の土器で、57は区画文内に沈線を施文、59は2列の円形刺突文が連続する。

第99号土壌 (第42・46図)

P-5グリッドに位置する。平面形は楕円形。規模は、長径1.4m、短径1.3m、深さ14cm。主軸方位はN-45°-E。第46図60-64が覆土中から出土した。60-62・64は胎土に繊維を含む縄文前期の土器で、縄文が施文される。63は加曾利E式の胴部である。

第100号土壌 (第42・46図)

E-5南グリッドに位置する。平面形は楕円形。規模は、長径1.4m、短径1.3m、深さ11cm。主軸方位はN-42°-E。第46図65-69が覆土中から出土した。65-67は加曾利E式の胴部で、67は条線地文。68は縄文後期の底部で、上部にわずかに条線の地文が見られる。69はチャート製のスクレイパー。長さ3.2cm、幅4.6cm、厚さ0.95cm、重さ12.65gを測る。

第101号土壌 (第42図)

D-4グリッドに位置する。平面形は楕円形である。規模は、長径1.7m、短径1.3m、深さ24cmである。主軸方位はN-73°-Wを測る。

第102号土壌 (第42・46図)

D-4グリッドに位置する。平面形は楕円形。規模は、長径1.8m、短径1.3m、深さ18cm。主軸方位はN-48°-W。第46図70-74が出土した。5点とも加曾利E式で、74は磨消懸垂文の間に1本の蛇行沈線を配する。71・72は口縁部近くの破片である。

第103号土壌 (第43図)

F-5グリッドに位置する。平面形は楕円形である。規模は、長径1.6m、短径1.4m、深さ18cmである。主軸方位はN-55°-Wを測る。

第104号土壌 (第43図)

F-5グリッドに位置する。平面形は楕円形である。規模は、長径1.0m、短径0.9m、深さ24cmである。主軸方位はN-30°-Eを測る。

第105号土壌 (第43・46図)

F-5グリッドに位置する。SJ7を切って構築される。平面形は楕円形。規模は、長径1.8m、短径1.4m、深さ27cm。主軸方位はN-81°-W。第46図75-80が覆土中から出土した。6点とも加曾利E式土器。75・77

は連弧文土器で、77は円形刺突を施文。76・79は浅鉢の口縁部で、76は横走沈線以下に条線、79は無文である。78・80は胴部で、80は微隆帯が横走る。

第106号土壙 (第43・46図)

C-3グリッドに位置する。平面形は楕円形。規模は、現存長径1.4m、短径0.8m、深さ96cm。主軸方位はN-26°-E。第46図81が覆土中から出土した。胎土に繊維を含む縄文施文の土器。縄文前期。

第107号土壙 (第43・46図)

C-3グリッドに位置する。平面形は楕円形。規模は、長径1.9m、短径1.4m、深さ39cm。主軸方位はN-26°-W。第46図82-84が覆土中から出土した。82・83は加曾利E式で、82は口縁部を隆帯で区画し、3本沈線が垂下、83は条線文が施文される。84は半截竹管による粗い平行沈線が施文される。曾利式土器。

第110号土壙 (第43図)

D-4グリッドに位置する。S J 9と重複する。平面形は楕円形である。規模は、長径1.3m、短径0.8m、深さ19cm。主軸方位はN-69°-Eを測る。

第111号土壙 (第43・47図)

E-3グリッドに位置する。平面形は楕円形。規模は、現存長径1.2m、短径1.1m、深さ19cm。主軸方位はN-69°-E。第47図85-87が覆土中から出土した。85は半截竹管による平行沈線が粗く施文。曾利式土器。86・87は加曾利E式の胴部である。

第112号土壙 (第43図)

C-3グリッドに位置する。S J 13を切って構築される。平面形は楕円形。規模は、長径1.9m、現存短径0.8m、深さ31cm。主軸方位はN-44°-W。

第113号土壙 (第43・47図)

B-3グリッドに位置する。大半が調査区外に及ぶ。深さ50cmを測る。第47図88・89が覆土中から出土した。88は連弧文土器で、縄文地文に2本の沈線が横走。89は無文の浅鉢口縁部。縄文中期。

第114号土壙 (第44・47図)

C-4グリッドに位置する。S J 3を切って構築される。平面形は楕円形。規模は、幅1.3m、深さ48cmを

測る。第47図96-98が覆土中から出土した。96は加曾利E式のキャリパー形土器である。口縁部は幅広の凹線で楕円区画がなされ、胴部には磨消懸垂文を狭い間隔で繰り返す。加曾利E III式。97は無文の浅鉢。98はキャリパー形土器の胴部で、幅広の無文帯が垂下、左側では沈線が斜めに無文帯を区画する。地文は複線縄文。

第115号土壙 (第44・47図)

C-4グリッドに位置する。S J 13の壁面に接する。平面形は楕円形。長径1.1m、短径0.9m、深さ39cm。主軸方位はN-74°-W。第47図90・91が覆土中から出土した。90は沈線による楕円区画文。91は口縁部で口唇と外面に斜縄文。2点とも縄文中期。

第118号土壙 (第44図)

E-3グリッドに位置する。中・近世の遺構であるS D 17に切られる。規模は、現存長2.1m、現存幅0.8m、深さ6cm。主軸方位はN-39°-Wを測る。

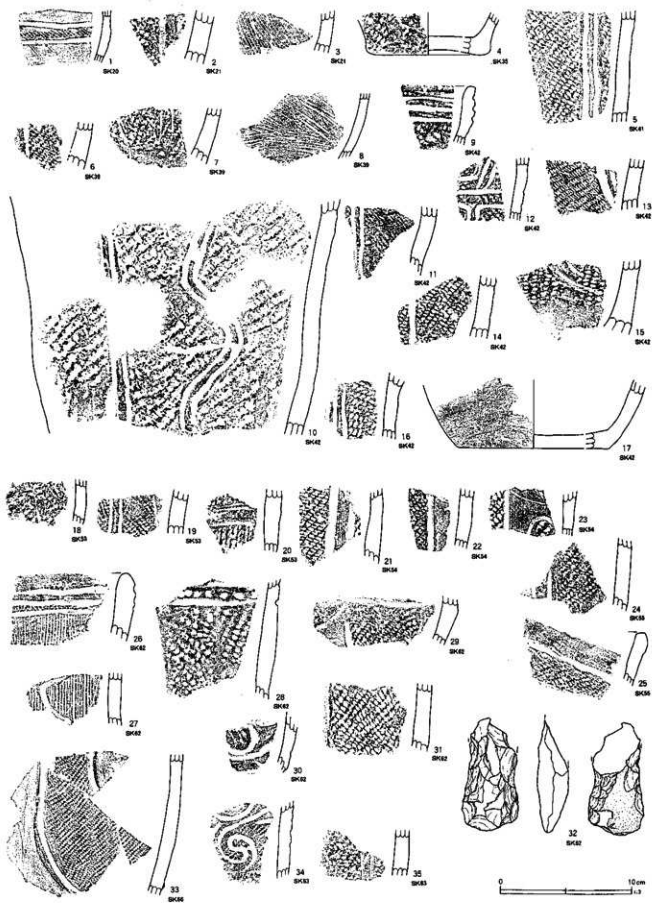
第119号土壙 (第44図)

D-2グリッドに位置する。平面形は楕円形である。規模は、長径1.9m、短径1.2m、深さ42cmである。主軸方位はN-73°-Eを測る。

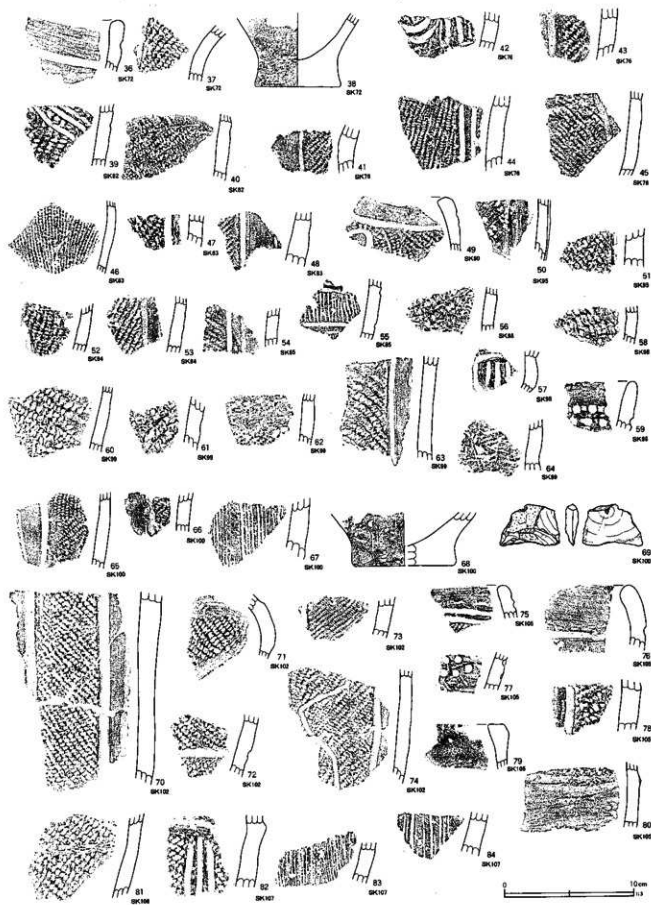
第120号土壙 (第44・47図)

I-9グリッドに位置する。中・近世の遺構であるS D 3・4に切られる。規模は、現存長2.2m、現存幅0.8m、深さ20cm。主軸方位はN-41°-W。第47図92-95が覆土中から出土した。4点は同一個体で、加曾利E式の胴部である。

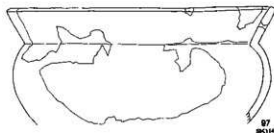
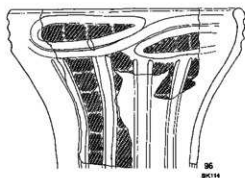
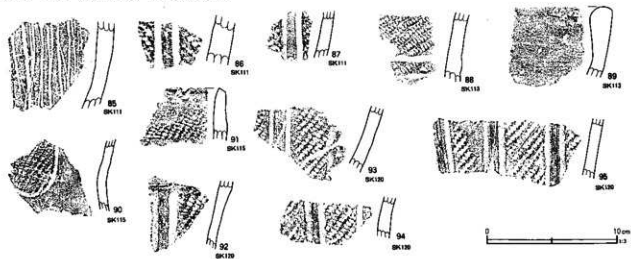
第45図 土壘（縄文時代）出土遺物（1）



第46図 土壌（縄文時代）出土遺物（2）



第47図 土壌（縄文時代）出土遺物（3）



(3) ビット (第48・49図)

第213号ビット

D-4グリッドに位置する。加曾利E式期のS J 10を切って構築される。平面形は円形に近い。直径45cm、深さ33cm。旧遺構名S J 10上ビット。第49図10が出土。後期加曾利B式土器である。斜め上方から斜線文を全面に施し、竪による連続爪形文を口唇と胴部中位にめぐらせる。

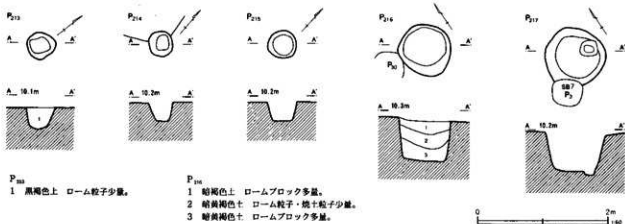
第214号ビット

G-7グリッドに位置する。SK72と重複する。平面形は円形。直径40cm、深さ28cmを測る。旧遺構名G-7グリッドP₂。第48図9が出土。P₂₅から出土した破片と接合した。加曾利E式の連弧文土器である。縄文を地文とし、口唇には2本の沈線が平行、3本1組の沈線が連弧を展開する。

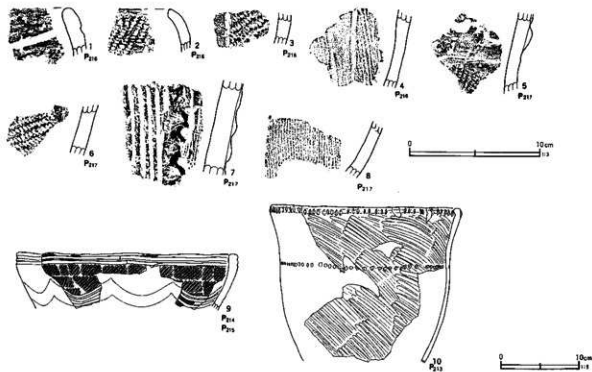
第215号ビット

G-7グリッドに位置する。平面形は円形。直径43

第48図 ビット (縄文時代)



第49図 ビット (縄文時代) 出土遺物



cm、深さ29cm。出土土器は第49図9である。P₂₁₄出土土器と接合した。旧遺構名G-7グリッドP₁。

第216号ビット

K-10グリッド。平面形は楕円形。長径86cm、短径80cm、深さ60cm。旧名K-10グリッドP₅。第49図1~4が出土した。4点とも加曾利E式土器。1は口縁部で沈線が横走。2は内湾する口縁部で、中期終末。3・4は磨消懸垂文の胴部。

第217号ビット

K-10グリッドに位置する。中・近世のSB7に切られる。平面形はほぼ円形。直径96cm、深さ60cm。底面に小ビットを伴う。旧遺構名K-10グリッドP₁₀。覆土中から第49図5~8が出土した。5・6は加曾利E式の胴部。7は曾利式土器。8は集合条線を施す胴部の土器である。

(4) グリッド出土遺物 (第50～52回)

遺構外からの縄文時代の出土遺物では、中期加曾利E式土器が大半である。その他には、早期燃糸文土器、早期貝殻条痕文土器、後・晩期の土器片が数点、前期の繊維を含む縄文施文土器が若干点、縄文中期の住居跡や土壌の覆土中に当該時期の遺物に混じて出土した。以下、各時期に分類し、記述する。

第1群土器 (1)

早期前半の燃糸文土器である。口唇が厚めに折り返され、細かい燃糸文が縦に施文される。口唇直下を穿孔する。薄手で焼成は良好、胎土に細かい白色砂粒、片岩を含む。色調は黄褐色を呈する。

第2群土器 (2～8)

早期の貝殻条痕文土器である。内外両面に貝殻条痕が見られ、胎土には繊維を多量に含む。2は隆帯状に段が横走し、その上を半截竹管で刺突する。他は条痕文のみの胴部破片である。色調は、5・7が橙、他は褐色を呈する。

第3群土器 (9～13)

胎土に多量の繊維を含む無文土器である。繊維量や焼成の具合が共通することから、第2群土器に伴う土器群であると考えられる。9～11は口縁部で、11は口唇が内削ぎ状になる。色調は9が褐色、10～12が黒褐色、13が橙色を呈する。

第4群土器 (14～32)

胎土中に繊維を含む、縄文施文土器を一括した。14～21は外傾する口縁部で、口唇が丸みを持つもの、平坦に面取りされるものなどがある。14は羽状縄文、28は附加条になる。32は底部直前まで縄文施文される。

内面は滑らかに整形されるものと、擦痕状の整形痕が目立つものがある。焼成はいずれも良好である。色調は15・19が黒褐色、他は黄褐色～褐色を呈する。

第5群土器 (33)

前期終末の燃糸片痕文施文の土器である。口唇に沿って燃糸片痕が2条の横走し、以下には1条単位で斜めに施文する。胎土中には繊維がまったく含まれず、大粒の石英と細かい砂粒を多く含む。焼成は堅くしま

っており、色調は褐色を呈する。

第6群土器 (34～97)

加曾利E式土器を主体とする中期後半から後期初頭にかけての土器を一括する。縄文遺構の検出状況に対応して、遺構外から最も多く出土した。

34～40はキャリバー形土器の口縁部である。34・35は隆帯と幅広の沈線によって渦巻文を配する。39は2本隆帯が口縁部内を区画する。3点とも渦巻文と区画文との組み合わせになるだろう。36は内部が無文の円形区画文を配し、口唇にそって幅のある無文になる。胴部との境は沈線で区画される。40は低い隆帯と幅広の沈線によって1本縁部内を区画する。37・38は櫛状工具による条線を地文とし、37は胴部に磨消懸垂文を施文、38は下部に同様の区画文が重なるだろう。

41～56はキャリバー形土器の胴部である。41は縄文地文に先の尖った工具で3本の平行沈線を垂下する。42は棒状工具、43はやや幅の広い沈線で、地文は燃糸文である。3点とも沈線間は磨り消されない。44～54は縄文地文に磨消懸垂文を配するもので、46・52は3本沈線になる。55は櫛状工具による集合条線を地文とし、平行沈線による直線と蛇行線が垂下する。56は沈線によるモチーフの一部で小渦巻が施文される。地文は燃糸文である。大木式系の土器と思われる。

57～68は連弧文土器である。57・58・62は口縁部に2本沈線が引かれるもので57・58は縄文、62は集合条線を地文にする。61は3本の沈線が引かれる。59・60は口縁部に連続刺突文を施文するもので、口縁に沿って2条の沈線を引いた後、竹管状工具によって円形刺突を施す。以下は縄文地文で、60は弧線文、59は弧線から転じた波状モチーフが展開する。63～66は胴上半部に弧線文が展開するもので、64～66は3本沈線、63は沈線間が意識的に磨り消される。67・68は口縁部から平行沈線が懸垂する。

69～72は曾利式系土器である。いずれも半截竹管による集合沈線を地文とする。70は口縁部。69・71は胴部に貼付隆帯が懸垂する。

73は断面が算盤玉状になる浅鉢土器の頸部である。

隆帯下には串状工具で細かい列点文を施文、下部を沈線で斜めに区画している。

74～77は口縁の波状突起部である。口縁部は沈線による縄文地の区画文になり、74・77は内側や突起頂部に幅広い沈線で渦巻文が描かれる。76には突起下が渦巻文になり、円形刺突が加えられる。

78・79はいわゆる吉井城山類である。波状口縁を幅広く沈線で区画し、無文区画モチーフが曲線を描く。

80・81はいわゆる加曾利EⅣ式土器である。口縁にそった沈線内に深溝状の連続刺突が加わり、以下縄文地に沈線でモチーフが描かれる。81は波頂部である。

82～85は微隆帯が施文される。82は波状口縁部、83・84は曲線モチーフとなり、84は末端がひれ状に隆起する。85は平行する隆帯間が無文帯になる。

86～88は集合条線が施文される。86は口縁部U字状に引かれ、87は波状、88は直線になる。

89～96は口縁部に列点文が施文される。いずれも口縁が内増し、96は波状、他は平縁になる。沈線内または沈線間に竹管状工具や先端の丸い工具によって2列以上の円形刺突を連続させる。以下は沈線で文様帯を区画し、89・90・93は縄文、91・94～96は燃糸文を施文する。92は口唇の折れ返し部に2列の列点文、以下は沈線でモチーフを描く。93は2列の列点文を1本の沈線で区画する。96は列点文以下に2本沈線で幅の狭い磨消モチーフが横に展開する。連瓦土器の口縁部刺突文と称名寺式土器の口縁部刺突文との間に位置するタイプの土器群であろうか。

97は中期終末に見られる深鉢土器の台状底部である。地文縄文が胴下部から続いて施文され、4箇所穿孔が見られる。うち2箇所は深い刺突で、他は下部中央まで穿孔される。

以上が、中期後半から後期初頭にかけての群である。いずれも胎土は砂粒を含み、焼成良好である。色調は多くの上器が黄褐色～褐色を呈し、一部に橙色に近いものもある。75・76・79・83・86・92は黒褐色を呈する。

第7群土器 (98～106)

縄文後期の土器を一括する。98・99は称名寺式土器である。98は波状口縁で2条の微隆起線の間に先の尖った工具による2列の円形刺突が連続する。99は口縁部無文帯を1条の沈線で区画し、以下縄文地の区画帯からJ字状または渦巻状のモチーフへと連なっていく。2点とも黄褐色を呈し、焼成良好である。100は後期初頭の底部である。色調は褐色である。

101は堀之内Ⅰ式土器の胴部である。蛇行沈線が垂下し、縄文地と無文地とを区画する。色調は黄褐色で焼成良好である。

102・104は堀之内Ⅱ式土器である。2点ともラッパ状に開く器形になる。102は口縁内面が凹線状に窪む。胴部には無文地に2本1組の沈線が帯状に横、斜めに描かれる。104も同様のモチーフが展開、区画帯内には縄文が施文される。2点ともに色調が黒褐色を呈し、焼成堅緻。

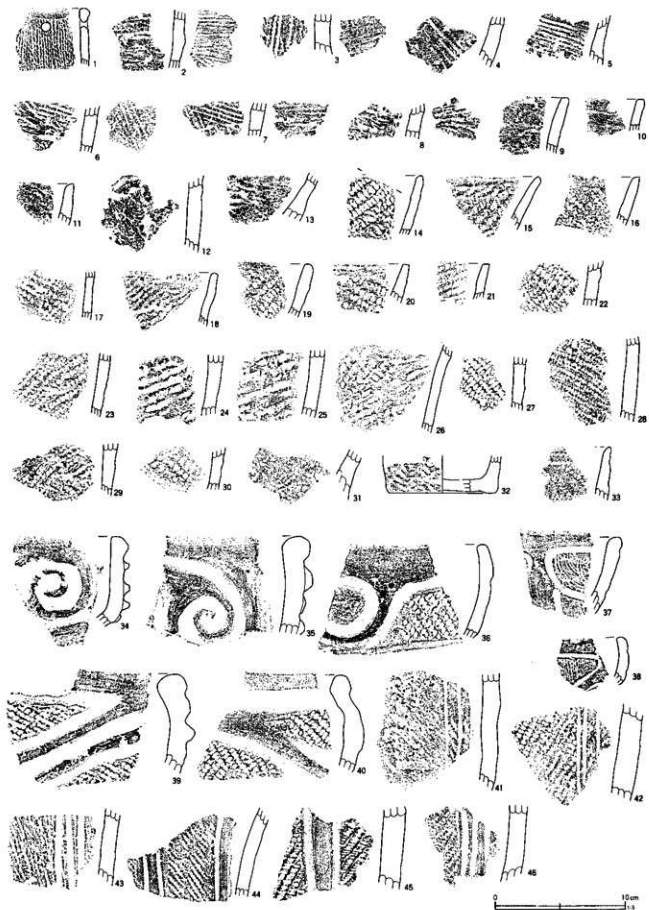
103は加曾利B式土器である。胴部中部で括れて胴部上半から口縁にかけて大きく開く器形である。口唇直下と胴部括れ部に筒状工具による連続刺突文が各1条めぐり、口縁の刺突文以下は1本の沈線で区画し、以下同工具によって粗く斜線文を施す。胴部括れ部以下にも斜め上方向からの斜線文になる。内面には口縁から胴上部に横方向、胴下部には縦方向の器面調整が丁寧になされる。胎土には細かい雲母片岩、白色砂粒を多く含み、焼成良好。色調は暗褐色を呈する。

105・106は後期安行式土器である。口縁に沿って縄文帯が段差状に区画される。胎土に砂粒を多く含む。色調は2点とも黄褐色である。

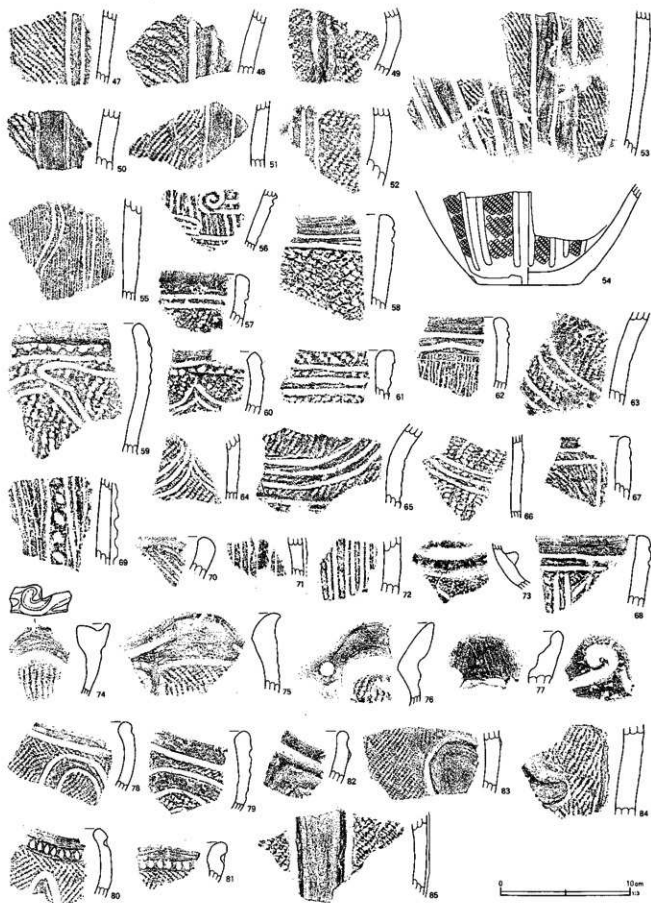
第8群土器 (107～110)

縄文晩期の土器を一括する。107は平坦な口唇で口縁部に2条の沈線が平行する。以下は滑らかな無文地で、碗状の器形になる。108・109は安行Ⅲc式土器。108は口縁部に列点文を施文、沈線で弧状に区画する。109も列点文を沈線が区画する。110は皿形土器の底部近くである。2本沈線で幅狭の帯状や三又状の縄文区画文を配する。以上4点とも焼成良好。砂粒を含み、

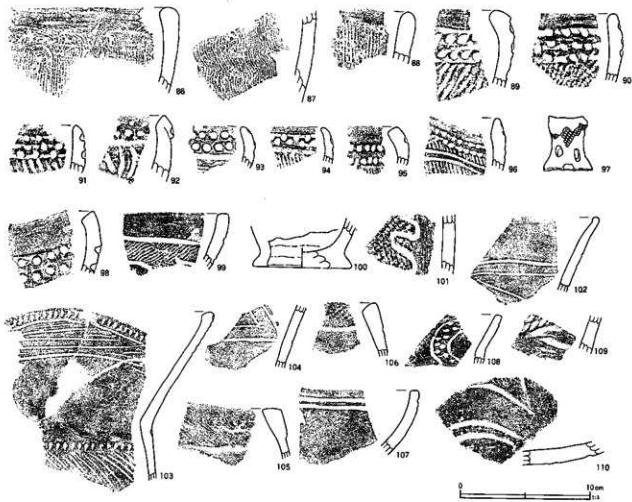
第50図 グリッド出土遺物（縄文時代）（1）



第51図 グリッド出土遺物(縄文時代)(2)



第52図 グリッド出土遺物（縄文時代）（3）



110は大粒の白色砂粒、片岩を多く含む。色調は108・109が黒褐色、107・110は黄褐色。

石器（111～120）

111・112はチャート製の石鎌である。111は長さ2.4cm、幅1.7cm、厚さ0.5cm、重さ1.46g。112は長さ2.4cm、幅1.3cm、厚さ0.4cm、重さ1.01gを測る。片側の返し部を欠損する。

113・114はスクレイパーである。113は長さ9.15cm、幅4.8cm、厚さ1.8cm、重さ66.64gを測る。正面左側縁部を使用している。石質はフォルンフェルスである。114はチャート製で、長さ3.65cm、幅2.8cm、厚さ1.15cm、重さ11.20gを測る。正面右側縁部に刃こぼれが見られる。

115～117はフォルンフェルス製の打製石斧である。115は長さ7.9cm、幅4.7cm、厚さ2.1cm、重さ95.25gを測

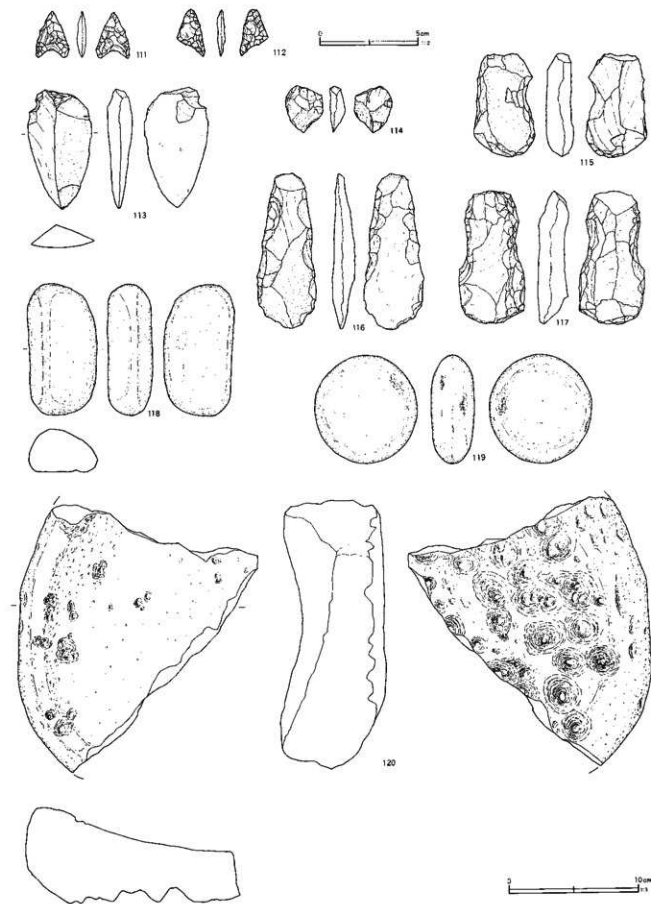
る。基部を一部欠損する。116は長さ11.8cm、幅4.45cm、厚さ1.7cm、重さ90g。117は長さ10.1cm、幅5.0cm、厚さ2.3cm、重さ135g。基部を一部欠損する。

118は敲石である。118は長さ10.0cm、幅5.2cm、厚さ3.4cm、重さ283gを測る。石質は石英閃緑岩である。両端部に敲打痕が見られる。

119は磨石である。長さ8.3cm、幅7.8cm、厚さ3.3cm、重さ285gを測る。石質は安山岩である。

120は石皿の一部である。現存で長さ20.5cm、幅17.6cm、中央部分の厚さ3.9cm、重さ2.15kgを測る。石質は角閃石安山岩である。裏面には多数の窪み部をもつ。

第53図 グリッド出土遺物（縄文時代）（4）



3. 中・近世

(1) 掘立柱建物跡

第1号掘立柱建物跡 (第54・55図)

J・K-10グリッドに位置する。SB6、SB7に重複するように位置している。桁行方位はN-45°-Wを測る。桁行7.0m、梁行4.7mを測る。桁行の柱間は2.5~2.1m、梁行の柱間は2.6~2.0mである。

柱穴の深さはP₁=58cm、P₂=82cm、P₃=53cm、P₄=45cm、P₅=50cm、P₆=58cm、P₇=64cm、P₈=67cm、P₉=39cmを測る。P₄からかわらけが2個体出土した。(第54図1・2)

第2号掘立柱建物跡 (第56図)

I・J-9グリッドに位置する。桁行方位はN-36°-Wを測る。桁行6.5m、梁行4.1mを測る。桁行の柱間は2.2mである。

柱穴の深さはP₁=56cm、P₂=66cm、P₃=52cm、P₄=51cm、P₅=66cm、P₆=64cm、61cm、P₈=63cmを測る。P₇から瓦質の内耳鍋の破片が出土した(第56図1)。口料が平坦で内面に段をもつ。15世紀後半のものと思われる。

第3号掘立柱建物跡 (第57図)

I-8・9グリッドに位置する。北隅の位置はSK120に重複し、南隅のピットは検出されなかったが、他のピットの配置状況から1棟の建物跡と判断した。桁行方位はN-35°-W。桁行6.2m、梁行4.0m。

柱穴の深さはP₁=65cm、P₂=75cm、P₃=51cm、P₄=67cm、P₅=52cm、P₆=54cm、P₇=73cmを測る。

第4号掘立柱建物跡 (第58図)

H・I-8・9グリッドに位置し、北側が調査区外へ続く。桁行を北東-南西方向にとるものと考えられる。西隅のピットが検出されなかったが、他のピットの配置状況から1棟の建物跡と判断した。梁行は3.7mを測る。桁行の柱間は2.1m。梁行の柱間は2.0mである。柱穴の深さはP₁=64cm、P₂=83cm、P₃=76cm、P₄=54cmを測る。

第5号掘立柱建物跡 (第59図)

J・K-9・10グリッドに位置し、南側が削平部へ

続く。桁行を北東-南西方向にとるものと考えられる。桁行方位はN-35°-Wを測る。梁行は4.4mを測る。桁行の柱間は2.0~1.7m。梁行の柱間は2.5~1.9mである。柱穴の深さはP₁=56cm、P₂=60cm、P₃=60cm、P₄=24cm、P₅=70cm、P₆=76cm、P₇=64cm。

第6号掘立柱建物跡 (第54・55図)

J-10グリッドに位置する。SB1、SB7に重複する。桁行方位はN-40°-Wを測る。桁行4.3m、梁行3.9mを測る。桁行の柱間は1.8~1.0m。梁行の柱間は2.0~0.6mである。

柱穴の深さはP₁=51cm、P₂=52cm、P₃=44cm、P₄=32cm、P₅=19cm、P₆=63cm、P₇=20cm、P₈=39cm、P₉=45cm、P₁₀=30cm、P₁₁=25cmを測る。

第7号掘立柱建物跡 (第54・55図)

J・K-9・10グリッドに位置する。SB1、SB6に重複する。ピットの間隔に規則性が見られないものの、位置関係から1棟の建物跡が想定できる。桁行方位はN-36°-W。桁行5.8m、梁行4.4m。

柱穴の深さはP₁=39cm、P₂=32cm、P₃=58cm、P₄=30cm、P₅=53cm、P₆=24cm、P₇=66cm、P₈=24cm、P₉=23cm、P₁₀=58cmを測る。

第8号掘立柱建物跡 (第60図)

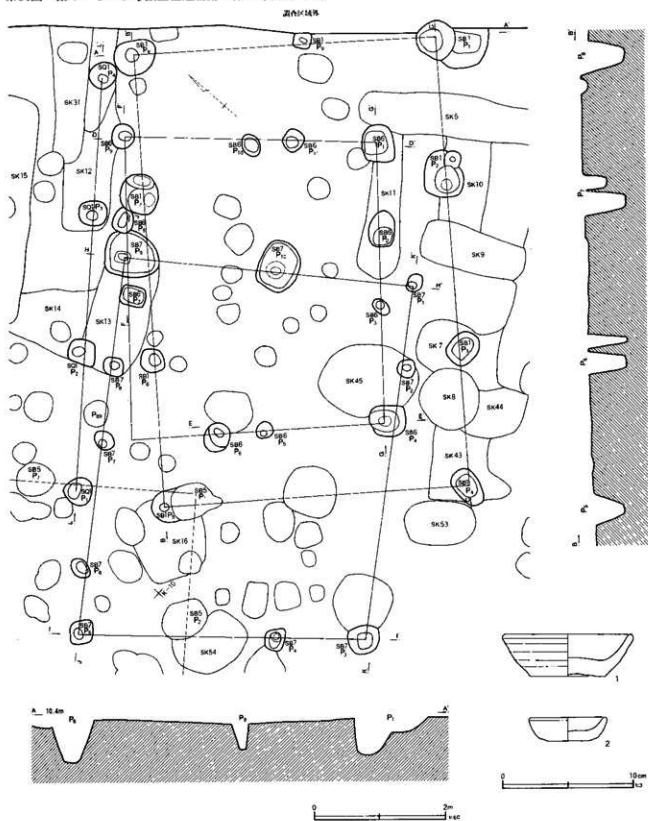
K-10グリッドに位置する。ピットの並びから東側へ伸びていたものと思われる。内側にもピットがめぐることから同遺構とした。桁行方位はN-43°-Wを測る。桁行5.0mを測る。桁行の柱間は2.5m。梁行の柱間は2.5mを測る。

柱穴の深さはP₁=58cm、P₂=63cm、P₃=68cm、P₄=22cm、P₅=74cm、P₆=62cm、P₇=16cm、P₈=23cm、P₉=18cmを測る。

第1号横列 (第54・55図)

J-9・10グリッド。N-52°-Eの方で4基のピットが直線に並び、ピットを結ぶ線は6.4m。ピットの間隔は2.1mと規則的である。方位が若干ずれるものの、SB1・6に沿うように位置する。柱穴の深さはP₁=64cm、P₂=59cm、P₃=49cm、P₄=56cm。

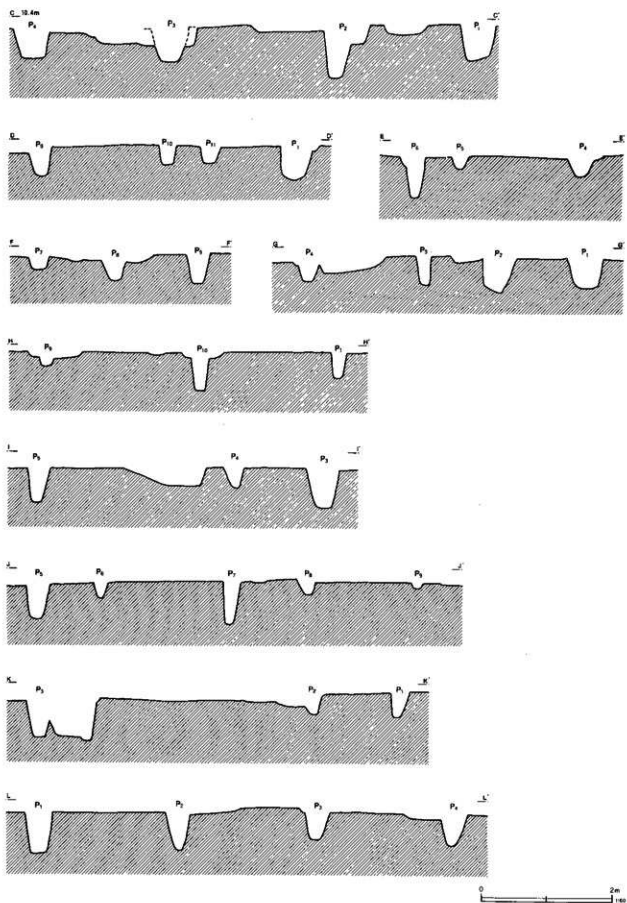
第54図 第1・6・7号掘立柱建物跡・第1号棚列(1)



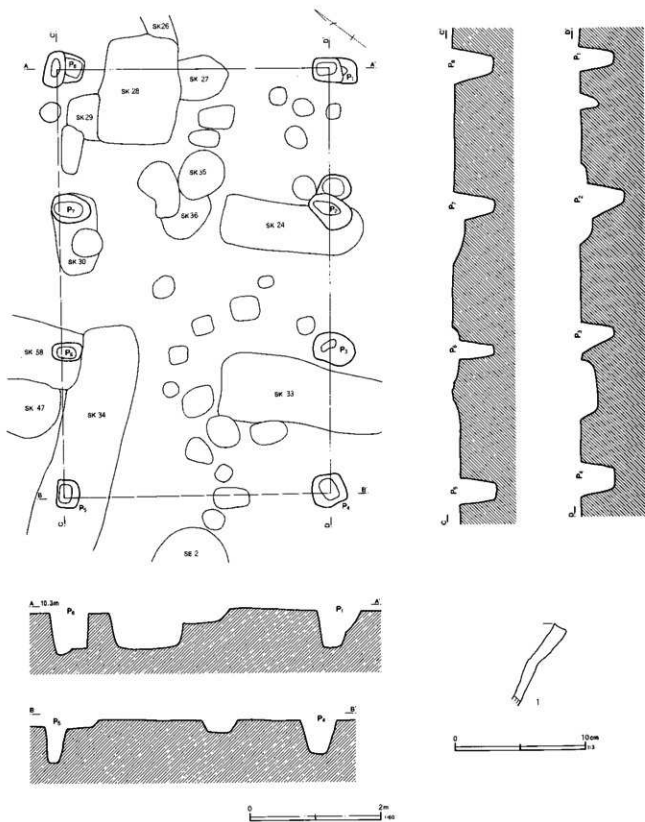
第1号掘立柱建物跡出土遺物観察表(第54図)

番号	器種	口径	器高	底径	胎上	色調	焼成	残存率	出土位置・備考
1	かわらけ	9.6	3.2	5.8	黒石	橙	B	55	SB1-P ₁
2	かわらけ	(5.8)	1.8	3.1		淡黄	A	60	SB1-P ₁

第55图 第1·6·7号掘立柱建物跡・第1号槽列(2)



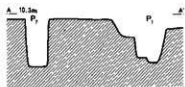
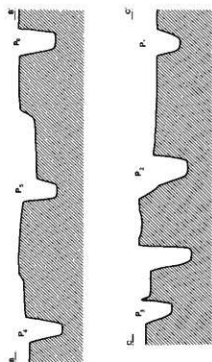
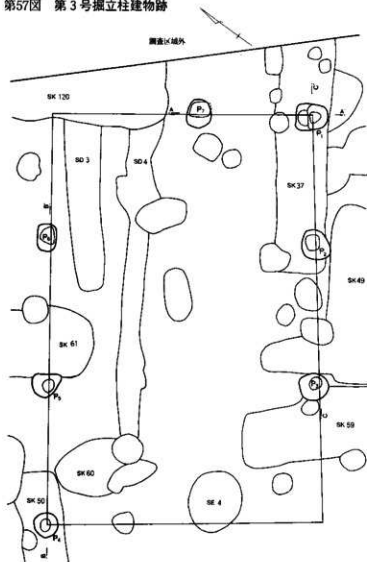
第56図 第2号掘立柱建物跡・出土遺物



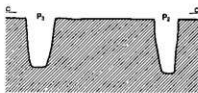
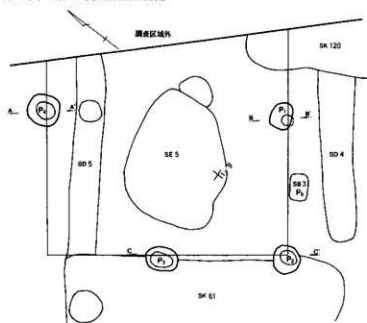
第2号掘立柱建物跡出土遺物観察表(第56図)

番号	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	残存率	出土位置・備考
1	内耳鍋	(32.2)			白	灰	A	20	SB 2-P ₅

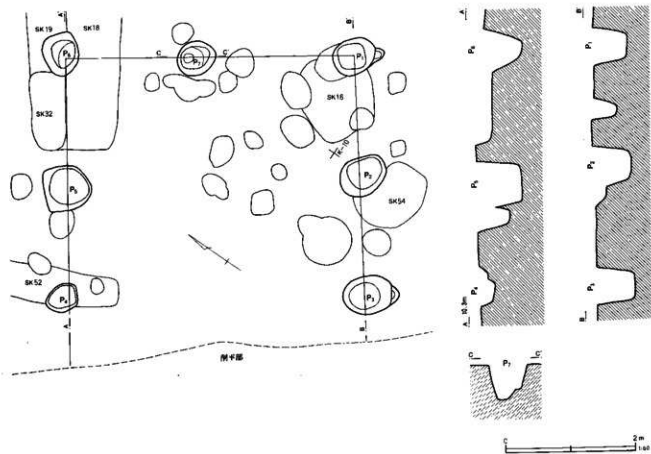
第57图 第3号掘立柱建物跡



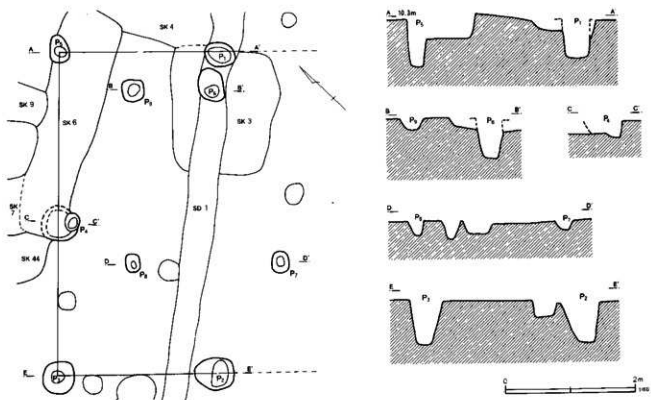
第58图 第4号掘立柱建物跡



第59图 第5号掘立柱建物跡



第60图 第8号掘立柱建物跡



(2) 井戸跡

第1号井戸跡 (第61・62図)

J-10グリッドに位置する。P₁₀と重複する。平面形は楕円形である。規模は、長径1.2m、短径1.0m、深さ2.2mである。主軸方位はN-23°-Eを測る。覆土は上層が暗褐色土、下層が黒褐色土である。覆土中から播鉢、焙烙、天目茶碗、かわらけ、五輪塔の水輪、板碑破片などが出土した。(第62図1-11)

1・2はかわらけである。3は天目茶碗である。内面にはさび釉が施される。17世紀前半のものと思われる。4-7は焙烙の把手部で、把手の下端が体部に付く浅めの土器で、内面の体部中に段をもつ。16世紀代のもと思われる。8は板碑の頭部に近い部分。9・10は播鉢である。10は陶質で暗赤褐色に施釉される。大窯Ⅲ期のもと思われる。11は五輪塔の水輪で石質は凝灰岩である。

第2号井戸跡 (第61・63図)

J-9グリッドに位置する。平面形は円形である。規模は、直径1.3m、深さ150cm以上になる。覆土は上層が暗褐色土、中層が黒褐色土、下層が褐色土である。覆土中からかわらけ、板碑破片、石臼破片などが出土した。(第63図12-19)

12・13はかわらけである。12は底部内面にロクロ成形後、一方向に指ナデした痕が見られる。14は用途不明の鉄片で、上部を欠損する。15は用途不明の軽石。16は石臼の受部と思われる。17は板碑の上半部である。梵字の部分がかほぼ完全にわかるもので、覆土下層から出土した。18・19は厚さから17とは別個体の破片であると思われる。

第3号井戸跡 (第61図)

L-10グリッドに位置する。平面形は円形である。規模は、直径0.8m、深さ158cmを測る。覆土は上層が暗褐色土、下層が暗灰色土である。

第4号井戸跡 (第61図)

I-8グリッドに位置する。平面形は楕円形である。規模は、長径1.0m、短径0.8m、深さ158cm以上。主軸方位はN-22°-W。覆土は暗褐色土である。

第5号井戸跡 (第61・63・64図)

H-8・9グリッドに位置する。P₁₀と重複する。平面形は不整楕円形である。規模は、長径1.9m、短径1.5m、深さ2.24cmを測る。覆土は上層が黒褐色土、下層が褐色土である。覆土中からかわらけ、焙烙の他、板碑破片などが出土した。(第63図20-第64図32)

20-24はかわらけである。20・23の底部穿孔は焼成後のものである。22も体部に2ヶ所、焼成後穿孔が見られる。25・27・28は焙烙である。把手部は3ヶ所で、把手の下端は体部につく浅めの土器である。内面に段をもつ。26は常滑産の播鉢である。15世紀前半のもと思われる。29-31は板碑破片である。29は梵字、31は阿彌陀三尊が描かれる。32は用途不明の軽石。

第6号井戸跡 (第61・64図)

G-8グリッドに位置する。SE7に切られることから、本遺構はSE7より古いことがわかる。平面形は不整楕円形と推定される。規模は、幅0.9m、深さ202cmを測る。主軸方位はN-35°-Wを測る。覆土は灰褐色土である。底面近くから灰軸皿2点、かわらけ1点が出土した。かわらけは灰軸皿に密着して出土した。(第64図33-35)

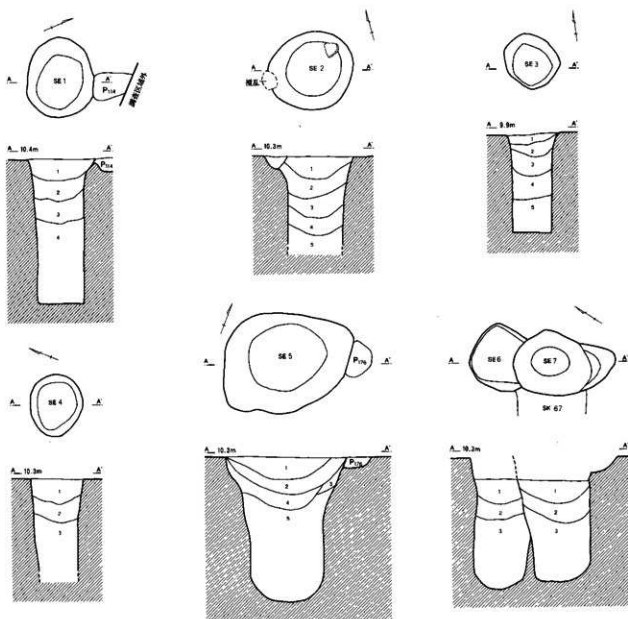
33は緑軸皿である。34は瀬戸・美濃産の端反り皿である。大窯Ⅰ期のもと思われる。35はかわらけで、出土した時は、灰が全面にこびりついた状態で、33の緑軸皿の外側に重なるように密着していた。成形はロクロ挽きだが、いびつな形をしている。

第7号井戸跡 (第61・65図)

H-8グリッドに位置する。SE6を切って構築される。平面形は楕円形である。規模は、長径1.6m、短径0.9m、深さ191cmを測る。主軸方位はN-35°-Wを測る。覆土は黒褐色土である。覆土中からかわらけ、石臼の破片などが出土した。(第65図36-41)

36-39はかわらけである。36は底部内面に指ナデ痕が残る。39は16世紀代のもと思われる。40は石臼の破片である。中央に軸棒を通す穴が見られ、裏面の側縁には石臼を挽く際の棒を入れる穴が見られる。41は用途不明の軽石である。

第61図 井戸跡



第1号井戸跡

- 1 暗褐色土 大粒焼土粒子・炭化物・ローム粒子多量。
- 2 暗褐色土 焼土粒子・炭化物・ロームブロック多量。
- 3 黒褐色土 ローム粒子・ロームブロック少量。
- 4 黒褐色土 ローム粒子少量。

第2号井戸跡

- 1 暗褐色土 ローム粒子・ローム小ブロック少量。
- 2 暗褐色土 ローム小ブロック・ローム粒子少量。
- 3 黒褐色土 ローム小ブロック少量。
- 4 黒褐色土 ロームブロック少量。
- 5 褐色土 ロームブロック。

第3号井戸跡

- 1 暗褐色土 ローム粒子・炭化物少量。
- 2 暗褐色土 炭化物少量、1よりローム粒子少量。
- 3 暗褐色土 炭化物・焼土粒少量。
- 4 暗灰色土 ローム粒子・ロームブロック少量。
- 5 暗灰色土 ローム土含まず。

第4号井戸跡

- 1 暗褐色土 焼土粒子・炭化物多量。
- 2 暗褐色土 焼土粒子多量、炭化物少量。
- 3 暗黄褐色土 ロームブロック多量。

第5号井戸跡

- 1 黒灰色土 焼土粒子・炭化物少量。
- 2 紫褐色土 大粒焼土粒子・炭化物多量。
- 3 黄褐色土 ロームブロック多量、炭化物少量。
- 4 褐色土 ローム粒子多量、ロームブロック少量。
- 5 褐色土 炭化物多量、ローム粒子少量。

第6号井戸跡

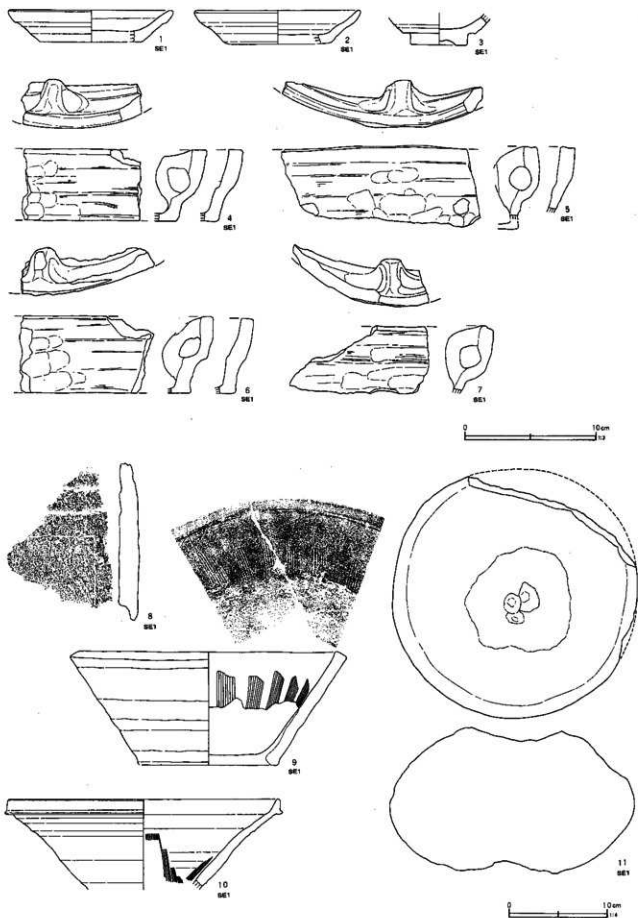
- 1 暗灰色土 ローム粒子多量。
- 2 灰褐色土 ローム粒子含まず。
- 3 灰褐色土 ローム粒子含まず、2よりやや明るい。

第7号井戸跡

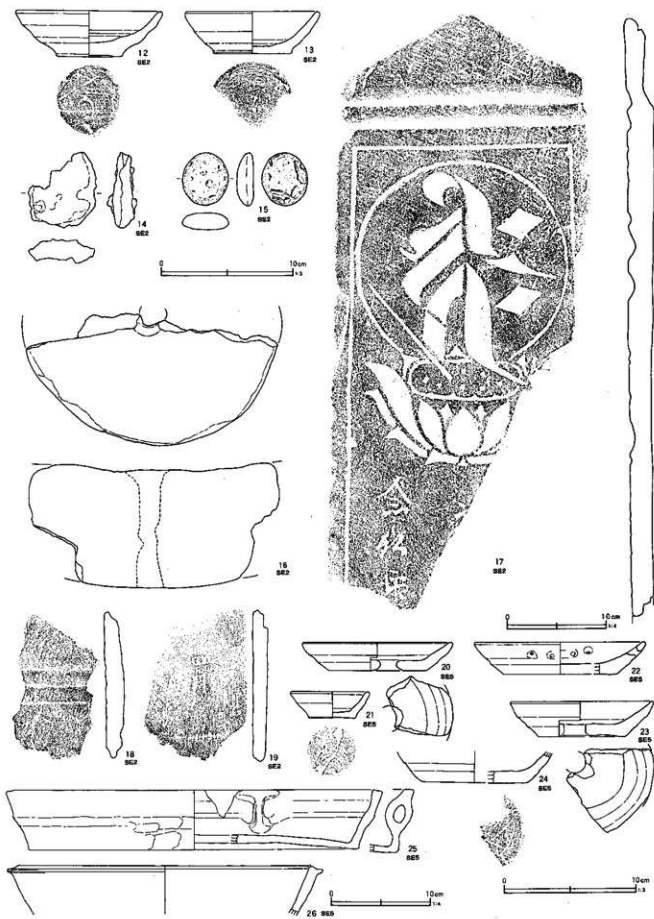
- 1 暗褐色土 ローム粒子・ロームブロック多量、炭化物少量。
- 2 暗褐色土 炭化物多量、ローム粒子少量。
- 3 紫褐色土 ロームブロック多量。



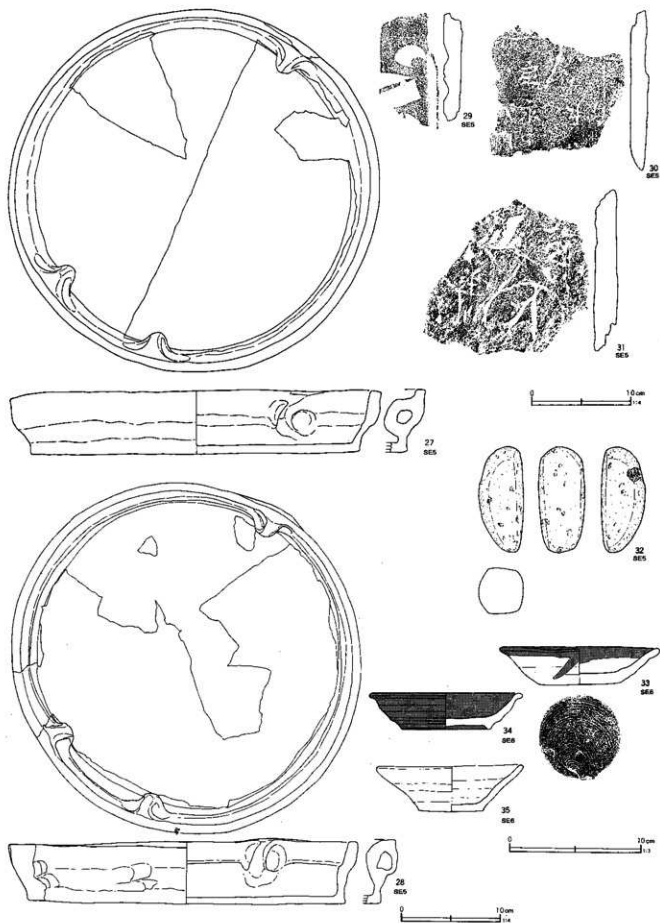
第62図 井戸跡出土遺物(1)



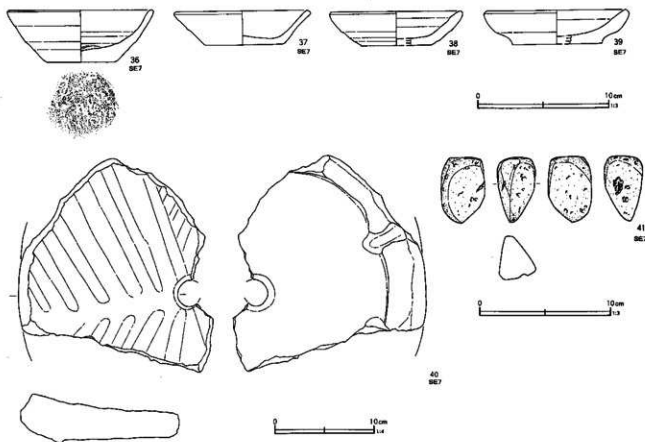
第63図 井戸跡出土遺物(2)



第64図 井戸跡出土遺物(3)



第65図 井戸跡出土遺物(4)



井戸跡出土遺物観察表(第62~65図)

番号	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	残存率	出土位置・備考
1	かわらけ	(12.1)	2.4	(7.7)	赤片	橙	B	15	SE1
2	かわらけ	(12.5)	2.5	(7.9)	白黒	橙	B	15	SE1
3	刃目茶碗			4.2		黒色	A	60	SE1 きび軸
4	焙烙	(38.6)	5.4	(34.0)	白赤黒片	黒褐	A	5	SE1
5	焙烙	(19.2)			白黒片	黒褐	A	15	SE1
6	焙烙	(38.6)	5.8	(36.0)	黒	黒褐	A	10	SE1
7	焙烙	(36.0)			黒片	黒褐	A	5	SE1
8	板石塔婆	長さ15.9cm、幅10.7cm、厚さ2.0cm、重さ640g			緑泥片岩製				
9	漆鉢	(26.0)	11.5	(14.0)	白砂雲石	明赤褐	A	80	SE1 在地系土器
10	漆鉢	(27.2)				暗赤褐	A	25	SE1 瀬戸・美濃産
11	五輪塔水輪	径25.0~25.5cm、厚さ15cm、重さ10430g			緑泥片岩製				
12	かわらけ	(10.9)	3.5	(5.0)	白片	灰白	A	60	SE2 底部回転糸切り痕
13	かわらけ	(9.8)	3.2	(5.7)	片	暗灰黄	A	25	SE2 底部回転鋭削り
14	鉄製品	長さ5.5cm、幅5.0cm、厚さ1.5cm、重さ56.35g							
15	軽石	長さ4.0cm、幅3.5cm、厚さ1.2cm、重さ8.9g			安山岩製				
16	石臼	径(26.0)cm、厚さ12.0cm、重さ4490g			凝灰岩製				
17	板石塔婆	長さ60.7cm、幅25.4cm、厚さ2.7cm、重さ7480g			緑泥片岩製				
18	板石塔婆	長さ14.7cm、幅8.9cm、厚さ1.8cm、重さ425g			緑泥片岩製				
19	板石塔婆	長さ15.3cm、幅10.5cm、厚さ1.5cm、重さ460g			緑泥片岩製				
20	かわらけ	(11.2)	2.2	(7.4)	片	粉	A	20	SE5 底部穿孔
21	かわらけ	6.0	2.0	3.4	白雲	橙	A	85	SE5 底部回転糸切り痕
22	かわらけ	(12.9)	2.4	(8.4)	白	橙	A	15	SE5 底部放射状線刻 体部穿孔2個

番号	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	残存率	出土位置・備考	
23	かわらけ	(10.6)	2.6	(6.5)	黒片	橙	A	25	SE5 底部回転糸切り痕 底部穿孔	
24	かわらけ			(8.0)	赤黒片	橙	B	20	SE5 焼成後底部に刻線	
25	焙烙	(38.2)	6.0	(33.6)	黒片	黒褐	A	50	SE5	
26	播鉢	(32.0)			白石	暗赤	A	10	SE5 常滑産	
27	焙烙	37.6	6.3	33.2	砂片	黒	A	75	SE5	
28	焙烙	35.2	6.2	32.2	砂石	黒	A	70	SE5	
29	板石塔婆	長さ10.8cm、幅6.0cm、厚さ1.9cm、重さ212g、緑泥片岩製								SE5
30	板石塔婆	長さ16.1cm、幅13.7cm、厚さ1.9cm、重さ600g、緑泥片岩製								SE5
31	板石塔婆	長さ16.2cm、幅16.5cm、厚さ2.4cm、重さ915g、緑泥片岩製								SE5
32	軽石	長さ7.9cm、幅3.5cm、厚さ3.4cm、重さ46.3g、安山岩製								SE5 用途不明
33	緑釉皿	12.1	2.7	6.0		緑灰	A	95	SE6 瀬戸・美濃産 灰釉 底部回転糸切り痕	
34	端反り皿	11.0	2.7	6.4		緑	A	70	SE6 瀬戸・美濃産 灰釉	
35	かわらけ	10.8	3.4	4.9		黒	A	100	SE6	
36	かわらけ	(10.8)	3.9	5.1	白片	橙	A	35	SE7 底部回転糸切り痕	
37	かわらけ	9.9	2.5	6.1	白	橙	A	80	SE7 底部回転糸切り痕	
38	かわらけ	(9.8)	2.6	(5.4)	黒	橙	B	25	SE7	
39	かわらけ	(10.5)	2.6	(6.8)	赤	橙	B	45	SE7	
40	石臼	径(34.0)cm、厚さ2.6~4.3cm、重さ2015g、角閃石安山岩製								SE7
41	軽石	長さ4.9cm、幅2.9cm、厚さ3.3cm、重さ12.6g、安山岩製								SE7 用途不明

(3) 土壌

第1号土壌 (第66図)

K-10・11グリッドに位置する。平面形は長方形である。規模は、長辺4.5m、短辺0.8m、深さ12cmを測る。主軸方位はN-59°-Eである。

第3号土壌 (第68図)

K-10グリッドに位置する。SD1に切られ、SK4と重複する。平面形は方形。長辺2.0m、短辺1.6m、深さ10cm。主軸方位はN-56°-E。

第4号土壌 (第66・72図)

K-10・11グリッドに位置する。SK6、SD1に切られ、SK3・5と重複する。平面形は方形である。規模は、現存長辺2.4m、短辺1.5m、深さ7cmを測る。主軸方位はN-34°-Wである。第72図3が出土した。3はかわらけで、17世紀前半のものと思われる。

第5号土壌 (第67・72図)

J-10グリッドに位置する。SK4・10・11と重複する。平面形は長方形である。長辺2.7m、短辺0.6m、深さ14cmである。主軸方位はN-33°-W。

覆土中から第72図1・10が出土した。1は志野皿である。登窯1期のものと思われる。10は用途不明の鉄

製品である。頭部が環状になり、下部は続くものと見られる。断面の形状は円形である。

第6号土壌 (第67・72図)

K-10グリッドに位置する。SK4・9・44を切つて構築される。SK7と重複する。平面形は方形である。規模は、長辺3.1m、短辺0.9m、深さ32cmである。主軸方位はN-65°-Eを測る。覆土中から第72図2が出土した。2はかわらけである。

第7号土壌 (第67図)

K-10グリッドに位置する。SK6・8・44と重複する。平面形は方形である。現存長辺1.3m、短辺0.9m、深さ28cm。主軸方位はN-33°-W。

第8号土壌 (第67図)

K-10グリッドに位置する。SK7・43・44と重複する。平面形は円形である。規模は、直径0.9m、深さ24cmである。

第9号土壌 (第67図)

J・K-10グリッドに位置する。SK6に切られる。SK10と重複する。平面形は方形である。規模は、現存長辺1.6m、短辺0.6m、深さ13cmである。主軸方位はN-27°-Wを測る。

第10号土墳 (第67図)

J-10グリッドに位置する。SK5・9と重複する。平面形は方形だったものと思われる。規模は、幅0.7m、深さ8cmである。

第11号土墳 (第67図)

J-10グリッドに位置する。SK5に切られる。平面形は長方形である。規模は、現存長辺2.3m、短辺0.5m、深さ11cm。主軸方位はN-51°-E。

第12号土墳 (第68図)

J-10グリッドに位置する。SK31、SB1・6、SQ1と重複する。平面形は方形である。規模は、現存長辺3.2m、短辺0.7m、深さ18cmである。主軸方位はN-52°-Eを測る。

第13号土墳 (第66図)

J-10グリッドに位置する。SK14、SB6・7、SQ1と重複する。平面形は方形である。規模は、現存長辺1.5m、短辺0.9m、深さ5cmである。主軸方位はN-59°-Eを測る。

第14号土墳 (第66図)

J-10グリッドに位置する。SK13・15、SQ1と重複する。平面形は不定形。規模は、幅1.0m、深さ6cmである。

第15号土墳 (第66図)

J-10グリッドに位置する。SK14と重複する。平面形は長方形である。規模は、長辺3.5m、短辺0.6m、深さ17cmである。主軸方位はN-53°-Eを測る。

第16号土墳 (第66・72図)

J-10グリッドに位置する。SB1・5と重複する。平面形は方形である。規模は、長辺1.3m、短辺1.1m、深さ6cmである。主軸方位はN-33°-Eを測る。覆土中から第72図4が出土した。4は近世のかわらけで、18世紀代のものと思われる。

第17号土墳 (第68図)

J-10グリッドに位置する。SK18、SD2に切られる。平面形は不定形。深さ8cmである。主軸方位はN-33°-Wを測る。

第18号土墳 (第68・72図)

J-9・10グリッドに位置する。SK17を切って構築される。SK19・32、SB5と重複する。平面形は長方形である。規模は、長辺5.0m、短辺0.9m、深さ32cmである。主軸方位はN-57°-Eを測る。覆土中から第72図6が出土した。6は天目茶碗である。

第19号土墳 (第68図)

J-9グリッドに位置する。SK18・32、SB5と重複する。平面形は方形である。規模は、現存長辺1.6m、現存短辺0.6m、深さ20cmである。主軸方位はN-54°-Eを測る。

第22号土墳 (第66・72図)

I・J-10グリッドに位置する。平面形は方形である。規模は、長辺1.5m、短辺0.5m、深さ19cmである。主軸方位はN-38°-Wを測る。覆土中から第72図9が出土した。9は焙烙の口縁部である。

第23号土墳 (第68・72図)

J-9グリッドに位置する。平面形は長方形に別の土墳が重複する形である。規模は、長辺4.0m、短辺0.7m、深さ20cm。主軸方位はN-50°-Eを測る。覆土中から第72図7が出土した。7は焙烙である。

第24号土墳 (第68図)

I・J-9グリッドに位置する。SB2と重複する。平面形は方形である。規模は、長辺2.2m、短辺0.8m、深さ18cmである。主軸方位はN-33°-Wを測る。

第25号土墳 (第68・72図)

J-9グリッドに位置する。SK56と重複する。平面形は長方形である。長辺4.7m、短辺0.7m、深さ42cmである。主軸方位はN-56°-Eを測る。覆土中から第72図11が出土した。11は土師質の鉢形土器である。

第26号土墳 (第69図)

I-9グリッドに位置する。SK28を切って構築される。現存の長さ0.8m、幅0.5m、深さ8cmである。

第27号土墳 (第69図)

I-9グリッドに位置する。SK28を切って構築される。平面形は方形。規模は、長辺1.0m、短辺0.7m、深さ21cmである。主軸方位はN-26°-Wを測る。

第28号土壌 (第69図)

I-9グリッドに位置する。SK26・27に切られる。SK29と重複する。平面形は方形である。規模は、長辺1.7m、短辺1.2m、深さ53cmである。主軸方位はN-56°-Eを測る。

第29号土壌 (第69図)

I-9グリッドに位置する。SK28と重複する。平面形は方形と思われる。幅0.7m、深さ11cmである。

第30号土壌 (第68図)

I-9グリッドに位置する。SB2と重複する。平面形は方形である。規模は、長辺1.3m、短辺0.7m、深さ23cmである。主軸方位はN-46°-Wを測る。

第31号土壌 (第66図)

J-10グリッドに位置する。SK12、SQ1と重複する。平面形は長方形。規模は、現存長辺2.0m、短辺0.5m、深さ12cm。主軸方位はN-52°-E。

第32号土壌 (第68図)

J-9グリッドに位置する。SK18・19、SB5と重複する。平面形は方形である。規模は、長辺1.2m、短辺0.5m、深さ23cm。主軸方位はN-54°-E。

第33号土壌 (第68図)

J-9グリッドに位置する。平面形は方形である。規模は、長辺2.6m、短辺1.0m、深さ26cm。主軸方位はN-28°-Wを測る。

第34号土壌 (第69図)

I・J-9グリッドに位置する。SK58、SB2と重複する。平面形は長方形である。規模は、長辺4.0m、短辺1.1m、深さ9cmである。主軸方位はN-66°-Eを測る。

第37号土壌 (第69図)

I-9グリッドに位置する。SB3と重複する。平面形は方形である。規模は、現存長辺3.5m、短辺0.8m、深さ31cm。主軸方位はN-57°-Wを測る。

第43号土壌 (第67図)

K-10グリッドに位置する。SK8・44、SB1と重複する。平面形は不定形。規模は、現存の長さ1.1m、幅0.9m、深さ7cmである。

第44号土壌 (第67図)

K-10グリッドに位置する。SK6・7・8・43と重複する。深さ12cmを測る。

第45号土壌 (第67・72図)

J・K-10グリッドに位置する。SB6・7と重複する。平面形は楕円形である。規模は、長径1.5m、短径1.1m、深さ22cm。主軸方位はN-38°-W。

覆土中から第72図12が出土した。12は北宋銭で、1068年初鑄年である熙寧元寶と思われる。

第46号土壌 (第69図)

J-9グリッドに位置する。平面形は長方形である。規模は、長辺3.2m、短辺0.9m、深さ28cmである。主軸方位はN-59°-Eを測る。

第47号土壌 (第69図)

I-9グリッドに位置する。SK58と重複する。平面形は円形である。直径1.0m、深さ10cm。覆土中から第72図5が出土した。5はかわらけである。

第48号土壌 (第68図)

I-9グリッドに位置する。平面形は方形である。規模は、長辺2.3m、短辺0.9m、深さ29cmである。

第49号土壌 (第69図)

I-9グリッドに位置する。SK58と重複する。平面形はL字形。規模は、長辺2.8m、短辺1.0m、深さ21cmである。主軸方位はN-52°-Eを測る。

第50号土壌 (第68図)

I-8グリッドに位置する。SB3と重複する。平面形は方形である。規模は、長辺2.2m、短辺0.7m、深さ16cmである。主軸方位はN-46°-Wを測る。

第52号土壌 (第70図)

J-9グリッドに位置する。SK56、SB5と重複する。平面形は長方形である。規模は、長辺2.8m、短辺0.5m、深さ20cmである。主軸方位はN-22°-Wを測る。

第56号土壌 (第70図)

J-9グリッドに位置する。SK25・52と重複する。平面形は方形である。規模は、長辺1.1m、短辺0.6m、深さ33cmである。主軸方位はN-58°-Eを測る。

第57号土壌 (第70図)

I-9グリッドに位置する。平面形は方形である。規模は、長辺1.4m、短辺0.7m、深さ19cmである。主軸方位はN-39°-Wを測る。

第58号土壌 (第70図)

I-9グリッドに位置する。SK34・47・49、SB2と重複する。平面形は方形である。規模は、現存長辺2.8m、短辺1.0m、深さ12cmである。主軸方位はN-30°-Wを測る。

第59号土壌 (第70図)

I-9グリッドに位置する。SB3と重複する。平面形は方形である。規模は、長辺2.4m、短辺1.1m、深さ12cmである。主軸方位はN-42°-Wを測る。

第60号土壌 (第70図)

I-8グリッドに位置する。平面形は楕円形である。規模は、長径1.2m、短径0.9m、深さ9cm。主軸方位はN-43°-Wを測る。

第61号土壌 (第70・72図)

H・I-8グリッドに位置する。SD5、SB3・4と重複する。平面形は方形である。長辺4.3m、短辺1.1m、深さ33cm。主軸方位はN-35°-W。覆土中から第72図8が出土した。8は焙烙の破片で、内面の体部中位に強い段をもつ。

第67号土壌 (第70図)

H-8グリッドに位置する。SE6・7に切られる。平面形は長方形である。現存長辺4.0m、短辺1.0m、深さ14cm。主軸方位はN-52°-Eを測る。

第73号土壌 (第70図)

G-7グリッドに位置する。平面形は長方形である。長辺3.4m、短辺0.5m、深さ5cm。主軸方位はN-56°-Eを測る。

第74号土壌 (第70図)

G-7グリッドに位置する。平面形は長方形である。規模は、長辺3.0m、短辺0.9m、深さ36cmである。主軸方位はN-38°-Wを測る。

第75号土壌 (第71図)

F-6グリッドに位置する。平面形は方形である。

規模は、長辺1.6m、短辺0.7m、深さ34cmである。主軸方位はN-33°-Wを測る。

第77号土壌 (第71図)

F-6グリッドに位置する。SK82・83を切って構築される。平面形は長方形である。長辺4.4m、短辺0.7m、深さ32cm。主軸方位はN-21°-W。

第87号土壌 (第71図)

G-6グリッドに位置する。平面形は楕円形である。規模は、長径1.8m、短径1.6m、深さ21cmである。主軸方位はN-49°-Wを測る。

第108号土壌 (第71図)

B-2・3グリッドに位置する。平面形は長方形である。長辺5.3m、短辺0.7m、深さ30cmである。

第109号土壌 (第71図)

B-2グリッドに位置する。平面形は方形である。規模は、長辺4.3m、短辺0.8m、深さ28cmである。主軸方位はN-57°-Eを測る。

第116号土壌 (第71図)

D・E-3グリッドに位置する。平面形は円形である。規模は、直径1.4m、深さ30cmである。

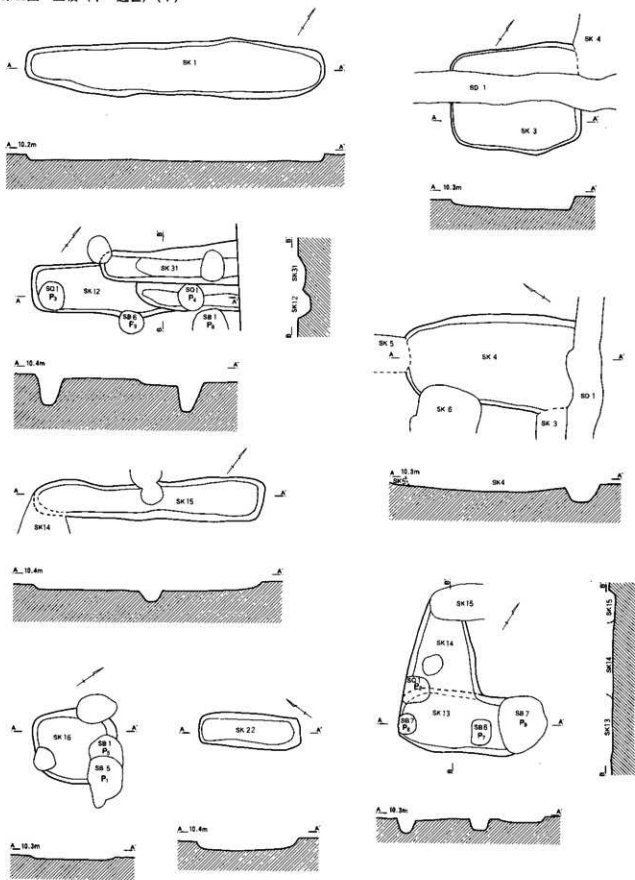
第117号土壌 (第71図)

D-3グリッドに位置する。SD14と重複する。平面形は円形である。直径1.7m、深さ28cmである。

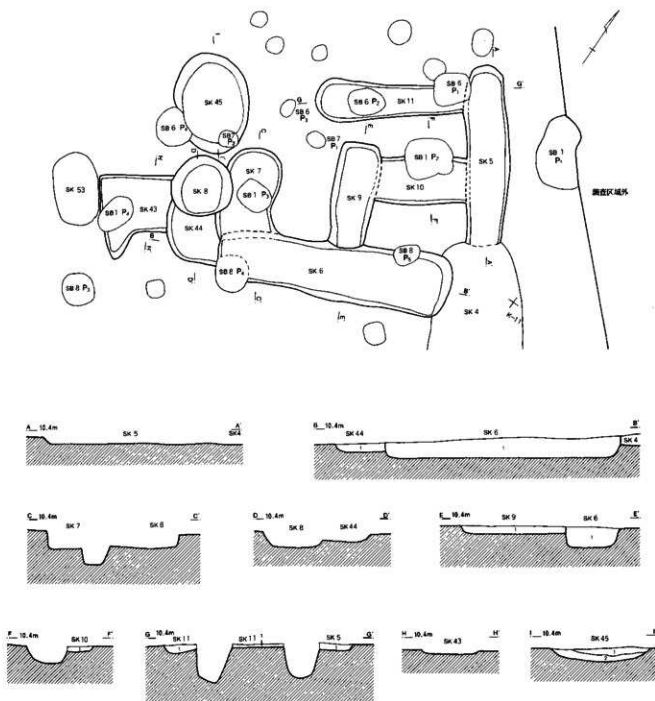
第121号土壌 (第71図)

C・D-4グリッドに位置する。長方形の土壌が3基重複する形となる。深さ45cmを測る。

第66图 土壟 (中・近世) (1)



第67図 土壌 (中・近世) (2)



第5号土壌

1 暗褐色土 ロームブロック多量、炭分多量。

第6号土壌

1 暗褐色土 ローム粒子・ロームブロック多量、焼土粒了・炭化物少量。

第9号土壌

1 暗褐色土 大粒ローム粒子・ロームブロック・炭化物少量。

第10号土壌

1 暗褐色土 大粒ローム粒子多量、炭化物少量。

第11号土壌

1 暗褐色土 ローム粒子・焼土粒了多量。

第44号土壌

1 暗褐色土 ローム粒了・ロームブロック多量、焼土粒了・炭化物少量。

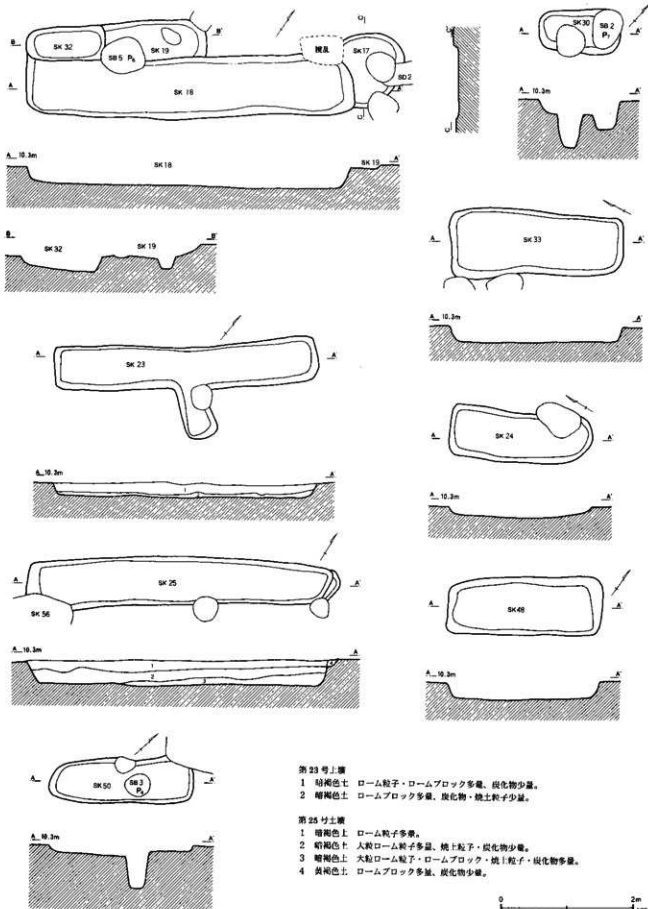
第45号土壌

1 暗褐色土 焼土粒了・炭化物。

2 黄褐色土 焼土粒子、ロームブロック多量。



第68図 土壇 (中・近世) (3)



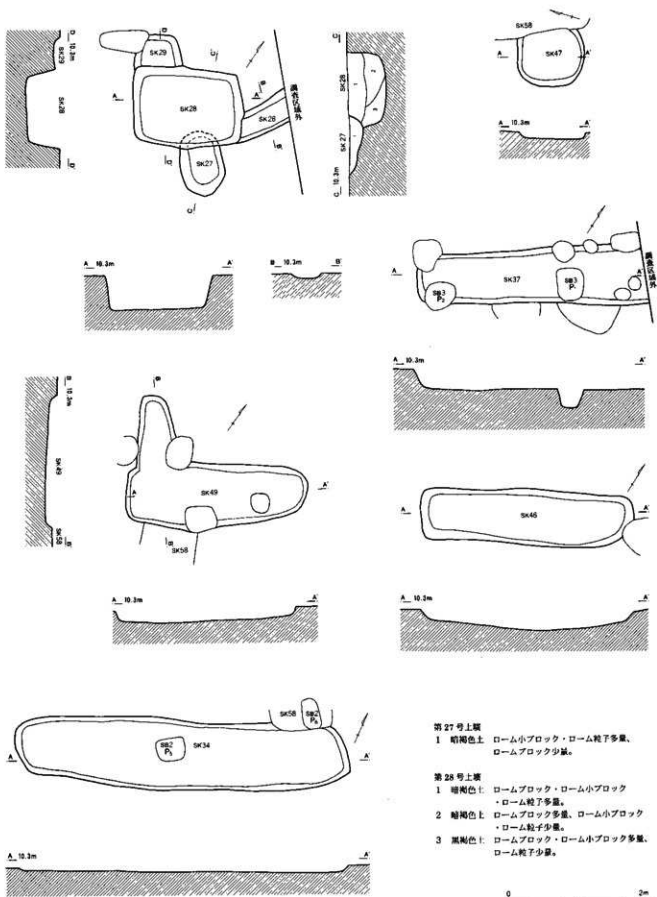
第23号土壇

- 1 暗褐色土 ローム粒子・ロームブロック多量、炭化物少量。
- 2 暗褐色土 ロームブロック多量、炭化物・焼土粒子少量。

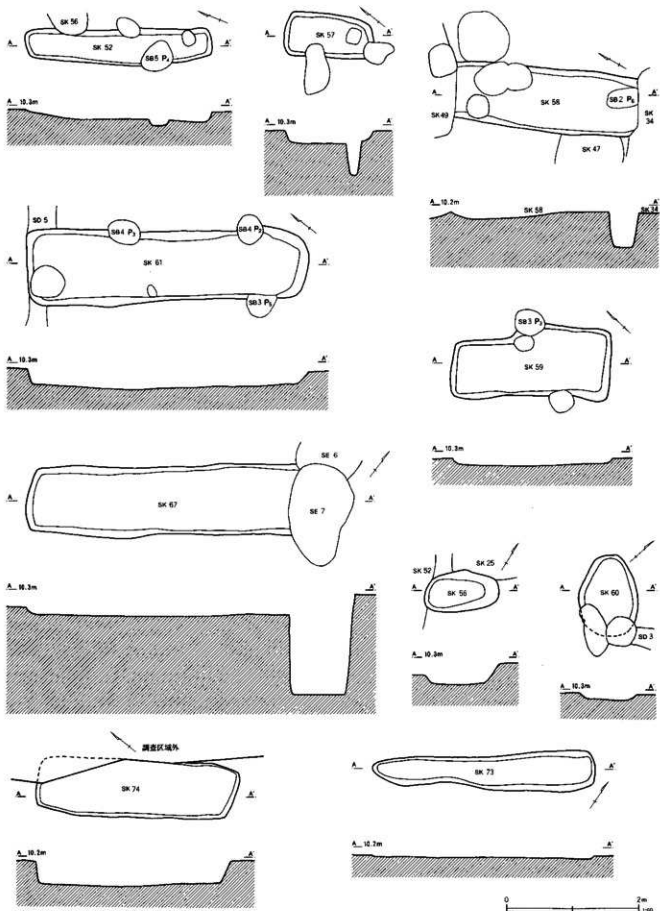
第25号土壇

- 1 暗褐色土 ローム粒子多量。
- 2 暗褐色土 大粒ローム粒子多量、焼土粒子・炭化物少量。
- 3 暗褐色土 大粒ローム粒子・ロームブロック・焼土粒子・炭化物多量。
- 4 黄褐色土 ロームブロック多量、炭化物少量。

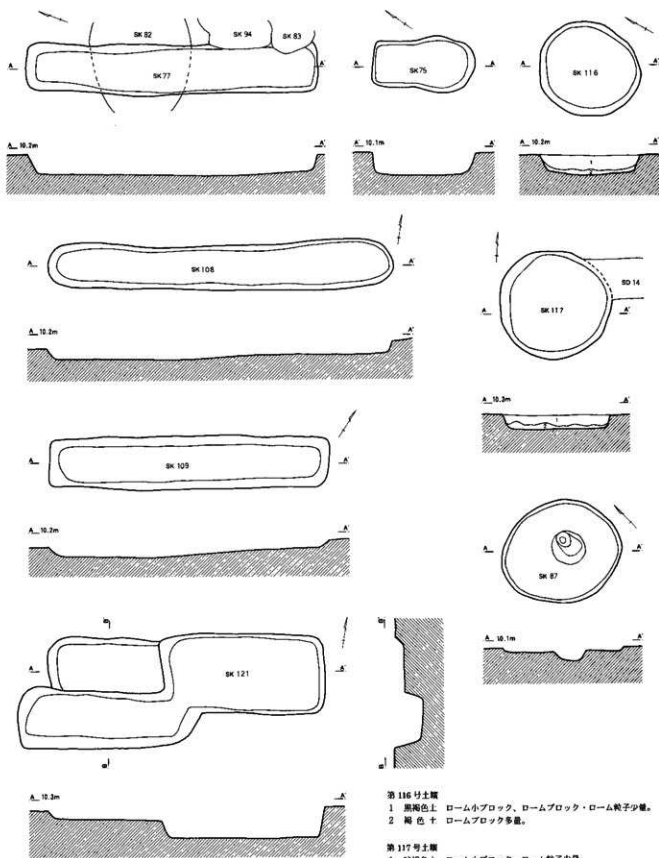
第69図 土壌 (中・近世) (4)



第70图 土壤(中·近世)(5)



第71図 土壇 (中・近世) (6)

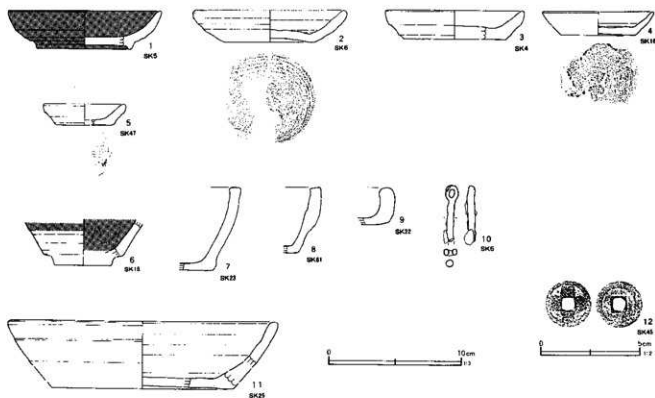


第 116 号土壇
 1 黒褐色土 ローム小ブロック、ロームブロック・ローム砂子少量。
 2 褐色土 ロームブロック多量。

第 117 号土壇
 1 暗褐色土 ローム小ブロック、ローム砂子少量。
 2 暗褐色土 ロームブロック多量。



第72図 土壙（中・近世）出土遺物



土壙出土遺物観察表（第72図）

番号	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	残存率	出土位置・備考	
1	志野皿	(11.6)	2.9	(7.2)		灰	A	15	SK 5	
2	かわらけ	11.2	2.4	6.8	白赤黒	橙	A	75	SK 6 底部回転糸切り痕	
3	かわらけ	(10.3)	2.2	(7.7)	白	橙	B	30	SK 4	
4	かわらけ	(8.3)	1.8	5.6	赤黒	浅黄	A	30	SK 16 底部回転糸切り痕	
5	かわらけ	(6.1)	1.6	(4.3)	白	橙	B	30	SK 47 底部回転糸切り痕	
6	天目茶碗					暗赤褐	A	20	SK 18	
7	焙烙	(39.6)	6.4	(36.0)	白雲片	黒褐	A	5	SK 23	
8	焙烙	(27.0)	5.0	(24.0)	白片	灰	A	10	SK 61	
9	焙烙	(38.4)	2.8	(38.0)	石	黒褐	A	5	SK 22	
10	鉄製品	長さ4.4cm、径5mm、門孔径4mm、重さ4.1g								SK 5 用途不明
11	土師器鉢	(20.4)	(5.1)	(13.8)	白		B	25	SK 25 底部回転糸切り痕	
12	北宋銭	直径23.4mm、孔径6.5mm、厚さ1.2mm、重さ2.3g								SK 45 銅製 熙寧元寶 1068年初鑄

(4) 溝

第1号溝 (第73図)

K-10・11に位置する。SK3を切って構築され、SK4、SB8と重複する。北西—南東方向にまっすぐに伸びて、調査区西側の削平部に至る手前で途切れる。東側の一部で底面がピット状になる。全長10.4m、幅0.4m、深さ42cmを測る。

第2号溝 (第73図)

J-10グリッドに位置する。SK17を切って構築される。北西—南東方向にまっすぐに伸びる。全長2.8m、幅0.4m、深さ18cmを測る。

第3号溝 (第74図)

I-8・9グリッドに位置する。SK60・120と重複する。北西—南東方向にまっすぐに伸びて、西側で途切れる。底面に多くの小ピットを伴う。全長5.7m、幅0.4m、深さ15cmを測る。

第4号溝 (第74図)

I-9グリッドに位置する。SK120と重複する。全長2.6m、幅0.6m、深さ9cmを測る。

第5号溝 (第74図)

H・I-8グリッドに位置する。SK61と重複する。北西—南東方向にまっすぐに伸びて、西側で途切れる。SD6に並行する。全長6.4m、幅0.4m、深さ11cmを測る。

第6号溝 (第74図)

H-8グリッドに位置する。北西—南東方向にまっすぐに伸びて、西側で途切れる。SD5に並行する。全長6.3m、幅0.6m、深さ6cmを測る。

第7号溝 (第75図)

H-7・8グリッドに位置する。小ピットが重複する。北西—南東方向にまっすぐに伸びて、西側で途切れる。全長9.0m、幅0.8m、深さ26cmを測る。

第8号溝 (第75図)

G-7・8、H-7グリッドに位置する。SK63・65・66を切って構築される。北西—南東方向にまっすぐに伸びて、西側で途切れる。全長7.5m、幅0.5m、深さ46cmを測る。

第9号溝 (第75図)

G-7に位置する。北西—南東方向にまっすぐに伸びて、西側の削平部の手前で途切れる。全長8.7m、幅0.5m、深さ11cmを測る。

第10号溝 (第75図)

F-7、G-6・7グリッドに位置する。北西—南東方向にまっすぐに伸びて、西側で途切れる。全長6.4m、幅0.4m、深さ11cmを測る。

第11号溝 (第76図)

B-1グリッドに位置する。南北方向にまっすぐに伸びる。南側の延長状にはSD12がある。全長7.5m、幅0.7m、深さ20cmを測る。

第12号溝 (第76図)

C・D-2グリッドに位置する。南北方向にまっすぐに伸びる。全長10.7m、幅0.6m、深さ19cm。

第13号溝 (第76図)

C-2、D-2・3グリッドに位置する。SJ12と重複する。SD12に並行して南北方向にまっすぐに伸びる。全長18m、幅0.8m、深さ27cmを測る。

第14号溝 (第77図)

D-3・4グリッドに位置する。SJ9・10を切って構築される。SK110・117と重複する。東西方向に伸びる。全長14.5m、幅0.7m、深さ17cmを測る。

第15号溝 (第77図)

E-4、D-4・5グリッドに位置する。SJ9、SD17を切って構築される。南西—北東方向にまっすぐに伸びる。SD16に並行する。全長12.0m、幅0.8m、深さ30cmを測る。

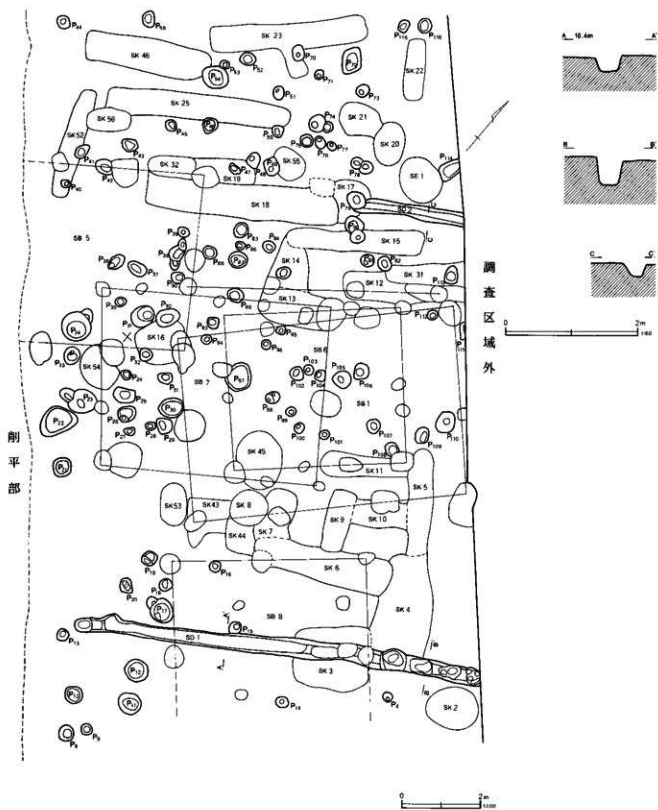
第16号溝 (第77図)

D-5グリッドに位置する。SJ9を切って構築される。全長2.8m、幅0.7m、深さ26cmを測る。

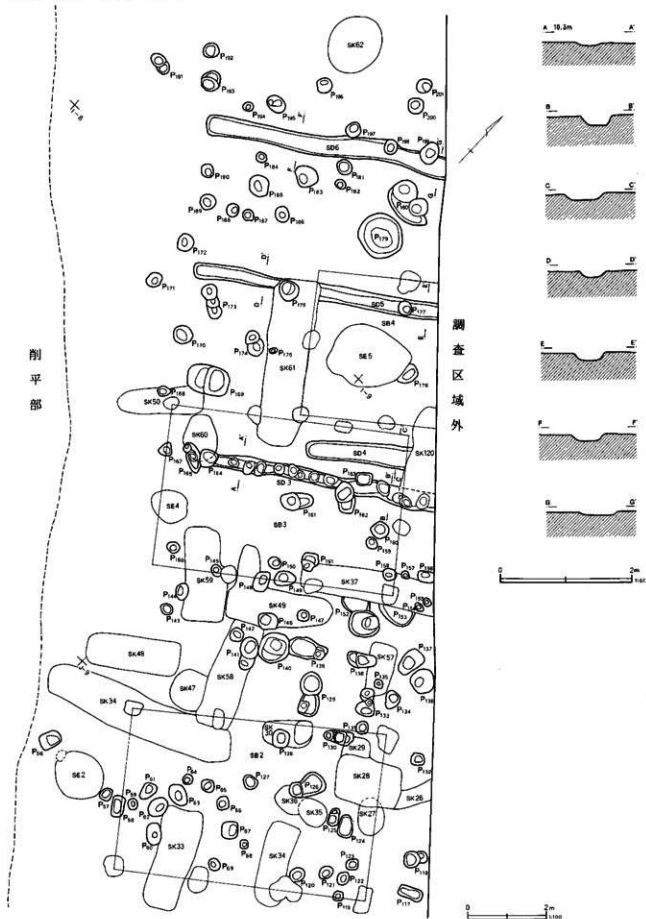
第17号溝 (第77図)

E-3・4グリッドに位置する。SD15に切られる。SK118と重複する。東西方向にまっすぐに伸びて、西側ではほぼ直角に近い状態で曲がる。断面は逆台形で、底面は平坦になる。全長16m、幅2.0m、深さ70cmを測る。地跡の可能性が考えられる。

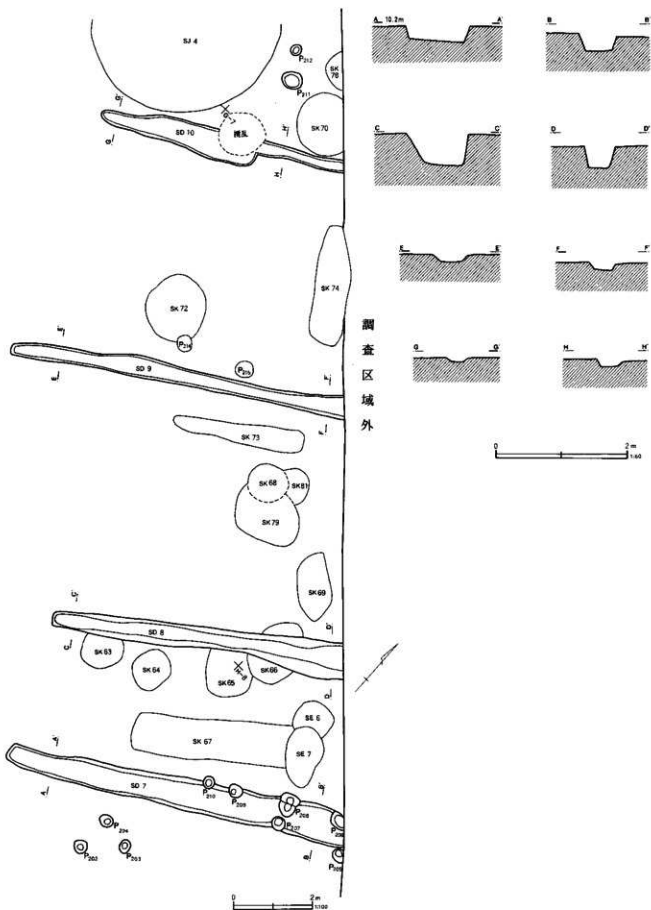
第73図 第1・2号溝・ピット

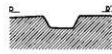
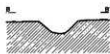
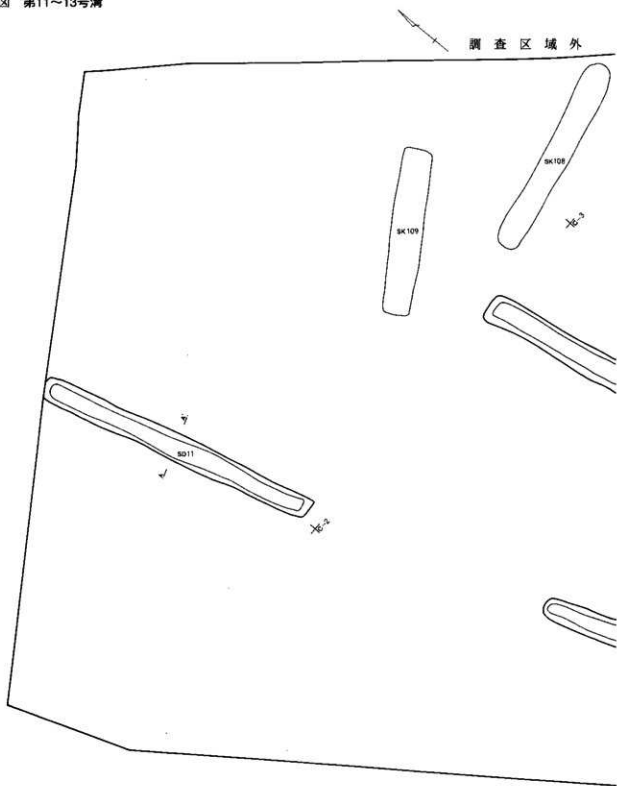


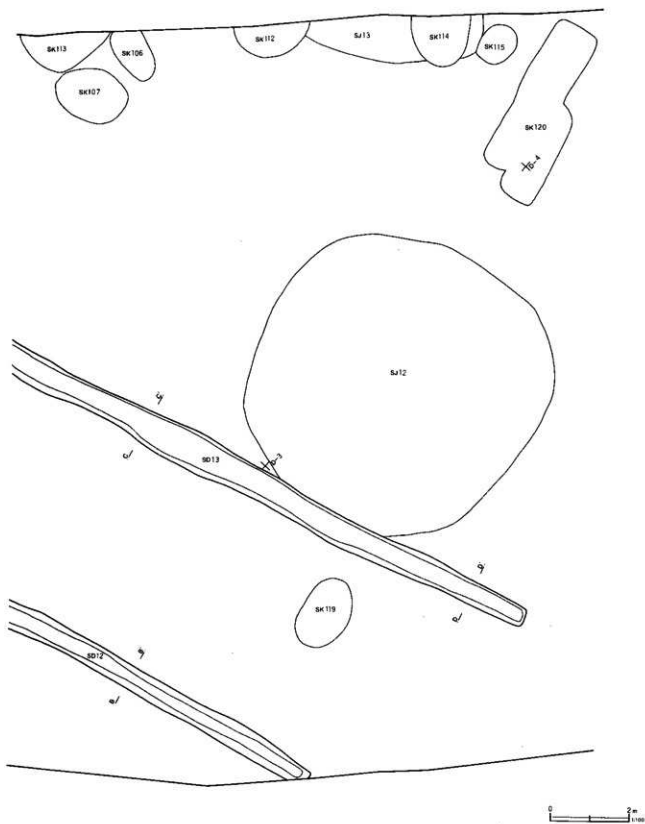
第74図 第3～6号溝・ピット



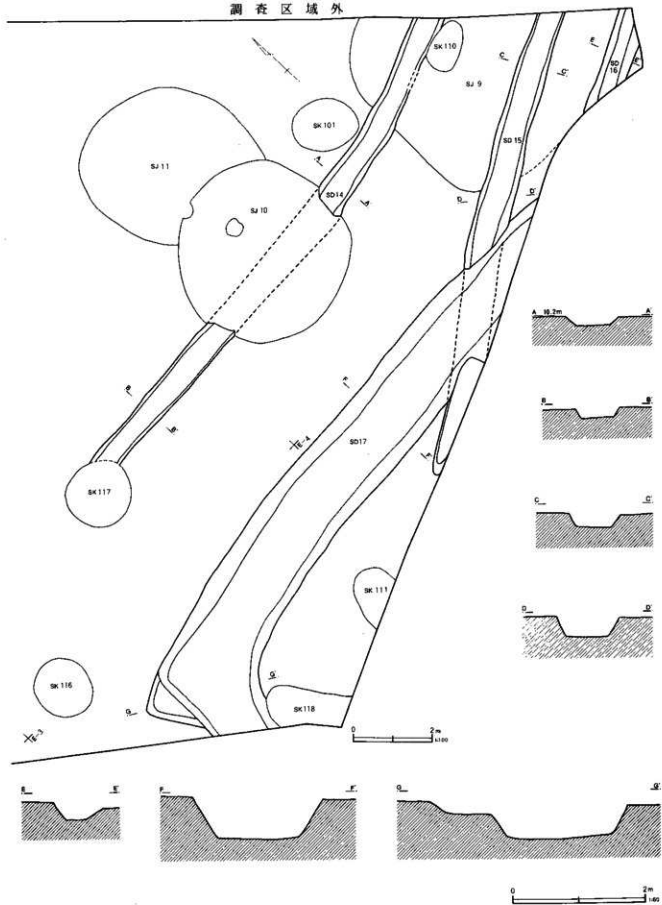
第75図 第7～10号溝・ピット







調査区域外

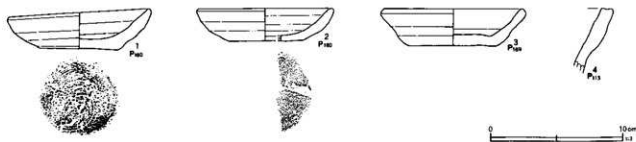


道合中遺跡 中・近世ピット一覧

遺構名	グリッド	最大径 (cm)	深さ (cm)	遺構名	グリッド	最大径 (cm)	深さ (cm)
P ₁	K-11	20	56	P ₅₅	J-9	39	11
P ₂	"	27	51	P ₅₆	"	53	71
P ₃	"	33	21	P ₅₇	"	36	9
P ₄	"	23	20	P ₅₈	"	56	18
P ₅	K-10	34	52	P ₅₉	"	27	15
P ₆	"	63	56	P ₆₀	"	56	72
P ₇	"	43	9	P ₆₁	"	40	57
P ₈	"	40	29	P ₆₂	"	54	88
P ₉	"	26	20	P ₆₃	"	53	47
P ₁₀	"	44	13	P ₆₄	"	23	28
P ₁₁	"	58	63	P ₆₅	I・J-9	28	13
P ₁₂	"	60	67	P ₆₆	" "	31	29
P ₁₃	"	30	46	P ₆₇	J-9	43	43
P ₁₄	"	36	23	P ₆₈	"	22	42
P ₁₅	"	30	32	P ₆₉	"	27	50
P ₁₆	"	28	17	P ₇₀	"	39	52
P ₁₇	"	54	21	P ₇₁	"	21	32
P ₁₈	"	28	33	P ₇₂	"	57	60
P ₁₉	"	36	14	P ₇₃	J-10	33	43
P ₂₀	"	39	44	P ₇₄	"	62	75
P ₂₁	"	48	50	P ₇₅	"	33	20
P ₂₂	K-9・10	94	30	P ₇₆	"	30	37
P ₂₃	"	90	58	P ₇₇	"	27	40
P ₂₄	K-10	23	28	P ₇₈	"	54	34
P ₂₅	"	54	48	P ₇₉	"	44	11
P ₂₆	"	38	23	P ₈₀	"	70	23
P ₂₇	"	23	20	P ₈₁	"	33	29
P ₂₈	"	22	10	P ₈₂	"	35	52
P ₂₉	"	43	22	P ₈₃	"	36	32
P ₃₀	"	62	10	P ₈₄	"	29	53
P ₃₁	J・K-10	32	60	P ₈₅	"	34	10
P ₃₂	"	31	40	P ₈₆	"	22	14
P ₃₃	K-9	45	28	P ₈₇	"	46	20
P ₃₄	"	92	78	P ₈₈	"	34	12
P ₃₅	J-9	25	9	P ₈₉	"	40	30
P ₃₆	"	50	26	P ₉₀	J-9・10	32	43
P ₃₇	"	48	20	P ₉₁	" "	56	59
P ₃₈	"	77	37	P ₉₂	J-10	58	15
P ₃₉	"	30	22	P ₉₃	"	28	32
P ₄₀	"	23	26	P ₉₄	"	27	12
P ₄₁	"	38	22	P ₉₅	"	26	60
P ₄₂	"	38	50	P ₉₆	"	25	30
P ₄₃	"	37	20	P ₉₇	"	70	6
P ₄₄	"	33	28	P ₉₈	"	36	47
P ₄₅	"	26	36	P ₉₉	"	25	25
P ₄₆	"	38	8	P ₁₀₀	"	25	29
P ₄₇	"	32	15	P ₁₀₁	"	22	27
P ₄₈	"	32	35	P ₁₀₂	"	26	30
P ₄₉	J-9・10	44	60	P ₁₀₃	"	26	38
P ₅₀	J-9	30	64	P ₁₀₄	"	26	20
P ₅₁	"	30	36	P ₁₀₅	"	43	36
P ₅₂	"	35	30	P ₁₀₆	"	44	64
P ₅₃	"	20	27	P ₁₀₇	"	35	20
P ₅₄	"	58	18	P ₁₀₈	"	34	7

遺構名	グリッド	最大径 (cm)	深さ (cm)	遺構名	グリッド	最大径 (cm)	深さ (cm)
P109	J-10	42	50	P161	I-9	81	67
P110	"	51	40	P162	"	83	62
P111	"	41	26	P163	"	40	32
P112	"	26	11	P164	I-8	45	14
P113	"	46	74	P165	"	77	65
P114	"	37	20	P166	"	31	30
P115	I-10	30	32	P167	"	31	32
P116	"	38	12	P168	"	30	20
P117	I-9	62	15	P169	"	108	18
P118	"	57	46	P170	"	47	42
P119	"	24	32	P171	"	42	67
P120	I・J-9	37	28	P172	"	46	53
P121	I-9	36	40	P173	"	90	40
P122	"	32	24	P174	"	65	41
P123	"	28	23	P175	"	22	37
P124	"	56	63	P176	H-9	52	37
P125	"	46	40	P177	H-8	32	51
P126	"	113	64	P178	"	52	42
P127	"	36	18	P179	"	111	10
P128	"	46	73	P180	"	122	47
P129	"	110	64	P181	"	40	8
P130	"	70	43	P182	"	28	30
P131	"	32	15	P183	"	54	33
P132	"	32	30	P184	"	28	40
P133	"	70	57	P185	"	51	46
P134	"	46	44	P186	"	35	60
P135	"	23	55	P187	"	30	62
P136	"	60	81	P188	"	31	50
P137	"	71	77	P189	"	38	42
P138	"	74	60	P190	"	33	19
P139	"	92	47	P191	"	56	45
P140	"	80	66	P192	"	40	40
P141	"	86	49	P193	"	52	60
P142	"	36	57	P194	"	23	50
P143	"	28	29	P195	"	48	58
P144	"	36	20	P196	"	34	50
P145	"	29	42	P197	"	38	60
P146	"	46	43	P198	"	39	69
P147	"	28	29	P199	"	58	75
P148	"	50	67	P200	"	40	53
P149	"	46	47	P201	"	35	50
P150	"	33	43	P202	"	32	37
P151	"	49	50	P203	"	33	36
P152	"	106	60	P204	"	34	23
P153	"	84	16	P205	"	35	30
P154	"	23	30	P206	"	40	31
P155	"	18	11	P207	"	35	40
P156	"	29	54	P208	"	60	59
P157	"	20	23	P209	"	35	39
P158	"	31	26	P210	"	30	30
P159	"	30	60	P211	F-7	47	28
P160	"	42	62	P212	"	24	41

第78図 ビット（中・近世）出土遺物



ビット出土遺物観察表（第78図）

番号	器種	口径	器高	底径	胎上	色調	焼成	残存率	出土位置・備考
1	かわらけ	10.7	3.2	5.9	黒	橙	B	100	P ₁₀₀ 底部回転糸切り痕
2	かわらけ	(10.0)	2.5	(5.5)	黒	橙	B	45	P ₁₀₀ 底部回転糸切り痕
3	かわらけ	(10.4)	2.8	(6.6)	黒	橙	A	35	P ₁₀₀
4	焙烙	(34.0)			白片	黒褐	A	10	P ₁₁₃

(5) ビット（第73～75図）

他の遺構に伴わない単独のビットは、全部で212基検出された。A区南半部、H-8グリッド以南に分布し、I-9グリッドとJ-10グリッド付近で分布密度が最も高くなる。土壌や溝、あるいはビット同士で激しく重複するものも見られる。規則的な配置状況を丹念に調査したが、掘立柱建物跡や柵列として認知するまでに至らなかった。

各ビットの規模や深さ、覆土の状況は掘立柱建物跡の柱穴とほとんど変わらないものが多い。また、掘立柱建物跡の位置する場にビット群の分布が集中している。これらのことから、ビット群が何らかの建物に関連する遺構の一部である可能性も考えられる。

覆土の状況が中・近世の上層のそれと共通すること、

および覆土中から出土した遺物などから、これらのビット群の構築された時期は、ほぼ中・近世と考えて問題ないと思われる。

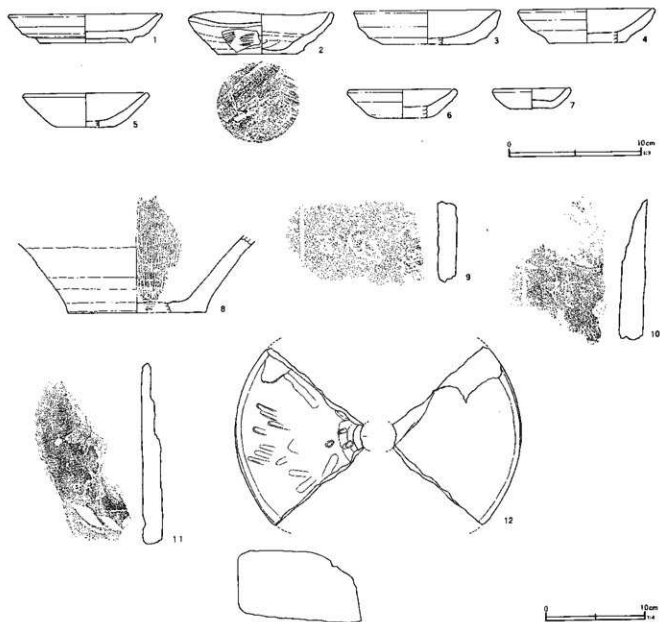
出土遺物（第78図）

1～3はかわらけである。1・2は底部に回転糸切り痕が見られる。16世紀前半のものと思われる。4は焙烙の体部破片で、内面には明瞭な段が見られない。

(6) グリッド出土遺物（第79図）

1は志野皿である。17世紀前半のものと思われる。2～7はかわらけである。2・7は底部に回転糸切り痕が見られる。3は16世紀前半のものと思われる。8は備前産の播鉢である。17世紀代のものと思われる。9～11は板碑の破片である。12は石臼である。

第79図 グリッド出土遺物(中・近世)



グリッド出土遺物観察表(第79図)

番号	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	残存率	出土位置・備考
1	志野皿	(11.6)	2.2	7.0		灰白	A	50	K-11G
2	かわらけ	10.6	3.3	6.0	白石	橙	A	100	試掘 底部回転糸切り痕
3	かわらけ	(10.9)	2.5	(7.0)	砂片	橙	B	35	K-11G
4	かわらけ	(10.0)	2.6	(5.9)	黒	橙	B	20	表土
5	かわらけ	(93.0)	2.5	(4.4)	白黒片	橙	A	30	表採
6	かわらけ	(8.0)	2.2	(4.1)	黒	橙	A	10	I-9 G
7	かわらけ	(5.6)	1.5	(3.1)	石	橙	A	40	I-9 G 底部回転糸切り痕
8	湯鉢			(14.0)	砂石	赤	A	15	K-11G 備前産
9	板石塔婆	長さ8.1cm、幅14.2cm、厚さ2.0cm、重さ490g、緑泥片岩製							
10	板石塔婆	長さ14.2cm、幅10.3cm、厚さ2.4cm、重さ555g、緑泥片岩製							
11	板石塔婆	長さ18.2cm、幅9.8cm、厚さ1.9cm、重さ520g、緑泥片岩製							
12	石臼	径(26.0)cm、厚さ6.8cm、重さ2080g、砂岩製							

IV 光明寺遺跡

1. 遺跡の概要

光明寺遺跡は、加須低地内に残るローム台地上に立地し、道合中遺跡から東方約170mに位置する。同じ台地上には足利政氏館跡がある甘菜院が所在しており、その南側に接して現在、光明寺の寺院と墓地が広がっている（第3図）。この光明寺の敷地を中心として、周囲の住宅地を含めた地域が、光明寺遺跡として周知されている。遺跡の範囲は、南北約300m、東西約250mに及ぶ。

遺跡の標高は約12mで、最も高いところでは、光明寺の墓地内で12.9mを測る。同じローム台地上でも、甘菜院から南東の光明寺へと続くこの地域一帯は、標高12m台の最も高所となり、遺跡の東、南、西の三方は徐々に標高を下げている。

東側には御陣山遺跡（第3図9）が接する。現在の中央公民館が所在する部分では、事前調査が行われ、ここでは近世の堀や井戸が検出された。徳川家の譜代大名米津氏の久喜藩陣屋跡と推定されている（山本他1987）。西側の一段下がったところには、道合東遺跡（第3図3）があり、さらに西には道合団地へと続く谷地を挟んで、道合中遺跡が所在する。

現在、住宅地が密集する遺跡範囲内の南東部では、光明寺南遺跡として調査が行われている（中村1988）。ここでは縄文時代後期の住居跡2軒、土城1基の他、縄文早期から晩期までの遺物が出土している。

遺跡範囲内の南部には、現在の市道に沿った一帯で薬師堂、千勝神社などが所在する。これらの社寺は「新編武蔵風土記稿」に、甘菜院とともにその名が伝えられていて、その存在を憑ることができると考えられる。千勝神社は享徳年間室町時代に建立したと伝えられている。

今回調査した箇所は、この地域にあたり、市道が走る両側に調査対象となる。調査対象面積は1200㎡である。調査前の現況は、市道沿いに立ち並ぶ民家と、千勝神社の敷地である。

道路建設に伴う調査であることから、調査区は現在

の市道に縦断され、さらに周辺地域の生活道確保のため、調査区が12ヶ所に細分された。このため、北西部の最も広い調査区から、アルファベット順にA～L区とした。調査区はA区では、幅約12m、長さ約26mと最も広い調査区になるが、東にいくにつれ調査区が狭まる。市道の反対側に位置するG～L区では、幅が1～3mとなり、小グリッド調査の状態となる。

調査区内では、現地表から約70cm下でソフトローム層に達し、この面を遺構確認面とした。調査の結果、H区を除いてほぼ全域で遺構が確認された。H区では遺構も遺物も出土しなかった。

今回の調査で検出された遺構は、縄文時代と中・近世の遺構に分かれる。縄文時代では、土城4基と落とし穴1基が検出された。中・近世では、井戸跡6基、土城96基、溝27条、ピット130基が検出された。

縄文時代の土城は、SK9・20・22・28の4基である。いずれもA区に位置しており、覆土中から中期終末期に相当する加曾利E式土器が出土した。このうちSK9は、壁面が下部で膨らむ形状を呈し、フラスコ状土城となる。

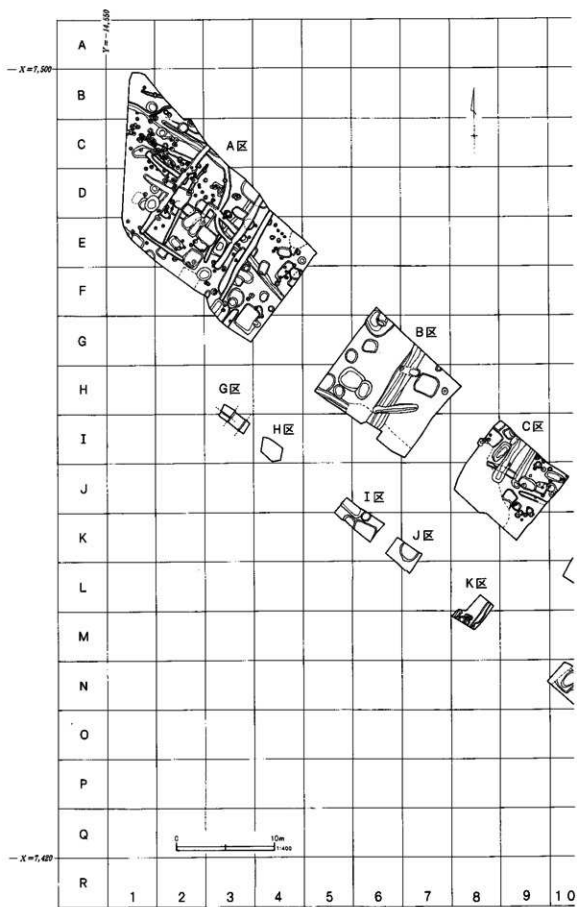
縄文時代の落とし穴は、B区で検出されたSK56である。平面は長楕円形を呈し、細長く幅の狭い底面になる。遺物は出土しなかったが、覆土の状態と全体の形状から、縄文時代の落とし穴と考えられる。

中・近世の遺構は、H区を除いた調査区のほぼ全域から検出された。遺構内の出土遺物から判断して、ほとんどの遺構が、18～19世紀の近世遺構と考えられるが、わずかに16～17世紀の中世末期から近世にかけての遺構も確認された。

まず、中世末期から近世にかけての遺構では、土城3基、溝1条が検出された。A区のSK2、B区のSK49、C区のSK67、溝はB区のSD16である。

SK2は長方形の土城であり、覆土中から17世紀代のものと思われるかわらけ（第92図6）が出土した。

第80図 光明寺遺跡全体図



同じ形状の土壌は、今回報告した道台中遺跡で多数検出されていることから、この時期の遺構と考えられる。SK49は楕円形の土壌で、かわらけ（第92図10）が出土した。SK67は方形の土壌で、かわらけ（第92図4）とともに、北宋銭（第96図87）が出土した。

B区で検出されたSD16は、上幅1.6m、深さ70cmの葉研堀であり、他に検出された溝と形状が異なる。覆土中からは17世紀代のものと思われるかわらけ（第92図9）が出土している。

A～C・K区から検出された溝は、嘉永元年（1851年）の甘棠院文書NO215に掲載される絵図に示された屋敷の区画と一致する部分が多い。A区のSD2・7・10・11、B区のSD16、C区のSD18・19、K区のSD26などの溝が、これにあたるものと思われる。SD16は近世以前に構築されたものが、近世においても区画溝として機能していた可能性がある。

ピットは130基検出された。このうちA区では、上述した屋敷の区画溝（SD2）に沿って列状に検出さ

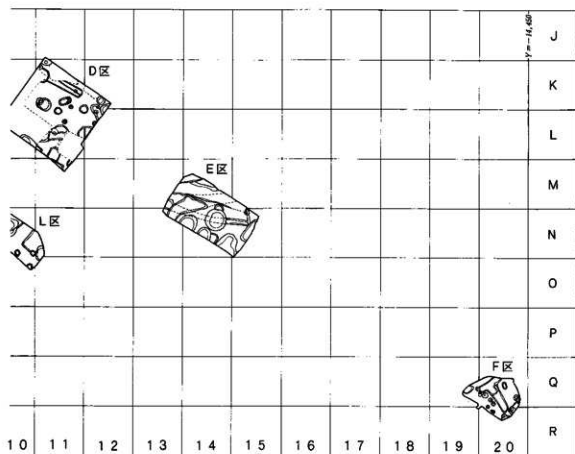
れており、欄列または屋敷内の建物に関連する遺構と考えられる。

井戸跡はA区で5基、D区で1基、計6基検出された。A区の5基は、上述の区画溝に沿って位置する。

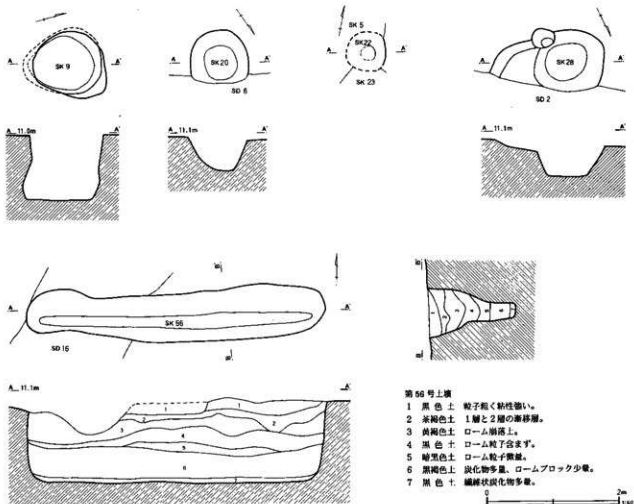
土壌は平面形が長方形、方形、楕円形など多様であるが、方形のものが最も多い。A区では方形の土壌が激しく重複する。

この他、A区北部、C区全域、E区全域の表上中から夥しい量の瓦が出土した。特にC区では、瓦が敷き詰められた状態で出土したことから、千勝神社の鐘樓の基礎であった可能性がある。E区全域の土壌と溝の中から、江戸期の灯明皿、かわらけ、陶磁器などの雑器、瓦などが大量に出土しており、一括投棄されたものと思われる。

出土遺物は、陶磁器類、かわらけや火鉢、焙烙などの土器類、瓦、古銭などが溝や土壌、井戸跡の中から多数出土しており、多くは18～19世紀の江戸期の遺物と考えられる。



第81図 土壙（縄文時代）



第56号土壙

- 1 黒色土 粒子粗く粘性強い。
- 2 赤褐色土 1層と2層の厚移層。
- 3 黄褐色土 ローム層頂上。
- 4 黒色土 ローム粒子含まず。
- 5 暗褐色土 ローム粒子散在。
- 6 黒褐色土 炭化物多量、ロームブロック少量。
- 7 黒色土 繊維状炭化物多量。

0 2m
1:40

2. 縄文時代

第9号土壙（第81・82図）

A区F-4グリッド。平面形は円形。壁がやや外側にやや膨れ、底面は平坦。直径1.1m、深さ1m。第82図1～7が出土。1は加曾利EⅢ式の小型深鉢。2も同様の口縁部モチーフ。3は沈線で縄文部が楕円区画される。4・5は内堀する口縁部、6は微隆帯が縄文部を区画する。7は底部。いずれも中期末葉の土器。

第20号土壙（第81・82図）

A区D-1・2グリッド。平面形は円形。直径0.8m、深さ51cm。覆土中から第82図8～12が出土した。8は口縁部に沈線がめぐり。9～11は縄文施文の胴部、12は微隆帯が懸垂する。いずれも中期末葉の土器。

第22号土壙（第81・82図）

E-2・3グリッド。平面形は円形。覆土中から第

82図13～17が出土した。13は微隆帯が口縁をめぐり。14は微隆帯、15は沈線が懸垂する。16・17は縄文施文の胴部。いずれも中期末葉の土器である。

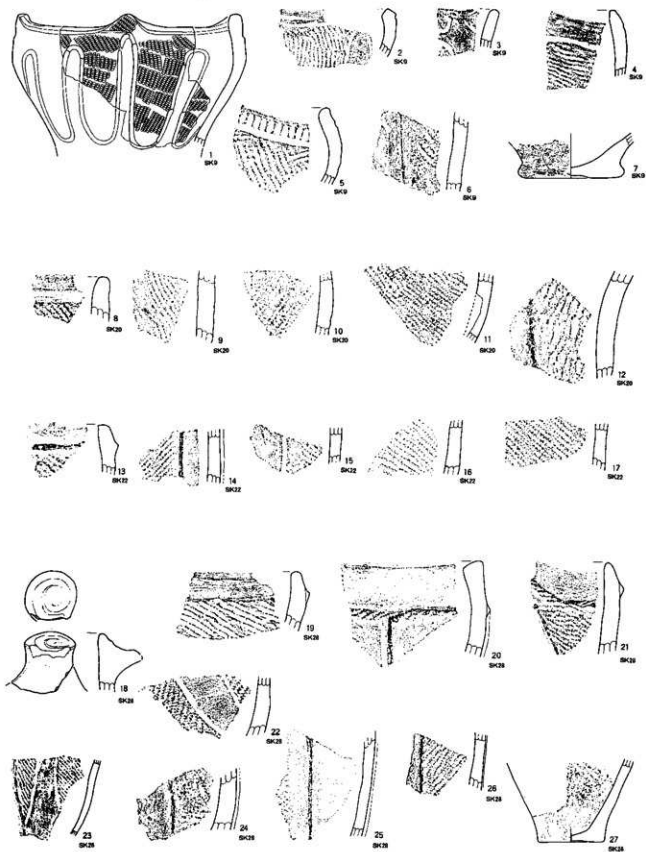
第28号土壙（第81・82図）

A区C-2グリッド。平面形は楕円形。長径1.0m、短径0.9m、深さ51cm。主軸方位はN-34°-W。第82図18～27が出土。18は波状口縁の突起部。19～21は断面三角形の微隆帯で口縁無文帯を画する。22・23は沈線で、24～26は微隆帯で磨消縄文を区画する。27は無文の底部。中期末葉から後期初頭の土器。

第56号土壙（第81図）

B区に位置する。縄文時代の落し穴である。平面は長楕円形。細長く幅の狭い底面になる。長径4.5m、幅0.9m、深さ1.3mを測る。遺物は出土しなかった。

第82図 土壙（縄文時代）出土遺物



0 10cm 1:1

3. 中・近世

(1) 検出遺構

A区 (第83～85図)

第1号井戸跡

B-1・2グリッドに位置する。平面形は円形である。規模は、直径11.4m、深さ58cmである。

第2号井戸跡

C-2グリッドに位置する。平面形は円形である。規模は、直径1.0mである。

第3号井戸跡

D-1・2グリッドに位置する。平面形は円形である。規模は、直径1.6m、深さ40cmである。

第4号井戸跡

F-3グリッドに位置する。平面形は円形である。規模は、直径1.0m、深さ94cmである。

第5号井戸跡

F-2・3グリッドに位置する。平面形は円形である。規模は、直径1.3m、深さ158cmである。

第1号土壌

C-2グリッドに位置する。現存長2.0m、幅0.6m、深さ16cmを測る。

第2号土壌

C-1・2、D-2グリッド。平面形は方形。長辺3.6m、現存短辺0.4m、深さ9cm。主軸方位はN-43°-Eである。

第3号土壌

C-1グリッドに位置する。長さ2.2m、幅1.0m、深さ53cmを測る。

第4号土壌

D・E-2グリッド。平面形は方形。長辺2.1m、短辺1.1m、深さ27cm。主軸方位はN-5°-W。

第5号土壌

E-2グリッドに位置する。平面形は楕円形である。規模は、長径1.0m、短径0.9m、深さ6cmを測る。主軸方位はN-5°-Wである。

第6号土壌

D・E-2グリッドに位置する。平面形は方形であ

る。深さ12cmを測る。

第7号土壌

F-4グリッドに位置する。平面形は円形である。規模は、直径1.1m、深さ16cmである。

第8号土壌

E・F-4グリッドに位置する。平面形は方形である。規模は、長辺1.4m、短辺1.0m、深さ6cmを測る。主軸方位はN-25°-Eである。

第10号土壌

F-4グリッドに位置する。平面形は方形である。規模は、長辺2.0m、現存短辺0.6m、深さ24cmを測る。主軸方位はN-40°-Eである。

第11号土壌

E・F-4グリッドに位置する。平面形は方形である。規模は、長辺2.2m、短辺0.9m、深さ11cmを測る。主軸方位はN-45°-Eである。

第12号土壌

E-4グリッドに位置する。平面形は方形である。規模は、長辺1.3m、短辺0.9m、深さ14cmを測る。主軸方位はN-85°-Wである。

第13号土壌

E-4グリッドに位置する。平面形は方形である。規模は、短辺0.7m、深さ2cmを測る。主軸方位はN-85°-Wである。

第14号土壌

E-2グリッドに位置する。平面形は方形である。規模は、長辺1.6m、短辺1.0m、深さ14cmを測る。主軸方位はN-49°-Eである。

第15号土壌

E-1グリッドに位置する。規模は、長さ1.6m、現存幅0.8m、深さ17cmである。

第16号土壌

E-3・4グリッドに位置する。平面形は円形になると思われる。深さ12cmである。

第17号土壌

D-2グリッド。平面形は方形。深さ40cm。

第18号土壌

D-2グリッドに位置する。平面形は方形である。深さ24cmを測る。

第19号土壌

D-2グリッドに位置する。平面形は方形。長辺2.1m、現存短辺1.6m、深さ11cmを測る。

第21号土壌

D-2グリッドに位置する。平面形は方形。長辺1.0m、現存短辺0.8m、深さ18cmを測る。

第23号土壌

E-2・3グリッド。平面形は方形。長辺2.1m、短辺1.5m、深さ14cm。主軸方位は $N-51^{\circ}-W$ 。

第24号土壌

E-3グリッドに位置する。平面形は方形である。深さ9cmを測る。

第25号土壌

E-3グリッド。平面形は方形。長辺0.8m、短辺0.5m、深さ14cm。主軸方位は $N-51^{\circ}-W$ 。

第26号土壌

E-3・4グリッド。深さ9cmを測る。

第27号土壌

F-3グリッドに位置する。長さ1.0m、幅1.6m、深さ33cmを測る。

第29号土壌

D-2・3グリッド。平面形は方形。長辺1.1m、短辺0.9m、深さ18cm。主軸方位は $N-56^{\circ}-W$ 。

第30号土壌

E-2グリッドに位置する。平面形は方形である。規模は、長辺1.1m、短辺0.9m、深さ15cmを測る。主軸方位は $N-45^{\circ}-W$ である。

第31号土壌

E・F-2グリッドに位置する。平面形は方形である。規模は、長辺1.8m、短辺1.6m、深さ25cmを測る。主軸方位は $N-35^{\circ}-E$ である。

第32号土壌

E-2・3グリッドに位置する。平面形は方形である。深さ20cmを測る。

第33号土壌

E-1グリッドに位置する。規模は、現存の長さ0.5m、深さ24cmである。

第34号土壌

E-1グリッドに位置する。規模は、現存の長さ0.3m、深さ77cmである。

第35号土壌

D-1グリッドに位置する。平面形は楕円形である。規模は、長径1.1m、短径0.9m、深さ39cmを測る。主軸方位は $N-61^{\circ}-W$ である。

第36号土壌

D・E-2グリッドに位置する。平面形は楕円形である。規模は、現存長径1.0m、短径0.7m、深さ18cmを測る。

第37号土壌

E・F-3グリッドに位置する。平面形は長楕円形である。規模は、長径5.4m、短径0.8m、深さ36cmを測る。主軸方位は $N-63^{\circ}-W$ である。

第38号土壌

F-3グリッドに位置する。平面形は方形。現存長辺0.9m、短辺0.9m、深さ16cmを測る。

第39号土壌

F-3グリッドに位置する。平面形は楕円形である。規模は、長径1.7m、短径1.6m、深さ20cmを測る。主軸方位は $N-18^{\circ}-E$ である。

第40号土壌

D・E-3グリッドに位置する。平面形は方形である。規模は、長辺1.5m、短辺1.0m、深さ26cmを測る。主軸方位は $N-50^{\circ}-W$ である。

第41号土壌

D-3・4グリッド。平面形は方形。長辺3.4m、現存短辺1.3m、深さ30cmを測る。

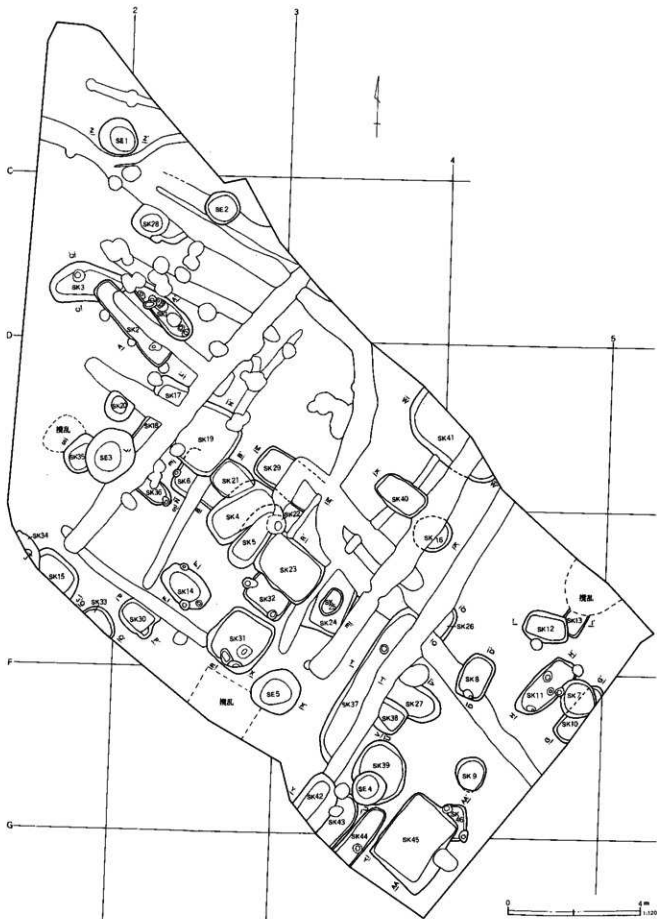
第42号土壌

F-3グリッド。平面形は方形。幅1.1m、深さ34cmを測る。主軸方位は $N-50^{\circ}-W$ 。

第43号土壌

F・G-3グリッド。平面形は方形。幅0.7m、深さ

第83図 A区井戸跡・土坑（1）



第84図 A区井戸跡・土塙(2)

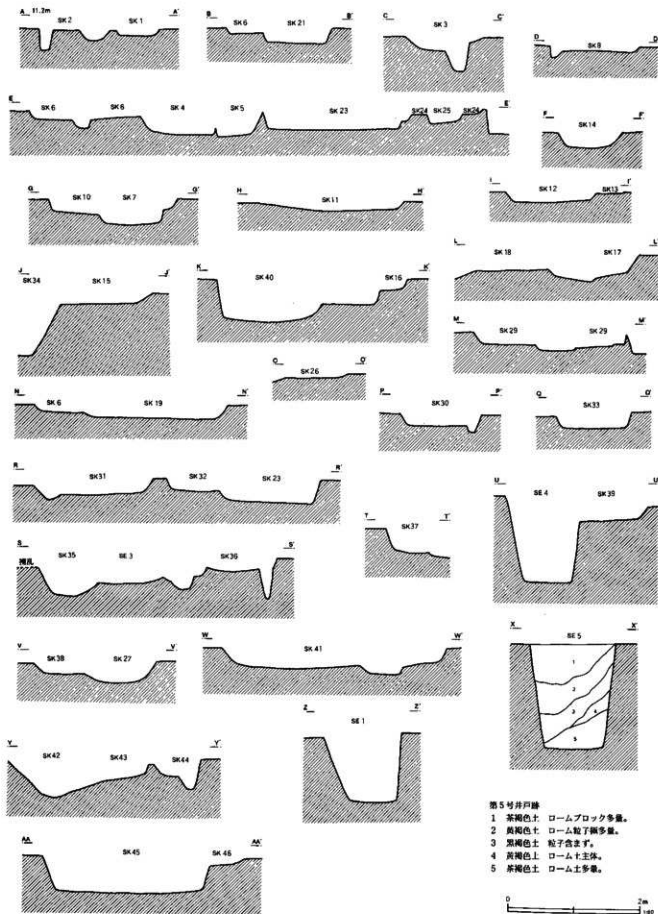
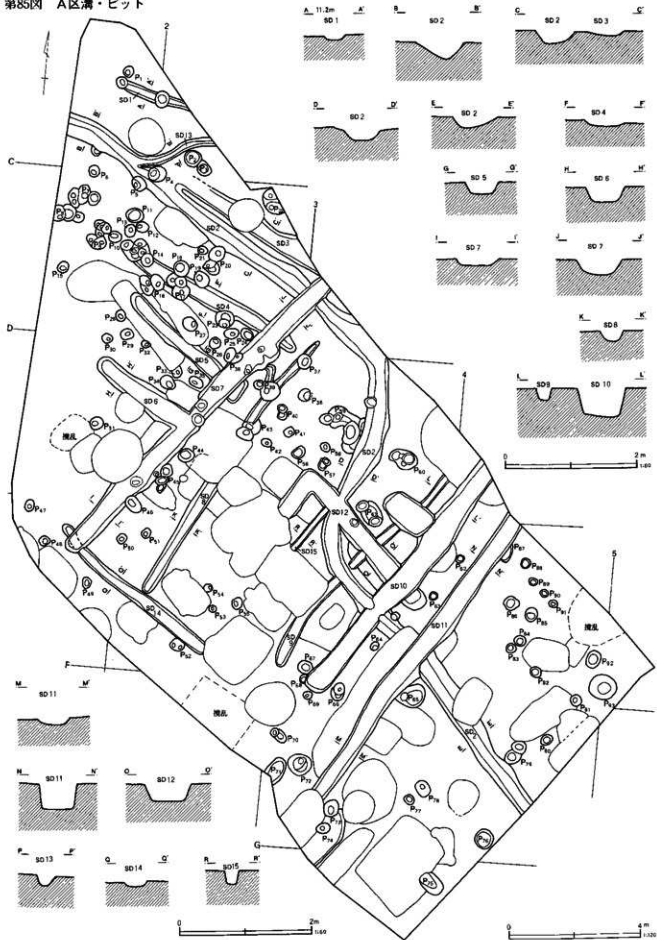


図5号井戸跡

- 1 茶褐色土 ロームブロック多量。
- 2 黄褐色土 ローム粒了顕多量。
- 3 灰褐色土 粒子含まず。
- 4 黄褐色土 ローム土主体。
- 5 茶褐色土 ローム土多量。

0 2m
1:40

第85図 A区溝・ピット



25cmを測る。主軸方位はN-50°-W。

第44号土壌

F・G-3グリッド。平面形は方形。幅0.7m、深さ20cmを測る。主軸方位はN-50°-W。

第45号土壌

G-3グリッド。平面形は方形。長辺2.4m、短辺1.8m、深さ53cm。主軸方位はN-37°-E。

第46号土壌

F・G-4グリッド。平面形は方形。長辺1.2m、現存短辺0.5m、深さ14cm。主軸方位N-37°-E。

第1号溝

全長2.2m、幅0.3m、深さ5cmを測る。

第2号溝

クランク状に伸びる。幅0.7m、深さ21cm。

第3号溝

全長4.8m、幅0.5m、深さ4cmを測る。

第4号溝

全長3.8m、幅0.6m、深さ11cmを測る。

第5号溝

全長3.5m、幅0.5m、深さ24cmを測る。

第6号溝

全長3.2m、幅0.7m、深さ14cmを測る。

第7号溝

全長11.3m、幅0.6m、深さ20cmを測る。

第8号溝

全長9.2m、幅0.3m、深さ17cmを測る。

第9号溝

全長7.6m、幅0.2m、深さ16cmを測る。

第10号溝

全長8.4m、幅0.7m、深さ40cmを測る。

第11号溝

全長10.2m、幅0.6m、深さ24cmを測る。

第12号溝

A区中央部でL字に折れ曲がる。全長5.2m、幅0.7m、深さ26cmを測る。

第13号溝

全長2.3m、幅0.3m、深さ17cmを測る。

第14号溝

全長5.6m、幅0.5m、深さ7cmを測る。

第15号溝

全長1.6m、幅0.2m、深さ20cmを測る。

B区 (第86図)

第47号土壌

長さ2.6m、深さ7cmを測る。

第48号土壌

平面形は方形である。長辺1.5m、短辺1.3m、深さ13cmを測る。主軸方位はN-73°-W。

第49号土壌

平面形は楕円形である。長径1.3m、短径1.1m、深さ11cmを測る。主軸方位はN-26°-E。

第50号土壌

平面形は方形である。現存長辺2.2m、短辺2.1m、深さ53cm。主軸方位はN-53°-W。

第51号土壌

平面形は楕円形である。長径1.8m、短径1.4m、深さ43cmを測る。主軸方位はN-53°-W。

第52号土壌

平面形は楕円形である。深さ30cmである。

第53号土壌

平面形は楕円形。長径1.2m、深さ30cm。

第54号土壌

平面形は方形である。長辺2.1m、短辺0.8m、深さ61cmを測る。主軸方位はN-77°-W。

第55号土壌

平面形は方形である。長辺2.4m、短辺2.0m、深さ72cmを測る。主軸方位はN-25°-E。

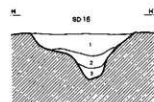
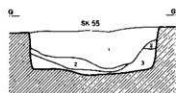
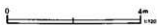
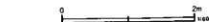
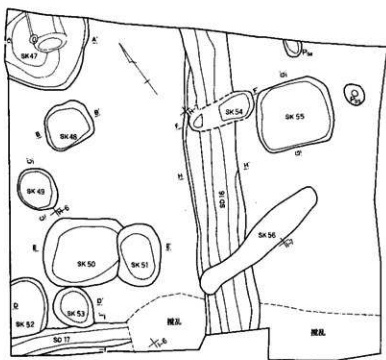
第16号溝

全長9.2m、幅1.6m、深さ69cmを測る。

第17号溝

全長3.6m、幅0.9m、深さ32cmを測る。

第86図 B区遺構



第49号土層

- 1 暗褐色土 炭化物。
- 2 褐色土 粒子粗く粘性強い。

第55号土層

- 1 暗褐色土 ローム粒子含まず。サラサラした上。
- 2 灰褐色土 粘性強く粒子細かい。
- 3 暗褐色土 ローム粒子含まず。

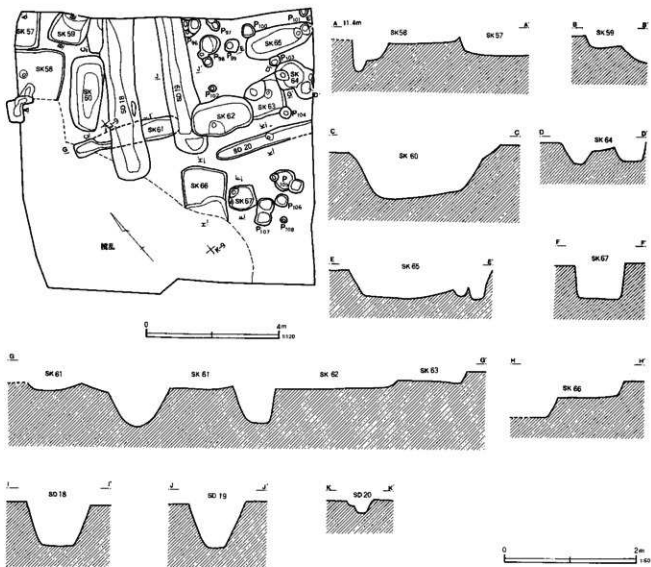
第16号溝

- 1 暗褐色土 粘性強く粒子細かい。
- 2 灰褐色土 粘性強く粒子細かい。やや固い。
- 3 黒色土 粘性強く粒子細かい。固くしめる。

第17号溝

- 1 黒褐色土 粒が含まず。
- 2 茶褐色土 黄褐色土混入。

第87図 C区遺構



C区 (第87図)

第57号土壇

方形。現存で長辺1.1m、短辺0.7m、深さ27cm。

第58号土壇

平面形は方形。長辺現存1.5m、深さ42cm。

第59号土壇

平面形は方形である。長辺1.0m、深さ41cm。

第60号土壇

平面形は長方形である。長辺2.3m、短辺0.8m、深さ70cmを測る。主軸方位は $N-42^{\circ}-E$ 。

第61号土壇

平面形は長方形。現存長辺3.0m、短辺0.6m、深さ12cmを測る。主軸方位は $N-64^{\circ}-W$ 。

第62号土壇

平面形は方形である。長辺1.9m、短辺0.9m、深さ28cmを測る。主軸方位は $N-64^{\circ}-W$ 。

第63号土壇

平面形は方形。現存長辺1.0m、短辺1.0m、深さ16cmを測る。主軸方位は $N-64^{\circ}-W$ 。

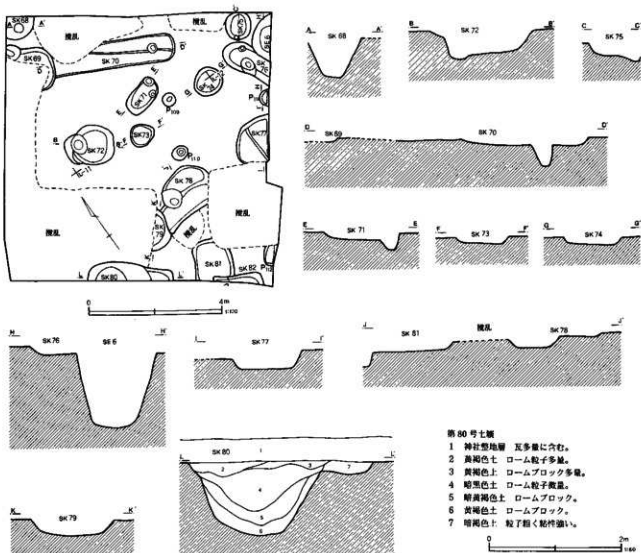
第64号土壇

平面形は楕円形である。規模は、長径1.4m、短径0.9m、深さ31cmを測る。

第65号土壇

平面形は方形である。長辺2.2m、短辺0.8m、深さ43cmを測る。主軸方位は $N-72^{\circ}-W$ 。

第88図 D区遺構



第66号土壇

平面形は方形である。現存長辺1.4m、短辺1.3m、深さ25cm。主軸方位はN-42°-E。

第67号土壇

平面形は方形。長さ0.8m、深さ55cm。

第18号溝

全長4.8m、幅1.0m、深さ68cmを測る。

第19号溝

全長4.0m、幅0.1m、深さ71cmを測る。

第20号溝

全長2.8m、幅0.4m、深さ18cmを測る。

D区 (第88図)

第6号井戸跡

平面形は円形である。深さ1.1mである。

第68号土壇

長さ0.8m、深さ56cmである。

第69号土壇

長さ1.2m、深さ5cmである。

第70号土壇

方形。現存長辺3.6m、短辺0.8m、深さ44cm。

第71号土壇

平面形は方形である。長辺1.2m、短辺0.7m、深さ24cmを測る。主軸方位はN-69°-E。

第72号土壌

平面形は楕円形である。規模は、長径1.5m、短径1.2m、深さ34cmを測る。

第73号土壌

平面形は楕円形である。規模は、長径0.8m、短径0.6m、深さ9cmを測る。

第74号土壌

楕円形。長径0.8m、短径0.8m、深さ10cm。

第75号土壌

平面形は楕円形である。現存長径0.8m、短径0.8m、深さ26cm。主軸方位は $N-37^{\circ}-W$ 。

第76号土壌

長さ1.6m、幅0.8m、深さ9cmである。

第77号土壌

長さ1.3m、深さ25cmである。

第78号土壌

現存の長さ1.3m、深さ19cmである。

第79号土壌

長さ1.2m、深さ17cmである。

第80号土壌

方形。深さ86cm。主軸方位は $N-54^{\circ}-W$ 。

第81号土壌

方形。深さ14cm。主軸方位は $N-12^{\circ}-E$ 。

第82号土壌

平面形は方形である。深さ21cmを測る。

E区 (第89図)

第83号土壌

M-13・14グリッドに位置する。

第84号土壌

現存幅0.9m、深さ8cmである。

第85号土壌

平面形は円形である。直径2.2m、深さ79cm。

第86号土壌

平面形は楕円形。現存短径1.6m、深さ82cm。

第87号土壌

平面形は楕円形。現存短径1.4m、深さ47cm。

第88号土壌

深さ13cmである。

第89号土壌

平面形は不定形。深さ86cmである。

第90号土壌

深さ43cmである。

第91号土壌

平面形は方形。長辺2.6m、現存短辺0.6m、深さ70cmを測る。主軸方位は $N-33^{\circ}-E$ 。

第92号溝

全長5.7m、現存幅1.2m、深さ12cmを測る。

第93号溝

全長8.6m、幅0.5m、深さ18cmを測る。

第94号溝

全長3.3m、現存幅1.0m、深さ59cmを測る。

F区 (第90図)

第92号土壌

長さ1.0m、深さ20cmである。

第93号土壌

方形の土壌が2基重複する。深さ25cm。

G区 (第90図)

第24号溝

深さ32cmを測る。

第25号溝

幅2.0m、深さ51cmを測る。

H区

遺構は検出されなかった。

I区 (第91図)

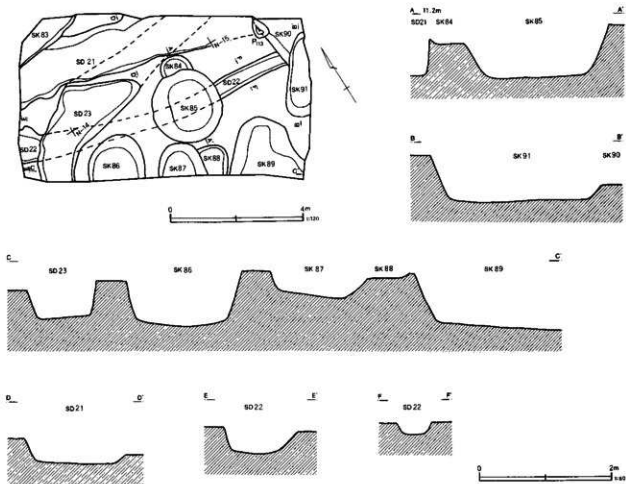
第94号土壌

平面形は方形。深さ43cmである。

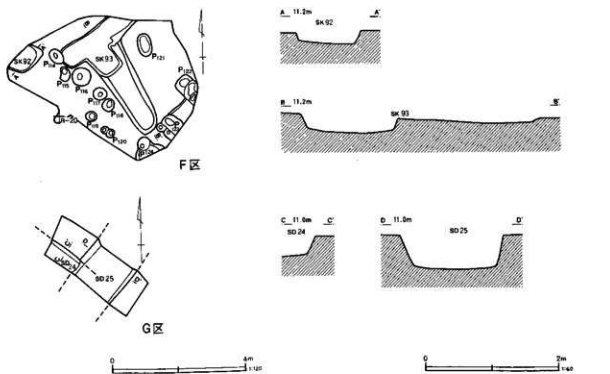
第95号土壌

平面形は円形。直径0.8m、深さ1.16m。

第89图 E区遺構



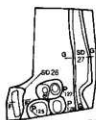
第90图 F・G区遺構



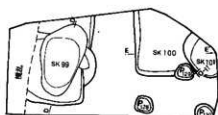
第91図 I～L区遺構



I区



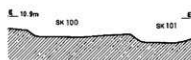
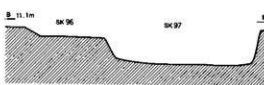
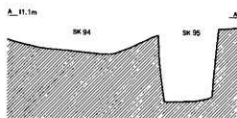
K区



L区



J区



第96号土坑

平面形は楕円形。深さ23cmである。

第97号土坑

平面形は方形。現存長辺2.3m、現存短辺1.3m、深さ55cmである。

J区(第91図)

第98号土坑

平面形は楕円形。幅0.8m、深さ40cmである。

K区(第91図)

第26号溝

全長20m、幅1.1m、深さ62cmを測る。

第27号溝

全長3.0m、幅0.5m、深さ10cmを測る。

L区(第91図)

第99号土坑

平面形は楕円形である。長径2.2m、短径1.2m、深さ66cmを測る。主軸方位はN-60°-E。

第100号土坑

平面形は方形である。深さ9cmである。

第101号土坑

平面形は楕円形である。深さ16cmである。

光明寺遺跡 中・近世ピット一覧

遺構名	調査区	最大径 (cm)	深さ (cm)	遺構名	調査区	最大径 (cm)	深さ (cm)
P ₁	A区	34	22	P ₅₅	A区	36	22
P ₂	"	46	7	P ₅₆	"	—	—
P ₃	"	50	24	P ₅₇	"	40	36
P ₄	"	42	22	P ₅₈	"	—	—
P ₅	"	50	57	P ₅₉	"	—	67
P ₆	"	34	18	P ₆₀	"	88	21
P ₇	"	—	55	P ₆₁	"	92	15
P ₈	"	—	31	P ₆₂	"	24	—
P ₉	"	—	54	P ₆₃	"	22	—
P ₁₀	"	40	13	P ₆₄	"	24	—
P ₁₁	"	52	12	P ₆₅	"	80	47
P ₁₂	"	34	10	P ₆₆	"	50	8
P ₁₃	"	48	30	P ₆₇	"	42	—
P ₁₄	"	—	50	P ₆₈	"	24	—
P ₁₅	"	22	26	P ₆₉	"	24	15
P ₁₆	"	—	51	P ₇₀	"	48	38
P ₁₇	"	—	68	P ₇₁	"	70	12
P ₁₈	"	50	55	P ₇₂	"	70	48
P ₁₉	"	48	81	P ₇₃	"	34	27
P ₂₀	"	46	20	P ₇₄	"	40	30
P ₂₁	"	30	53	P ₇₅	"	74	57
P ₂₂	"	—	9	P ₇₆	"	60	31
P ₂₃	"	58	48	P ₇₇	"	32	8
P ₂₄	"	42	30	P ₇₈	"	50	25
P ₂₅	"	40	34	P ₇₉	"	90	24
P ₂₆	"	30	51	P ₈₀	"	50	—
P ₂₇	"	42	47	P ₈₁	"	14	44
P ₂₈	"	30	16	P ₈₂	"	36	—
P ₂₉	"	40	19	P ₈₃	"	30	—
P ₃₀	"	34	35	P ₈₄	"	34	—
P ₃₁	"	38	30	P ₈₅	"	44	—
P ₃₂	"	28	30	P ₈₆	"	50	—
P ₃₃	"	30	12	P ₈₇	"	60	10
P ₃₄	"	40	42	P ₈₈	"	30	—
P ₃₅	"	46	37	P ₈₉	"	24	—
P ₃₆	"	—	23	P ₉₀	"	24	—
P ₃₇	"	50	31	P ₉₁	"	26	—
P ₃₈	"	40	59	P ₉₂	"	54	—
P ₃₉	"	84	—	P ₉₃	"	15	76
P ₄₀	"	50	31	P ₉₄	B区	—	24
P ₄₁	"	30	25	P ₉₅	"	70	54
P ₄₂	"	26	16	P ₉₆	C区	—	26
P ₄₃	"	29	29	P ₉₇	"	42	11
P ₄₄	"	52	—	P ₉₈	"	100	41
P ₄₅	"	68	24	P ₉₉	"	42	64
P ₄₆	"	54	52	P ₁₀₀	"	40	12
P ₄₇	"	24	12	P ₁₀₁	"	—	10
P ₄₈	"	30	27	P ₁₀₂	"	20	4
P ₄₉	"	30	24	P ₁₀₃	"	32	46
P ₅₀	"	28	42	P ₁₀₄	"	36	28
P ₅₁	"	32	40	P ₁₀₅	"	106	54
P ₅₂	"	40	22	P ₁₀₆	"	40	10
P ₅₃	"	22	52	P ₁₀₇	"	84	42
P ₅₄	"	24	17	P ₁₀₈	"	24	14

遺構名	調査区	最大径 (cm)	深さ (cm)
P ₁₀₉	D区	40	61
P ₁₁₀	〃	46	15
P ₁₁₁	〃	—	18
P ₁₁₂	〃	60	9
P ₁₁₃	E区	56	36
P ₁₁₄	F区	50	47
P ₁₁₅	〃	44	20
P ₁₁₆	〃	61	37
P ₁₁₇	〃	45	34
P ₁₁₈	〃	42	25
P ₁₁₉	〃	34	22

遺構名	調査区	最大径 (cm)	深さ (cm)
P ₁₂₀	F区	44	12
P ₁₂₁	〃	70	16
P ₁₂₂	〃	62	9
P ₁₂₃	〃	64	27
P ₁₂₄	〃	95	35
P ₁₂₅	K区	50	2
P ₁₂₆	〃	60	10
P ₁₂₇	〃	81	55
P ₁₂₈	L区	53	12
P ₁₂₉	〃	59	11
P ₁₃₀	〃	56	11

(2) 出土遺物 (第92～96図)

遺構覆土や表土中から、中・近世の遺物が大量に出土した。量的には18～19世紀代の近世遺物が中心で、次に16～17世紀のかわらけが少量出土した他、13世紀代の片口鉢などが見られる。

中・近世遺物 (第92図)

17世紀以前のもと思われる遺物を、中・近世遺物として一括した。4はSK67、6はSK2、9はSD16、10はSK49から出土しており、これらは遺構の時期を示すものと思われる。

1は13世紀代の片口鉢と思われる。須恵器質で、内面はよく擦られて滑らかになる。

2は小かわらけで、成形が手捏であることから、12世紀末から13世紀前半のものである可能性がある。薄手で焼成良好、明黄褐色を呈する。SD23覆土中から出土したが、この遺構からは近世の陶磁器や江戸かわらけなども出土しており、あるいはその時期の江戸かわらけの類かもしれない。

3・4は16世紀代のかわらけである。体部がやや深く、底部はともに回転糸切り技法である。3は切り離した後、木口状工具で擦った痕が見られる。

5～10は17世紀代のかわらけと思われる。底部はいずれも回転糸切り痕が見られる。6はやや厚手で体部が浅く、底径が大きい。9は底部切り離した後、放射状に刻線が見られ、焼成後に底部穿孔される。

近世遺物 (第93～96図)

18世紀から19世紀のまでの江戸期の遺物を一括した。出土地点は調査区全域に及び、表土中や遺構確認面から、以下に掲げる各種の遺物が多量に出土した。このうち、井戸跡、土壌、溝などの覆土から出土した遺物は、概ね遺構の時期を示すものと思われる。

特にE区では、SK86・89・90・91、SD23の覆土中から遺構確認面、表土内に至るまで、一括投棄された状態で大量に出土した。

本報告で図示した遺物は、全体の器形が把握可能、あるいは染付などで描かれた図柄の全容がある程度わかるもののみ図化した。

磁器 (1～34)

磁器はすべて染付磁器であり、肥前系と瀬戸・美濃系に分類される。瀬戸・美濃系磁器はすべて19世紀代のものである。

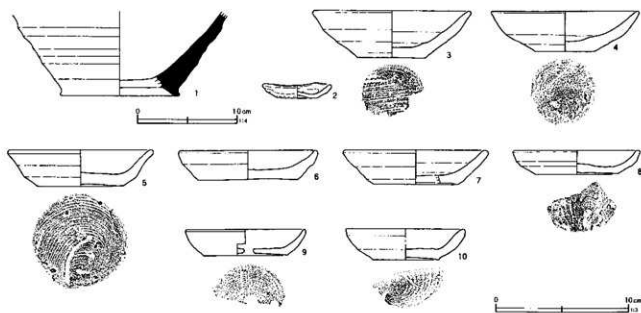
1～6は、端反形の碗である。1・2は19世紀代の瀬戸・美濃系、3～6は肥前系磁器である。2は草花文が、3・4は松の枝振りが染付される。6は口唇に施釉され、赤褐色になる。

7～10は、18世紀代の肥前系磁器で、いわゆる「くらわんか茶碗」である。7はコンニャク判による染付が、8・9は草花文が描かれる。10の菊文は9に描かれる花模様にも共通する。

11は半球形の小碗で、18世紀後半のもと思われる。外面に稲束、底部内面に米俵が描かれる。

12～15は半筒形の小碗である。14は器形がやや内傾し、外面には青磁釉が施される。12・14は内面に四方

第92図 中・近世出土遺物



中・近世出土遺物観察表 (第92図)

番号	材質	産地	器種	L径	器高	底径	装飾	胎土色・色調	残存率	出土位置・備考
1	須恵器	常滑	片口鉢	(11.0)				灰白	25	I区
2	土器		かわらけ	(5.0)	1.0	(3.0)		明黄褐	50	S D 23 手づくね形成
3	土器		かわらけ	(11.7)	3.5	(5.2)		明褐	25	C区 底部木目(?)痕
4	土器		かわらけ	11.0	3.0	4.1		明黄褐	95	S K 67 底部回転糸切り痕
5	上器		かわらけ	10.7	2.7	6.5		明褐	100	I区 底部回転糸切り痕
6	土器		かわらけ	10.3	2.2	7.5		橙	95	S K 2 底部回転糸切り痕
7	土器		かわらけ	(10.5)	2.6	(6.4)		橙	20	I区
8	土器		かわらけ	(9.9)	1.8	(6.1)		明黄褐	15	E区 底部回転糸切り痕
9	土器		かわらけ	(8.9)	2.0	(6.9)		橙	25	S D 16 底部回転糸切り痕
10	上器		かわらけ	(8.9)	2.3	(5.0)		明黄褐	25	S K 49 底部回転糸切り痕

たすき文、13の菊文は、10のそれと共通する。15は綾杉文が描かれる。

16-18は19世紀代の瀬戸・美濃系磁器で、端反形の小碗である。18の器形と文様配置は、1のそれにそっくりで、中・小のセットであろうか。

19は卵形の小碗で、松の下に人が並ぶ風景を描く。18世紀代のものと思われる。

20・21は筒丸形の小碗で、染付模様が共通する。19世紀代のものと思われる。

22-24・34は肥前系の碗蓋である。

25は肥前系の仏飯器で、雨降文が描かれる。18世紀前半のものと思われる。

26-31は、肥前系の皿である。26・27は浅い皿で、

底部内面に蛇目輪刺ぎが見られ、内面に草花文、コンニャク判による五弁花が配置される。18世紀後葉のものと思われる。

28-31はやや底の深い皿で、18世紀後葉から19世紀初葉にかけてのものと思われる。28は内面に唐草風の独特の模様、外面の草花文と底部の花模様は30・31に共通する。29は底部外面に「馬」の文字が書かれる。30・31は底部外面に蛇目輪刺ぎが見られ、内外面の文様配置が共通する。

32は肥前系の鉢で、底部の割れ口に焼継の痕が見られる。底部外面の「ル110」の文字は焼継の作業過程で書かれたものと思われる。外面の染付模様は唐草風で、28のそれと同模様である。

33は形打ちした鉢である。34は口縁が波状になる皿である。両者ともに、染付が手描きであることから、江戸期のもと思われる。

陶器 (35~58)

陶器は瀬戸・美濃系が中心で、この他に相馬、志戸呂、肥前、京都・信楽系などが含まれる。

35~42は、瀬戸・美濃系の灯明皿で、18世紀後半から19世紀にかけてのものと思われる。内面から外面半分に茶釉が施される。口径は10cm以上のものから最小7cm代まで多様である。

43も灯明皿で、志戸呂産である。薄手の作りで、底部を回転切りしている。18世紀前半代である。

44・45は、瀬戸・美濃系の天目茶碗である。19世紀前半のものか。

46は相馬焼の小皿、47は瀬戸・美濃系の小坏である。いずれも19世紀代のものか。

48・49は京都・信楽系の碗である。48は半球形、49は杉形で小さい高台がつき、外面には草の模様染付される。18世紀中葉から後葉のものと思われる。

50・51は、相馬焼である。50は土瓶蓋で、内面には「湯」の文字が描かれる。51は志須蓋で、外面に染付模様が描かれる。いずれも19世紀代である。

52は瀬戸・美濃系の香炉である。底部を残して内外面に茶釉が施される。17世紀後半に遡る可能性もある。

53は瀬戸・美濃系の汁次である。内外面に茶釉が施される。18世紀前半のものか。

54は瀬戸・美濃系陶器、仏飯器である。

55は産地不明で土瓶の破片と思われる。深緑色の独特の釉が施される。19世紀代のもと思われる。

56は肥前系の描鉢である。赤褐色を呈する。18世紀代のもと思われる。

57は土鍋と思われる。産地は不明である。

58は瀬戸・美濃系の片口鉢である。施釉され、黄色を呈する。18世紀後半のもと思われる。

土器 (59~71・75・76)

59~62は、口径5cm前後から10cmに満たない小型のかわらけである。いずれも薄手の作りでロクロ挽きさ

れ、60は底部が回転糸切りされる。

61~71は焙烙である。いずれも破片で出土した。61~66は浅いもので、61は底部が平坦になり、64~66は、丸みを帯びる。67~71は身が深く、底部が平坦になるものである。内面に段をもたず、内側の把手部が口唇直下から底面に渡される。

75・76は素焼の火鉢である。

泥面子 (72・73)

2点とも型起こし成形である。72は鬼の顔か。73はとぐろを巻いた蛇か。

ミニチュア玩具 (74)

樹脂状のものを型に流して成形したものと思われる。黄緑色を呈する。表裏両面に型取りしてあり、座禅僧を模したものか。

瓦 (77~85)

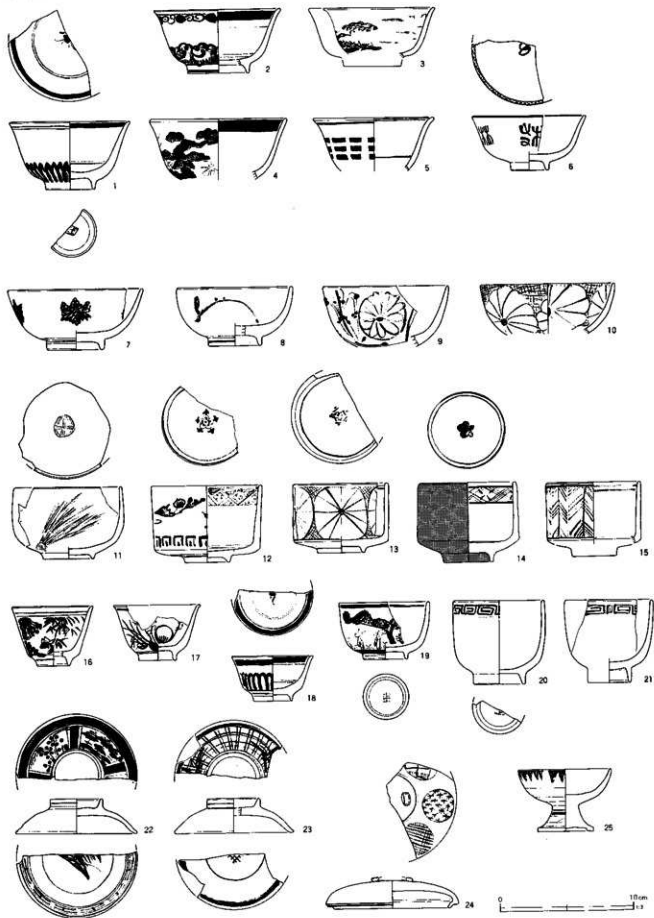
今回出土量の最も多いもので、おもにA区北部、C区全域、E区全域などの表土中から夥しい量の出土を見た。C区では瓦が敷き詰められた状態で出土した。顕著な出土遺構では、SK12 (A区)、SK50~52 (B区)、SK85・91 (E区) があげられる。

77~81は軒丸瓦で珠文と巴文が配置される。82~85は軒平瓦で、江戸式といわれるものである。

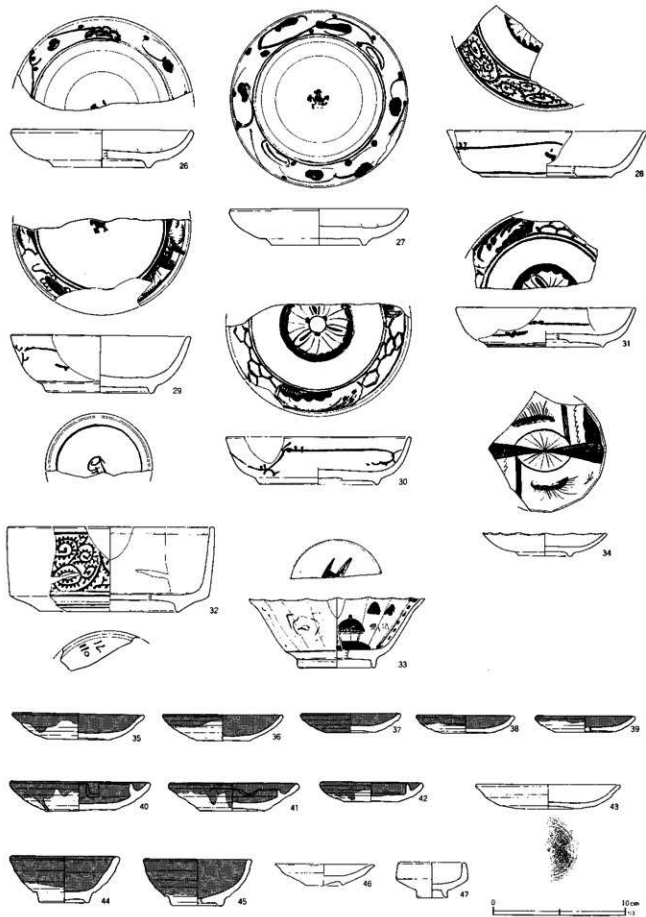
古銭 (第96図88~96)

古銭は寛永通寶を中心に、北宋銭、明銭などが出土した。86・87は北宋銭で、88は皇宋通寶、87は大観通寶である。88~96は寛永通寶である。

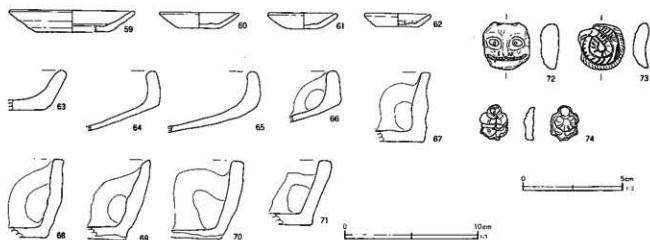
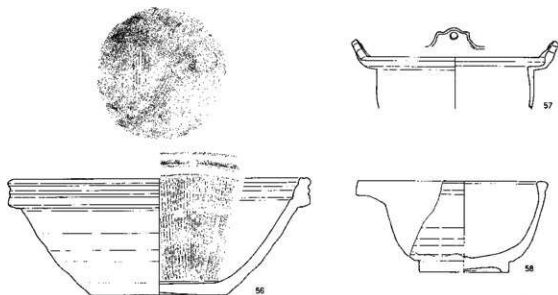
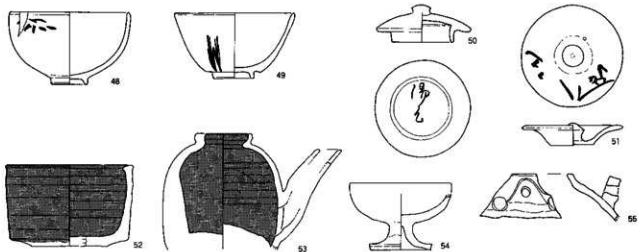
第93图 近世出土遺物 (1)



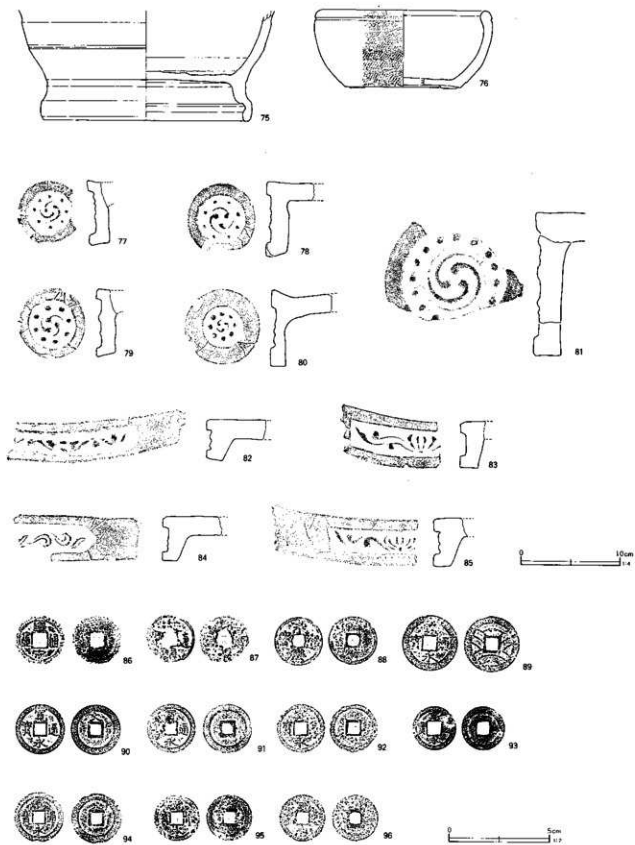
第94図 近世出土遺物 (2)



第95図 近世出土遺物 (3)



第96図 近世出土遺物(4)



近世出土遺物観察表 (93~96図)

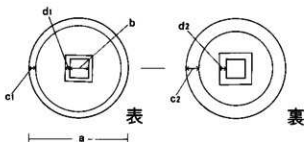
番号	材質	産地	器種	口径	器高	底径	装飾	胎土・色調	残存率	出土位置・備考
1	磁器	瀬戸・美濃	碗	(9.0)	5.1	(3.6)	染付	白	25	S K 89
2	磁器	瀬戸・美濃	碗	(9.4)	4.8	(4.6)	染付	白	25	S K 91 草花文
3	磁器	肥前	碗	(9.6)	(4.4)	(4.3)	染付	灰白	30	S K 91
4	磁器	肥前	碗	(10.2)			染付	灰白	30	S K 85
5	磁器	肥前	碗	9.0			染付	灰白	45	E区
6	磁器	肥前	碗	(8.6)	4.1	(2.9)	染付	灰白	25	S D 23 口唇鉄軸
7	磁器	肥前	碗	10.1	4.6	4.3	染付	灰白	30	S D 23 コンニャク判 くらわんか
8	磁器	肥前	碗	8.8	4.4	4.0	染付	灰白	50	S D 23 草花文 くらわんか
9	磁器	肥前	碗	(9.5)			染付	灰白	25	S D 23 くらわんか
10	磁器	肥前	碗	10.1			染付	灰白	30	E区 菊文 くらわんか
11	磁器	肥前	碗	(8.2)	5.4	3.8	染付	灰白	40	S K 90 福東文・米横文
12	磁器	肥前	碗	8.4	5.8	3.9	染付	灰白	50	S D 23 草花文・四方たすき文・五弁花
13	磁器	肥前	碗	7.2	5.2	3.6	染付	灰白	75	S K 89 菊文・五弁花?
14	青磁	肥前	碗	7.3	6.0	3.7	染付	灰白	95	S D 23 青磁軸 四方たすき文・五弁花
15	磁器	肥前	碗	7.0	(5.6)	(3.4)	染付	灰白	30	E区 柿形文
16	磁器	瀬戸・美濃	小碗	6.0	4.5	(2.4)	染付	白	45	A区
17	磁器	瀬戸・美濃	小碗	6.9	4.2	2.8	染付	白	80	A区
18	磁器	瀬戸・美濃	小碗	(6.0)	3.4	(2.8)	染付	白	50	S K 90
19	磁器	肥前	小碗	(6.6)	4.3	3.2	染付	灰白	30	A区
20	磁器	肥前	碗	(6.7)	6.3	(3.8)	染付	灰白	30	E区
21	磁器	瀬戸・美濃	碗	(6.4)	6.3	(3.2)	染付	白	40	S K 90
22	磁器	肥前	蓋	9.1	2.6	把手径3.8	染付	灰白	50	E区
23	磁器	肥前	蓋	(9.0)	2.6	把手径(3.8)	染付	灰白	30	A区
24	磁器	肥前	蓋	(8.9)	2.1		染付	灰白	25	D区
25	磁器	肥前	仏飯器	(6.9)	4.7	(4.2)	染付	灰白	40	S K 83 台底輪高台 雨降文
26	磁器	肥前	皿	(13.5)	2.9	(7.4)	染付	灰白	50	E区 蛇目輪測 草花文
27	磁器	肥前	皿	13.2	2.7	7.0	染付	灰白	100	S K 91 蛇目輪測 草花文・五弁花
28	磁器	肥前	皿	(14.9)	3.5	(9.8)	染付	灰白	20	E区 蛇目輪測
29	磁器	肥前	皿	13.4	4.3	7.7	染付	灰白	40	S K 85 底部に「鳥」の文字 五弁花
30	磁器	肥前	皿	13.8	3.6	8.8	染付	灰白	55	E区 蛇目輪測
31	磁器	肥前	皿	(13.3)	3.0	(8.7)	染付	灰白	30	E区 蛇目輪測
32	磁器	肥前	鉢	(15.5)	6.4	(10.6)	染付	灰白	20	S K 85 焼継 底部に「ル110」?
33	磁器	肥前	鉢	(13.2)	5.3	(5.5)	染付	灰白	25	A区 口唇鉄軸
34	磁器	肥前	皿	(9.3)	1.7	(4.1)	染付	灰白	70	S K 86
35	陶器	瀬戸・美濃	灯明皿	9.9	1.9	4.6	茶釉	灰	50	S K 85
36	陶器	瀬戸・美濃	灯明皿	(9.0)	2.0	(4.0)	茶釉	灰	30	S K 90
37	陶器	瀬戸・美濃	灯明皿	7.3	1.4	3.8	茶釉	浅黄	50	E区
38	陶器	瀬戸・美濃	灯明皿	7.2	1.3	3.6	茶釉	浅黄	100	S K 90
39	陶器	瀬戸・美濃	灯明皿	7.3	1.2	4.6	茶釉	浅黄	50	S K 90
40	陶器	瀬戸・美濃	灯明皿	10.4	2.2	5.2	茶釉		100	S E 1
41	陶器	瀬戸・美濃	灯明皿	9.6	2.1	5.0	茶釉		100	S K 89
42	陶器	瀬戸・美濃	灯明皿	7.5	1.4	4.1	茶釉	灰	80	S K 86
43	陶器	志戸呂	灯明皿	(10.8)	1.8	(4.9)		暗灰黄	30	E区 底部同転度切り痕
44	陶器	瀬戸・美濃	天目茶碗	7.6	3.5	3.5	茶釉	淡黄	75	S D 2
45	陶器	瀬戸・美濃	天目茶碗	(8.0)	3.5	(3.8)	茶釉	淡黄	20	L区
46	陶器	相馬	小皿	7.3	1.6	2.8	内外面施釉	オリーブ灰	100	S E 1
47	陶器	瀬戸・美濃	小坏	4.8	2.7	2.2	無色釉	灰	100	A区
48	陶器	京都・信楽	碗	(8.9)	5.4	(2.7)	無色釉・染付	淡黄	50	S D 23
49	陶器	京都・信楽	碗	8.9	4.9	3.0	無色釉・染付	淡黄	100	S K 85

番号	材質	産地	器種	口径	器高	底径	裝飾	胎土色・色調	残存率	出土位置・備考	
50	陶器	相馬	上坂蓋	7.1	(2.8)	4.3	無色釉	淡黄	95	S K 89	
51	陶器	相馬	急須蓋	径7.6	1.6	把手径1.6	無色釉・染付	灰	100	D区	
52	陶器	瀬戸・美濃	香炉	(8.2)	6.1	(5.7)	茶釉	淡黄	20	S D 23	
53	陶器	瀬戸・美濃	汁次	4.1			茶釉	灰白	80	E区	
54	陶器	瀬戸・美濃	仏飯器	(7.6)	(5.0)	4.6	施釉	灰白	70	E区 台底挟り込み	
55	陶器	不明	土瓶				施釉	暗赤褐		E区 急須の可能性あり	
56	陶器	肥前	播鉢	28.8	11.8	13.7		赤褐	40	S K 83・S D 23	
57	陶器	不明	土鍋	19.4			内外面施釉	橙	30	S K 91	
58	陶器	瀬戸・美濃	片口鉢	(14.8)	9.2	(9.0)	黄色釉?	黄	40	S D 23	
59	土器		かわらけ	(9.4)	1.6	(5.5)		橙	25	S D 23	
60	土器		かわらけ	6.0	1.2	3.0		橙	75	E区 底部回転糸切り痕	
61	土器		かわらけ	5.1	1.2	2.3		橙	70	E区	
62	土器		かわらけ	(4.9)	1.0	(3.3)		橙	40	E区	
63	土器		焙烙	(24.6)	3.0	(21.0)		橙	25	S K 85	
64	土器		焙烙	(34.0)				黒褐	10	S K 91	
65	土器		焙烙	(32.0)				黒褐	10	S K 91	
66	土器		焙烙	(31.4)				橙	10	S D 3	
67	土器		焙烙	(35.4)	5.0	(36.4)		黒褐	10	S E 1	
68	土器		焙烙		5.9			黒褐		S D 23	
69	土器		焙烙	(38.0)	(6.0)	(35.0)		黒褐	10	S D 16	
70	土器		焙烙		(6.0)			黒褐		S K 85	
71	土器		焙烙		4.8			黒褐		S K 91	
72	土製品		泥面子	長さ2.3cm、幅2.3cm、厚さ0.9cm						100	E区 表面鬼の顔?
73	土製品		泥面子	長さ2.3cm、幅2.2cm、厚さ0.6cm						100	D区 表面蛇?
74	土製品		ミニチュア玩具	長さ1.8cm(現存)、幅1.4cm、厚さ0.5cm							S K 5 座禅僧?
75	土器		火鉢			20.8		黄褐	50	S K 89	
76	土器		火鉢	(16.3)	7.8	11.7		暗褐	25	S K 89 胴丸形	

古銭観察表 (第96図86~96)

番号	出土遺構	銭種	a	b	C1	d1	C2	d2	厚さ(mm)	重量(g)	国名	初録年
86	S D 9	皇宋通寶	24.6	7.3	2.2	0.6	2.2	1.3	1.1	2.2	北宋	1038年
87	S K 67	大観通寶	25.4	7.0	1.3	0.6	1.7	0.8	1.6	2.1	北宋	1107年
88	S D 2	永楽通寶	24.7	6.0	1.3	0.6	2.2	0.9	1.2	2.3	明	1408年
89	S K 90	寛永通寶	28.3	6.4	3.8	0.9	3.8	1.3	1.1	3.8		
90	S D 23	寛永通寶	25.4	5.8	2.6	0.7	3.6	1.4	1.3	3.4		
91	S D 16	寛永通寶	24.8	5.3	2.6	0.7	3.5	1.7	1.7	4.8		
92	E区	寛永通寶	24.5	6.2	2.0	0.6	2.7	1.1	1.1	2.3		
93	S K 90	寛永通寶	22.2	6.6	2.2	0.7	3.2	1.2	1.0	2.1		
94	E区	寛永通寶	25.5	5.8	2.7	0.8	3.5	1.3	1.3	2.6		
95	S K 51	寛永通寶	23.2	6.1	2.1	0.7	2.8	1.8	1.0	2.3		
96	E区	寛永通寶	23.7	6.0	2.2	0.8	2.3	1.3	1.0	2.4		

古銭の計測方法



V 結語

1. 加曾利E式土器について

今回の調査で検出された住居跡のうち、第6・7号住居跡から、加曾利E式土器がまとまって出土した。これらの資料を中心に、时期的な位置付けを試みたい。

加曾利E式土器の編年については、近年、埼玉県内で、特に加曾利EⅢ式から後期初顔にかけての見直しが進められている。谷井彪・細田勝両氏は、住居跡出土の一括資料を対象にして、関東における人木式土器との共伴例、東北における加曾利E式土器との共伴例などの検討を行い、従来中期終末に位置していた加曾利EⅣ式土器を時間軸として否定した(谷井・細田1995)。さらにその後、加曾利EⅡ式を前葉、中葉、後葉の3細分、加曾利EⅢ式を1時期とし、後期初顔に至る編年観を提示している(谷井・細田1997)。

一方、金子直行氏はキャリバー形土器の胴部懸垂文に磨消手法が出現する段階をもって、ひとつの画期と見なし、以降を加曾利EⅢ式として新古2段階に分ける考えを示している(金子1996、1997)。

加曾利EⅡ式から加曾利EⅢ式にかけて見た場合、上記2者の見解は、加曾利EⅢ式期の開始をどこに置くかという問題を除いては、土器群の区分内容に大きな隔たりは見られない。これらの編年との対比を念頭において、第6・7号住居跡を中心とする各遺構の出土土器を、I～Ⅲ期の3段階に区分した(第97図)。また、各段階に相当すると考えられる類型を、周辺遺跡に求めた(第98図)。

第Ⅰ期

従来の加曾利EⅡ式土器で、連弧文土器を伴う段階である。第42号土壌および第214・215号ピットの各出土土器がこの段階になる(第97図1・2)。

1のキャリバー形土器は、胴部に2本沈線による懸垂文を配する。2の連弧文は3本沈線によるもので、いずれも磨消手法が現れない段階である。

第Ⅱ期

従来の加曾利EⅡ式で、細田氏による加曾利EⅡ式

後葉、金子氏による加曾利EⅢ式古段階に相当する。キャリバー形土器の胴部には磨消懸垂文が配され、連弧文土器の変化形態が現れる段階である。第6号住居跡出土土器(第97図3～11)は、この段階に相当する。これらの他にも、第8・10・12号住居跡の各出土土器が、この段階に相当するものと思われる。

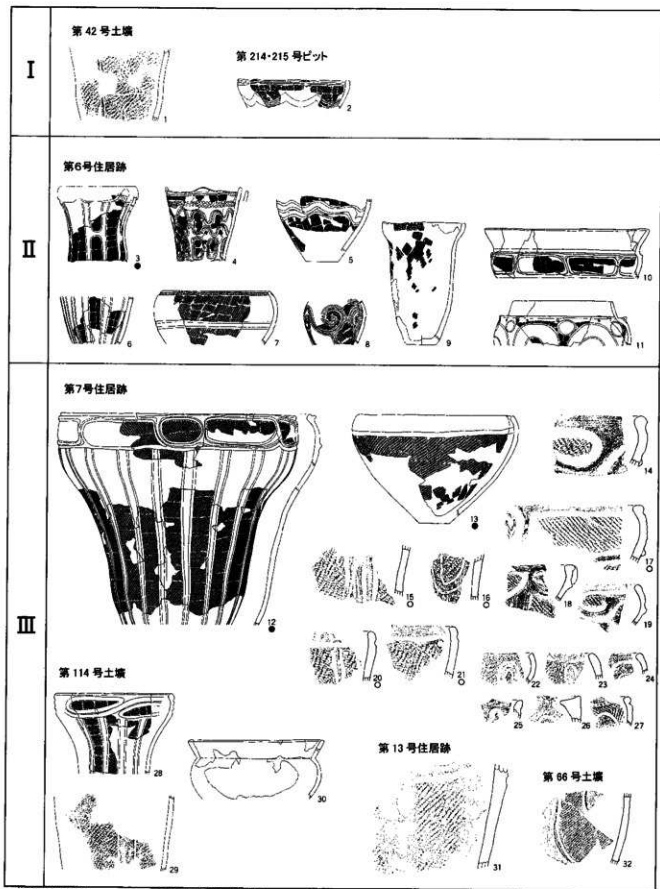
3と6はキャリバー形土器で、3の胴部には磨消懸垂文が途中で繋がる、いわゆるH字状となる特徴的な文様要素である。口縁部文様帯は同一個体の破片から、渦巻文と枠状区画文の組み合わせになるとと思われる。

4、5、7は前段階の連弧文土器からの変化形態である。いずれも磨消手法が取り入れられ、4・5の沈線モチーフは連続波状を描く。4はラッパ状に開く器形で、4単位の波状口縁をなす。体部文様は上から2列の連続刺突文、2段の沈線波状文と続き、下部には方形または楕円形の枠状区画文を配する。枠状区画の外側部分、刺突文と1段目の波状文との間には粗い磨消によって無文部が意識される。こうした枠状区画文は、本来は大木9式に特有の文様要素である。

8は大木系土器で、体部が膨らみ、3本沈線による大柄な渦巻モチーフは、大木8b式からの退化傾向が窺える。この他、縄文地文のみの土器、枠状区画文を配する浅鉢、有孔罎付土器(9～11)などを合わせた土器群が、この段階の一括資料として抽出される。

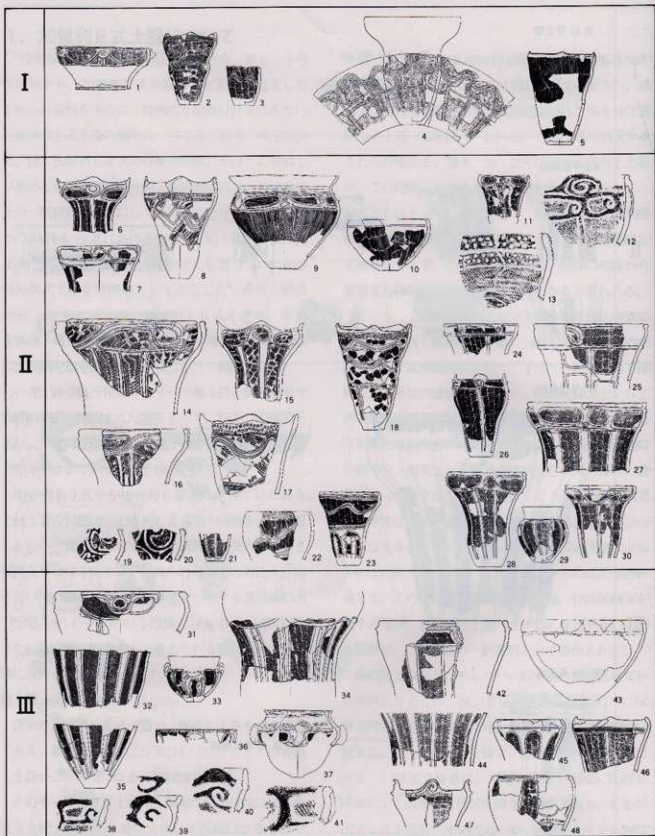
第97図3のようなキャリバー形土器の胴部懸垂文がH字状になるもの(仮にH字状懸垂文とする。)には、伊奈町戸崎前遺跡第272号土壌出土土器(第98図25)がある。キャリバー形土器で、懸垂する沈線が3本になる。口縁部文様帯は、下端を陸帯で明瞭に区画し、陸帯による渦巻文と枠状区画文で構成される。ともに出土した土器群(第98図24～30)を見てみると、24は口縁部文様が25と共通し、27、28、30は、口縁部に楕円区画文が主体となるが、胴部との境は陸帯で区画され、くずれはあまり見られない。この段階には、いまだ

第97図 道合中遺跡出土土器変遷図



● 炉体土器

○ 炉体伴出土器片



1～3 原遺跡第8号住居跡 4・5 北遺跡第63号住居跡 6～10 宿東遺跡D区第38号住居跡 11～13 原遺跡第39号住居跡 14～17 竹之下遺跡第17号住居跡 18 鶴巻遺跡第2号住居跡 19～23 戸崎前遺跡第34号住居跡 24～30 戸崎前遺跡第272号土壌 31～41 宿東遺跡D区第6号住居跡 42～48 北遺跡第30号住居跡

吉井城山類が出現していないと考えられる。

H字状懸垂文の類例は、この他に入間市金堀沢Ⅱ遺跡第53号住居跡出土土器(斉藤他1993)、児玉町古井戸遺跡の住居跡出土土器(宮井他1989)の中にも多数あり、従来の加曾利EⅡ式終末以降に見られる文様要素である。東北では大木9式の中に、H字状類似の胴部懸垂文が見られることから、関連性を窺える。

第98図4はキャリバー形土器で、2～3本1組の沈線による胴部懸垂文の中位から、懸垂文同士を弧状に連結するモチーフが見られる。第98図25の土器と比較して見ると、前段階のこうした要素からH字状懸垂文が生成して行くことがわかる。

次に、第97図4に特徴的な連弧文土器の変化形態の類例は、日高市宿東遺跡D区第38号住居跡(第98図8)、伊奈町原遺跡第39号住居跡(13)、春日部市竹之下遺跡第17号住居跡(17)、白岡町鶴巻遺跡第2号住居跡(18)、伊奈町戸崎前遺跡第34号住居跡(23)など、周辺地域を中心に多く見られる。第98図2と比較すると、これらの土器が前段階からの変化形態であることがよくわかる。8、17、18は、波状口縁で外に開く器形および文様構成が、第97図4に酷似している。8、18は、連続刺突文の様相が古相を帯びるが、8と共伴するキャリバー形土器に6、7がある。18は磨消懸垂文の胴部破片とともに出土している(奥野他1997)。8、23の胴下部の文様は、欠損のために判然としなが、第97図4類似の楕円区画文だった可能性もある。23とともに出土した19、20は大木9式の古段階に相当する。

これら連弧文土器の変化形態は、周辺地域を中心に各所で見られるが、共伴する土器には従来の加曾利EⅡ式後葉から終末にかけてのキャリバー形土器が見られる一方で、いわゆる吉井城山類の上器群との共伴は、今のところほとんど見られない。こうしたことから、第98図14～17は、キャリバー形土器の口縁部文様のくずれが新相を帯びる嫌いがあるものの、あえてこの段階に置いた。

第Ⅲ期

いわゆる吉井城山類が出現する段階で、従来の加曾

利EⅢ式、金子氏による加曾利EⅢ式新段階に相当する。第7号住居跡出土土器(第97図12～27)は、おもにこの段階に当たるものと考えた。この他、第114号土城出土土器(28～30)、第13号住居跡出土土器(31)、第66号土城出土土器(32)などが含まれる。

第7号住居跡は第6号住居跡の覆土を切って、埋燻炉を構築している。12と13がその炉体土器であり、15～17、20、21の破片が、炉体に共伴している。14、18、19、22～27は、覆土中からの出土である。これらのうち22～27は、吉井城山類を含む中期終末の土器群である。これらの土器群を、覆土中の混入とするのか、あるいは炉体土器と同一時期を示す一括資料として扱うのかによって見解が分かれる。今回は後者の見地から、周辺遺跡の類例について見てみたい。

日高市宿東遺跡D区第6号住居跡出土土器(第98図31～41)、伊奈町北遺跡第30号住居跡出土土器(42～48)は、いずれも従来の中期終末を特徴付ける土器群(第98図36、45、46、48)と、第97図12類似の、胴部懸垂文が多単位に繰り返されるキャリバー形土器(32、35、44)との共伴例である。この段階のキャリバー形土器は、これら前段階からの土器群が引き続き残るとともに、胴部懸垂文が頸部近くで幅広くなったり、口縁部文様帯と胴部との境界がくずれ、幅広沈線による区画文が主体となる口縁部文様になる(第97図28、29、31、第98図31、34、42)。

第97図12の口縁部文様は、前段階と変わらない隆帯と沈線による楕円区画文だが、胴部との境界は隆帯が一周せず、途中から沈線となり、新相を読み取ることができる。また、器形的にはキャリバー形と見るより、胴部中位がやや括れ、胴下部で急激に窄まる中期終末段階の器形的特徴に近い。

以上、第6号住居跡出土土器と第7号住居跡出土土器との関係を、同一型式内の遺構の切り合いではなく、型式的な段階差として区分し、周辺地域の類例とともに検討した。

磨消縄文手法が出現する加曾利EⅡ式以降、中期終末にかけてのキャリバー形土器については、明確な段

階区分が困難であるが、そのことが逆に、この時期の土器群の実態を示しているといえよう。また、磨消懸垂文の出現段階の土器群には、様々な要素が出現し、前段階と比べ、地域的にも一様な変化が見られる。

この時期を前後して、東北の大大式土器の大きな型式的変化とを重ねて考えた場合、ひとつの両期を感じるのが、実態的な把握にはより広範な出土土器の検証が、今後必要となる。

引用・参考文献

- 青木秀雄他 1983 『前原遺跡』宮代町文化財調査報告書第1集 宮代町教育委員会
 青木秀雄他 1984 『山崎南遺跡・前原遺跡』宮代町文化財調査報告書第2集 宮代町教育委員会
 奥野友生 1989 『町内遺跡群発掘調査報告書Ⅲ 本田下遺跡』白岡町埋蔵文化財調査報告書第5集 白岡町教育委員会
 奥野友生 1990 『山遺跡』白岡町遺跡調査会調査報告書第1集 白岡町遺跡調査会
 奥野友生 1990 『町内遺跡群発掘調査報告Ⅳ 下道遺跡』白岡町埋蔵文化財調査報告書第6集 白岡町教育委員会
 奥野友生 1998 『町内遺跡群発掘調査報告書Ⅴ 前田遺跡』白岡町埋蔵文化財調査報告書第9集 白岡町教育委員会
 奥野友生他 1987 『タタラ山遺跡』白岡町タタラ山遺跡調査会調査報告書 塔タラ山遺跡調査会
 奥野友生他 1996 『南鬼塚氏前跡(第1地点・第2地点)』白岡町遺跡調査会調査報告書第4集 白岡町遺跡調査会
 奥野友生他 1996 『タタラ山遺跡(第3地点)』町内遺跡群発掘調査報告Ⅴ』白岡町埋蔵文化財調査報告書第7集 白岡町教育委員会
 奥野友生他 1996 『入耕地遺跡(第2地点)』町内遺跡群発掘調査報告Ⅵ』白岡町埋蔵文化財調査報告書第8集 白岡町教育委員会
 奥野友生他 1997 『龜巻遺跡』白岡町遺跡調査会調査報告書第5集 白岡町教育委員会
 加藤 晃・中野達也他 1995 『坊荒句北(1,2次)、坊荒句、立山遺跡』春日部市遺跡調査会報告書第4集 春日部市遺跡調査会
 加藤 晃・中野達也他 1998 『竹之下遺跡』春日部市遺跡調査会報告書第6集 春日部市遺跡調査会
 金子直行他 1987 『北・八幡谷・相野谷』埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書第66集
 金子直行・宮瀧由紀子 1996 『大山遺跡 第9次』埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書第180集
 金子直行他 1997 『戸崎前遺跡』埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書第187集
 久喜市 1989 『久喜市史 資料編1』
 埼玉県 1993 『中川水系 総論・自然』中川水系総合調査報告書1
 斉藤祐司・宮岡 久 1993 『金堀沢Ⅱ遺跡 第1・2次調査』入間市遺跡調査会埋蔵文化財調査報告第14集 埼玉県入間市遺跡調査会
 塩野 博 1981 『私市城跡』騎西町埋蔵文化財調査報告書第1集 騎西町教育委員会
 島村範久他 1983 『騎西町遺跡分布調査報告書』騎西町埋蔵文化財調査報告書第2集 騎西町教育委員会
 島村範久 1997 『騎西城武家屋敷跡 妙光寺第1・2次発掘調査報告書』騎西町遺跡調査報告書第2集 騎西町遺跡調査会
 島村範久 1999 『三番遺跡 第3次発掘調査概要報告書』騎西町埋蔵文化財調査報告書第3集 騎西町教育委員会
 鈴木敏昭他 1980 『足利遺跡』久喜市埋蔵文化財調査報告書 久喜市教育委員会
 鈴木敏昭他 1984 『茶屋遺跡』白岡町埋蔵文化財調査報告書第2集 白岡町教育委員会
 谷井 彪・細田 勝 1995 『関東の大大式・東北の加曾利E式土器』『日本考古学 第2号』日本考古学協会
 谷井 彪・細田 勝 1997 『水窪遺跡の研究—加曾利E式土器の編年と曾利式の関係からみた地域性—』『研究紀要 第13号』埼玉県埋蔵文化財調査事業団
 中村和夫 1988 『光明寺南遺跡』久喜市埋蔵文化財調査報告書 埼玉県久喜市教育委員会
 中村和夫 1989 『道合遺跡』久喜市埋蔵文化財調査報告書 埼玉県久喜市教育委員会
 中村和夫 1994 『御陣山遺跡(第4～7次発掘調査)』久喜市埋蔵文化財調査報告書第8集 埼玉県久喜市教育委員会
 宮井英一他 1989 『占井戸—縄文時代—』埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書第75集
 村田章人・上野真由美 1997 『原/谷畑』埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書第179集
 山本良知 1974 『御陣山遺跡発掘調査報告書』久喜市文化財調査報告書 久喜市教育委員会
 山本良知他 1979 『高輪寺遺跡』久喜市埋蔵文化財調査報告書 久喜市教育委員会
 山本良知他 1983 『甘棠院西遺跡 荒磯遺跡』久喜市埋蔵文化財調査報告書 久喜市教育委員会
 山本良知・中村和大他 1987 『御陣山遺跡(第2・3次発掘調査)』久喜市埋蔵文化財調査報告書 埼玉県久喜市教育委員会
 横川好富・塩野 博他 1972 『塚之内遺跡』鷲宮町文化財調査報告書第1集 埼玉県北葛飾郡鷲宮町教育委員会
 渡辺清志・水口由起子 1998 『宿東遺跡』埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書第197集